

椿 姫 そのヴァリエーション

テレンス ラティガン 作

能 美 武功 訳

登場人物

ローズ

ヘティー

ロン

クルト

フィオナ

モナ

エイドウリアン

サム

第一幕

第一場

春

第二幕

第二場

六月

第二幕

第一場

八月

第二幕

第二場

十一月

(場 カンヌにある別荘、シャトー・オーギュスト)

第一幕

第一場

(場 南フランスの、ある別荘のテラス。建物は古びた様子をしていゝ。ほぼ建つてから八十年。もともとは、或る伯爵の持ち物。テラスは広く、ここに置かれていゝ庭用の調度類

は、現代風で、非常に快適に見える。この別荘全体が、現在の所有者によつて改装されつゝあるところ。外壁には一部防水布が掛かつており、テラスからフレンチウインドウでつながつていゝ居間が、客席から垣間見られるが、その居間の家具類には、塵よけの

シートが掛かつていゝ。左手の階段は駐車場と玄関に通じ、右手の階段は庭とプールに通じる。いづれも客席からは見えない。日の出直後。ヘティー(女性、約六十歳)が、夜着に着替えず昼の衣装のまま、テラスの寝椅子で寝ていゝ。毛布は掛けてある。左手の階段からローズ登場。三十代半ば。美人。着物の着こなしに、独特のスタイルと優美さあり。今は夜会服を着ていゝが、流行の先端を行く服装ではなく、自分の個性にあつたものを注意深く研究して選んでいゝ。ヘティーがいゝことに気づかず、舞台奥にある飲み物の盆に進み、一杯注ぐ。グラスにサイフォンでソーダ水を入れる音でヘティー、目が覚める。)

ヘティー こんな時間に帰るつて、どついつこと?

ローズ(振り返る。驚いて。)ヘティー。待つてないでつて言つたでしよう?

ヘティー 確かに言つたわ。だから待つてはいなかつた。

でも、あの私の部屋は暑過ぎ。それにそこ(居間を差す。)は蚊、蚊、蚊。蚊の集会。政治スローガンをブンブン唸つて・

ローズ ここまでは蚊は上がつて来ないわ。

ヘティー それは貴女がそう思うだけ。この別荘、名前を付け替へる時には、ヴィラ・ハマダラカでもするのね。

ローズ（怒って。）待っていられるのは厭って言ってるでしょう、ヘティー。私が外出する度にこうじゃない。起きていて貰う為に貴女を雇ってるんじゃないのよ。

ヘティー そう。その為じゃないでしょうね。今飲んでるのは何？

ローズ 分かった。分かりました。オレンジソーダ。

ヘティー 見せなさい。

（ヘティー、ローズに近づく。ローズの手から飲み物を取り、疑わしそうに嗅ぐ。それからグラスを返す。）

ヘティー カジノではどれくらい飲んだの。

ローズ 一杯。

ヘティー 相当ひどいのをね、きつと。

ローズ そう。ブランドー。ああ、どうしても飲まずにはいられなかった。何が起こったか聞いて頂戴……

（ローズ、急に後悔の表情。素早い動作でヘティーの頬にキスをする。）

ローズ ご免なさい、ヘティー。

ヘティー 何が。

ローズ 「雇っている」だなんて言ったりして。

ヘティー 雇っているんじゃないの。そう言っただけが悪いの。

ローズ その理由を言う方がいいのかしら。

ヘティー 私は雇われた「お友達」。そんなこと、誰が気にしますか。お金を払われないで「お友達」の役をやる方がよっぽど気になるわ。それに、この勢いで行くと早晩そうなる。

カジノで今夜はどれだけどぶに捨てたの。

ローズ たいした額じゃない。そうね、四千五百くらいかしら……

ヘティー（素早く。）ポンド？

ローズ いいえ、まさか。フランよ。四千五百ポンドも、私負けたことあって？

ヘティー ないわね。先週の木曜日からは。

ローズ あれは例外。言ったでしょう？ 肥った男の人がいて、勝ちに勝って、白いチップをかき集めていたの。それを見ていたらどうかなってしまったのって。でも四千五百じゃなかった。二千よ。安心していらっしやい、ちゃんと取り戻すから。いいえ、でも今夜のは酷い話。

ヘティー 四ポンド十が酷い話？

ローズ 金額じゃないの。その成り行き。ブランドーはそのせいよ。（非難するように。）ヘティー、貴女、文無しで私を外出させたのよ。

ヘティー あら、そうだった？ ご免なさい。でも、どうせクルトが一緒だったから、私……

ローズ クルトはカンヌで蹴飛ばしちゃったの。

ヘティー 五千万ポンドも、蹴飛ばし？

ローズ（微笑む。）心配しないで。お仕舞いにしたんじゃないの。でも今夜はどうでもいい退屈な話題ばかり。本当にあきあき。仕舞いには怒鳴りつけたくなったの。「たくなつた」んじゃないわね。怒鳴っていたわ、きつと。私、頭痛がするって言ったの。クルトはギリシヤ財閥の連中にくたぐたと話していたわ。私さつさとおいて出た。

ヘティー 頭痛を使ってさよならね。たいした芝居だわ。

それで？

ローズ それで・・・まだ早かったでしょう？・・・

(ヘティー、腕時計を見る。)

ローズ(辛々して。)ヘティー、毎日必ず十二時までには寝なさい、なんて医者に言われてはいませんかね。

ヘティー(静かに。)医者はそう言っているんです。

ローズ そうだったかしら。とにかく、まだ早いように思った。それにまだもう少し賭けてみたかった。で、ジュアンに寄ったの。殆ど人がいなかった。テーブルも一つだけ開帳。椅子さえなしよ。やっていたのはバカラ。一、三回見ていたわ。胴元に立っていたのが、ひどいめっかちの女。私テーブルに近づいて言った。「バンコ」って。カードが配られて、私は八、で胴元は・・・

ヘティー(ローズと同時に。)九。

ローズ そう。で、私はいつものあの微笑みを浮かべて・・・賭に負けた時のあの取っておきの、いつもの微笑み。そしてバッグを開いた・・・ないの。空っぽ。一フランも。

ヘティー でも貴女が何者かぐらい、その人、分かっていたんでしょ？

ローズ 分かっていたとしたら随分うまく隠していたわ。いづれにしてもジュアンにはもう私、何年も行ってなかったし・・・私、バッグの中を徒(いたづら)にかき回して・・・その時間の長いことしたら。世界の歴史の中で最も長い時間。その間に、さっきのとっておきの笑顔がだんだん凍りついてくるのが分かるの。そしてバッグの中はがらくたばかり・・・ヘティー がらくた！ あのシガレットケースを出せば良

かったのに。

ローズ 少しは真面目に考えて、ヘティー。それをテーブルに出して言うの？ 「これは本物のファベルジエ。私の二番目の夫、ドウ・ボーブレ侯爵からの贈り物。ついでにこれ、この真珠は、つい先頃亡くなった前の夫、マイケル・ブラッドフォードからの。マイケルは映画スター。ご存じでしょう？ それからこのエメラルド、これは今付き合っているクルト・マストから貰った物。ほら、例の銀行家。」こんな馬鹿なことがいえますか。

ヘティー そんなこと言わなくてもいいでしょう？ ただ自分の名前を言えば。

ローズ じゃあ、私の名前は？ 言ってみて。

ヘティー きっと店の人達、気づいていたわよ。

ローズ どの名前？

ヘティー 生まれた時からの名前よ。新聞に載っている名前。

ローズ 気がついていなかったら？ とにかく私、その名前嫌いな。新聞はどうしてもあの名前を使うのかしら。私の正しい名前はブラッドフォード。いつかマストになることがあったとしてもね。いづれにせよ私、四千五百の借りのあるあのめっかち女に、「実は私の名前は・・・」なんて言う気はないわ。言わせようとしたって言うもんですか。(言い止めて飲み物の盆の方を向く。)一杯飲むわ。

(ヘティーがじつと見ているので。)

ローズ 「多くはいけません」が、医者の言葉よ。「全く駄目です」とは言わなかったわ。

ヘティー 分かっています。私だつて聞いていました。

(ヘティー、ローズがブランデーを注ぐのを見ている。)

ヘティー ただ、朝五時半にブランデーをすすめたかどうか、それは疑問ね。

ローズ あの人も知ってはいない。やぶの若僧。誰か別の医者を探さなくっちゃ。

ヘティー そうね。遊び用にもう一人ね。

(間の後。)

ヘティー で、それは言いたくなかつたことね。

ローズ え？

ヘティー 自分の名前。

ローズ 言つたでしょう。あれは私の名前じゃないの。

ヘティー そう・・・それで、そのめっかちの女に何て言ったの？

ローズ 自分が嘘をついていないって事を見せるため、まっすぐその女の目を見たわ。それがまっすぐに見えたかどうか疑問だけだね。相手がめっかちじゃ。それから言った。「ご免なさい、貴女。私、お金を持たないで出て来ちゃつたらしいわ。小切手でしか払えないんですけど。」完璧なフランス語。すまなそうな微笑。滲(にじ)み出てくる誠実な魅力・・・でも無駄。伏魔殿じゃ通用しない。お決まりのスピード型の顎髭の、小柄な男が事務所から出て来た。豚箱行きだったわ、多分。もしあの男の子が現われなかつたら。

ヘティー ハハーン。やっと本論ね。

ローズ ハハーンじゃないわ。

ヘティー 本当？

ローズ 本当。

ヘティー どうして。

ローズ テカテカのこれ。(手で高いヘアスタイルの格好)

ヘティー あらまあ、ボクシング、ウエルター級、オリピック選手つてところね。今時その格好じゃ。

ローズ この子は、バレーのダンサー。

ヘティー で？

ローズ 友達がいいたわ。素敵な、落ち着いた、でもしつかりしていて、ひどく用心深い。男の子の方は・・・そうね、ひどいわ、とにかく。派手好きの、目立ちたがり。私のことは知っていた筈。だつてソフィーなんとかつて女優がいるわね？ その楽屋で会つたことがあるの。その晩私、白のバレシアーガを着ていた。その子、それをやたらに褒めたわ、その時。四千五百。貴女、持ち合わせある？ ヘティー。

ヘティー ここにはないけど、上に行けば。何故？

ローズ 二人がそれを取りに来るの。

ヘティー 何時。明日？

ローズ いいえ。今夜。というのは今朝つてことね。返すのが終わつたらすぐもう一勝負やりたいつて言つてるの・・・

ヘティー (怒つて。)ローズ、なんて話！ 本当に無茶よ。無茶を通り越している。

ローズ だつてお金は返さなきゃいけないでしょう？ それに二人はモンテカルロに住んでるっていうから・・・

ヘティー 郵便がストライキ中とは知らなかつたわ。

ローズ 家に呼ばれたっていうのが見え見えだったの。特に男の子の方が。新しく家を買つたつていう事も知つてい

たわ。

ヘティー（シートが被せてある居間を見て。） 見せるものが沢山あるわね。ローズ・・本当に！ 上げたら、あと一時間はどうしても起きていなきゃならないわ。整理のついでない、隙間風の、ヴィラ・ハマダラカを見せて、そのジゴロを驚かせようって、ただそれだけの為に・・・

ローズ そう。オーギュスト伯の手になる別荘をよ。それにあの子、ジゴロじゃないわ。ちゃんとしたダンサー。スペクトル・ドウ・ラ・ローズ、それにブルーバードも踊っているわ。友達がすごいんだよ。有名なバレー振り付け師。私達がニューヨークに行ったでしよう。あの時見たミュージカル。あれも作った人。（辛々して。） 分かったわ、ヘティー。明日一日中寝てる。

ヘティー 寝ないわね。あの昼食パーティーがあるわ。

ローズ そうだった。じゃあ、午後中・・・

ヘティー モナとお茶。その後、ジョンソン夫妻とカクテルパーティー。

ローズ そうだったわ。酷い話。

ヘティー そう。酷い話。いい？ 私が会います。お金を渡して、飲み物を飲ませて、がらくたを見せる。貴女は寝てるの。

ローズ 駄目ね。どうせ寝ていられないわ。

ヘティー しょうがないわね。じゃ、睡眠薬。

ローズ ゆうべも二錠飲んだ。中毒は嫌。モナみたいにはなりたくない。

ヘティー どうして眠れないの？ ここのせい？（自分

の胸に手を当てる。）

ローズ 違っわ。最近それは感じないの。

ヘティー じゃあ何？

ローズ（軽く。） 何かしら。悔恨ね、多分。過去の罪と恥の生活への。（ヘティーの目が注がれているのを感じて。） 冗談。眠れないだけ。眠れない人っているわ。（テラスの外を見て。） 海岸のこっちから見ると、朝日がどうしてあんなに安っぽい水彩画に見えるのかしら。薄汚れていて、惨めたらしくって、悪臭までしてくる・・・

ヘティー（肩をすくめて。） それがこっちの海岸なのよ、きつと。

ローズ ちょっと洒落（しゃれ）て言っただけよ、ヘティー。

こっち側はこっち側でいいの。こちゃこちゃして、品がないけど、面白いじゃないーブラック・プールとかアトランティック・シティーみたいに。奇麗にばかりしていると、楽しみたい人に悪いじゃない。（耳をすませる。） あの車。ちゃんとここが見つかっただわ。

ヘティー それは見つかるでしようね。マルセイユからだっ

て、ここは見えるんだから。

ローズ（左手の手摺りにより掛かって、呼ぶ。） ここよ。テラスよ。（ヘティーの方を向く。） 薄青のサンダーバード。

ヘティー たいしたものね。

（ロン登場 およそ二十三歳 スポーティーな服装 「ト」下・カーティス」流の髪型。）

ローズ よく捜せたわね。あの人は？

ロン モンテカルロに帰った。謝っておいてくれって。疲れているもんだからって。

(正体不明の訛りで話す。フランス語にも、ロシア語にも似ている。が、基本的には中部イングランド訛り。)

ローズ ジュアンには一緒に行っただんじやないの？ あの
人どうやって帰ったの？

ロン エー、タクシーで。

ローズ(意地悪く。)じゃあ、あの外の青い車、貴方のもの？

ロン いや、違う。彼は金持ちの舞台振り付け師。タクシーも使える。僕は貧しいダンサー。タクシーは使えない。

ローズ そう。(ヘティーを紹介しようとして。)ところで、ご免なさいね。私、名前を覚えるのが苦手なの。それに貴方は難しいわ。

ロン アントン・ヴァーロフ。

ローズ あ、そうだったわ。ムッシュー・ヴァーロフ・・・
レイディー・ヘンリエッタ・クリットン・パリ。

ヘティーとロン(咳く。)はじめまして。

ヘティー 飲み物をお持ちしましょうね。

ロン(「レイディー」の称号に怯(ひる)んで。)ええ、
でも・・・レイディー・ヘンリエッタ・・・僕は自分で・・・

ヘティー いいえ、飲み物の世話は私の仕事です。それに、
この仕事が一番楽しい仕事。何にしますか？

ロン ロゼがありますか。

ヘティー あるわ、勿論。

ロン(ローズに。)素晴らしい眺め。今まで見た中で最高。

そうだ、キャップ・フェラーにあるメイベル・ペンリン家、
あの家からの眺めといい勝負だ。

ローズ メイベル・ペンリンって誰？

ロン ペンリン伯爵夫人。知りませんか。驚いたな。誰でも
も知ってますけど。

ローズ 「誰でも」知ってるっていう人を、特に私、知らないの。で、その家からの眺めがいい？

ロン 素晴らしい。でもこの朝焼けの景色が見られるのは
嬉しいな。特権を享受しているっていう気持ち。南フランス
の朝焼けは世界中のどんな景色よりも上だ。(大きな仕草。)

あの色、なんてすごいんだ。違いますか？ あ。失礼。
(この時までにヘティー、ロゼワインを持って近づいていて、
ロンの大きな動きでワインをこぼしそうになる。)

ヘティー 大丈夫。
ロン そう。リヴィエラの朝焼け。その魔法 その不思議、
安定した美しさだ。そうですね？

(ヘティーとローズ、目を見交わす。)

ローズ(やっと。)そうね。(ヘティーの方を見て。)ヘ
ティー、借りたお金、ヴァーロフさんにお返しして。

ロン(明らかに当惑しているという仕草。)

エー、あれはいいんです。
ローズ(苛々した様子を見せて。)返して貰いたくないっ
てこと？

ロン 都合のいい時で。

ローズ 今が都合がいいの。(ヘティーに。)ついでにブ
ランデーソーダをお願いしますわ。

ヘティ―（行きながら。）駄目。それは自分の墓穴を掘るつてことよ。

（ヘティ―、居間に入る。ローズ、微笑んで、飲み物の盆を見、注ぐつとするが止め、坐る。）

ロン（畏怖の念が声に出そうになるのを抑えながら。）レ
イディー・ヘンリエッタ・クリットン・パリー……エイシャー
伯爵の娘。そうですね？

ローズ ええ、そう。

ロン ここにはもう長く？

ローズ 二年よ。

ロン *Tiens, c'est amusant, ca!*（ふーん、面白いな。）

ローズ *Qu'est-ce qui est amusant?*（何が面白いの。）

ロン（またすぐ英語に戻す。自分のフランス語の発音、ローズの発音よりよくない。）伯爵の娘が、召使いになつてい
なんて。

ローズ 召使いじゃないわ。秘書。社交時の。

ロン ええ、まあ、呼び名はいいですが……あの一族、
ずっと羽振りがいいと思つていました。

ローズ（だんだん声に刺が出てくる。）かつてはそうだつ
た、あの一族。あの人も羽振りがよかつた。でも運悪く人が
死んで相続税のことがあり、いろいろ巡り合わせの悪いこと
があつた。仕事につくことが必要になり、運良くこの仕事か
見つかつた。私も運よくあの人を見つけた。これでこの話は
尽きている筈。そうね。

（間。）

ロン（冗談に紛らそうと。）ボープレー侯爵夫人様はご立

腹遊ばされた。どうかお怒りになりませぬよう。頭に入れて
おいて下されなければ。この哀れなバレエダンサーは、上流
社会のことなら何でも首をつつこんで、知りたがる悪い癖が
あるのです。

（間。）

ローズ（やつと。）ヴァーロフさん、申し上げねばならな
い事が三点。いいですか。第一点。私は何も貴方に怒つては
いません。ちよつと疲れていて、それを見せたかも知れませ
ん。でもそれだけ。第二点。ボープレー侯爵夫人。今は違
います。一人夫を抜かしています。

ロン あ、失礼。マイケル・ブラッドフォード夫人。そう
でした。失礼しました。

ローズ それはいいの。めまぐるしくつて、ついてはいけ
ない筈だもの。それから最後の点。貴方、怒るかも知れない。7
でもどうか怒らないで。物心ついてからこのかた、私が死ぬ
程嫌いなもの、それはごまかしの発音。いいですか、止めて
戴きたいの、貴方のその発音。元の故郷の言葉、バーミンガ
ムの発音にして欲しいの。

（間。）

ロン エー、何のことでしょう。

ローズ バーミンガムなの。そうでしょう。私はめつたに
間違わない。

ロン（強情に。今までの発音で。）何のことが、ちよつと・

（間。）

ローズ いい？ 私は二十歳までファイブ・タウンズ・ア
ヴェニユーの外れのフロッグモア・ロードで育つたの。ブラ

ム訛りは一マイル先からでも嗅ぎ分けるわ。貴方だって私のブラム訛りを嗅ぎ付けている筈。一生涯私達にくつついて離れないものだわ、これは。貴方フロググモアよりもつと酷いところの出ね、きつと。あそこよりもつと北の方、多分。そうでしょう。

(ロン、ローズをじつと見つめる。相変らず礼儀正しい当惑の表情。ヘティー、何か書き付けらしい物を数枚持つて登場。)

ローズ 何をしていたの？ 昔の私宛のラブレターでも読んでいたの？

ヘティー あらあら、気取っちゃって。貴女の恋人で手紙なんか書ける人いたかしら。違つたわ。金庫の中にはラブレターよりもつと面白いものがあつたの。

ローズ 例えは？

ヘティー 請求書。

ローズ(欠伸。) ああ、あれ。

ヘティー(ロンに。) 四千五百でしたわね。

ロン(今までと変わらないアクセント。) いいえ、四千三百五十です。お釣りはあります。

(ヘティー、ロンを見る。ロン、ヘティーと目をあわせない。ヘティー、仕様がないうように肩をすくめる。ロン、ヘティーに小銭を渡し、紙幣を受け取る。)

ヘティー 海岸のこつち側で、ごまかさな人がいるなんてね。驚いた。さあ、私は寝るわ。(ロンに。) ヴァーロフさん。この人、早く寝せてあげなきゃ駄目よ。病人なんですからね。

ロン(まだ同じアクセント。) ああ、それはいけませんね。

何の病気なんですか。

ヘティー 肺結核。

ローズ(怒つて。) 何、ヘティー。貴女の考えていることつて何時も小説じみているのね。(ロンに。) ちよつと肺の調子が悪いの。それでストレプトマイシンによる治療中。

ヘティー その投与の度に気絶。

ローズ アレルギー、単なる。当たり前でしょう？ 今は

素敵な新しい錠剤をくれるわ。

ヘティー それをブランドデーで流し込むの。嗅ぐのさえ医者から禁じられているつていうのに。

ローズ ヘティー、貴女、もう寝なさい。貴女の話うんざりだわ。ヴァーロフさんもきつとうんざり。

ヘティー そうね。じゃあお休み・・・こんなに明るいん

じゃ、「こんにちば」の方がいいかしら。

(ヘティー退場。間。ローズ、飲み物の盆に近づく。)

ローズ お代わりは？

(ロン、空のグラスを持つて、ゆつくりとローズに近づく。ローズ、ヘティーが開けた罐を取つて、彼のグラスに注ぐ。自分にはブランドデーとソーダを注ぐ。)

ロン(ローズのグラスを指差して、はっきりしたパーミンガム訛りで。) そいつは医者に止められてるんじゃないのかな、ねえさん。

ローズ(同じパーミンガム訛りで。) そう。仰せの通り。

飲んじゃ駄目。でも、ほら・・・

(ローズ、柔らかく笑つ。始めてロンを気に入る。ローズ、

ロンの袖に触れて、今までの普通の言葉つきに戻る。)

ローズ 有難う。それにご免なさい。でも謝るより有難うっていう気持ち。

ロン（訳註 酷い訛りではない話し方。）場所は違っていた。アケイシア通り。

ローズ レミントンロードの外れ？ あら、本当にすごい所ね。ウオリック・アームズに行ったことある？

ロン 行ったかだって？ 当然。ただアルコールは抜きだった。バレエの練習をしていたから。だけど土曜日の夜はよく行ったな。

（ロン、ここでは少しブラム訛りの、自然な言葉つきで話している。）

ローズ ハリーズ・ホットスパーズ楽団がラウンジで演奏していた頃ね・・・あ、違う。これ、貴方よりもっと古い時の話。

ロン いや、僕の時にもまだやってた。一九五二年の頃も。酷い演奏だったなあ、あの連中。

ローズ 酷かった？ 素敵だと思っていたわ、私。あの頃の夢。それは、誰かが私を土曜日の夜あそこへ連れて行ってくれてジン・ベルモット（訳註 ♯ はイタリアン ベルモット。このカクテルはマテニだが。）を奢って貰うこと、そしてミス ローズ・フィッシュの特別リクエストで、*Es a Lovely Day Tomorrow* を聞くことだった。

ロン あそこから出て来たのはいつ？

ローズ 戦争が終わった年。

ロン（尊敬するように。）それから随分遠くに来たものですね。

ローズ そう。遠くに。貴方もそうだね。

ロン いや、僕はまだ出て来ただけ。どこにも行きついちゃいない。でも僕はやる。手相見、水晶の占い師、誰もが僕のことを見て、いい運勢だって言っただ。

ローズ 運勢って、才能のこと？

ロン いや、金が入るって言っただ。だけど同じことじゃないかな。才能と運勢。

ローズ ええ、そうね。（この話題、ローズにはつまらなさそう。突然レコードプレイヤーの方を向く。）貴方、どんな音楽が好き？ ヴァーロ・・・エート、本当の名前は？

ロン ヴェイル。ロン・ヴェイル。

ローズ あら、どうして名前を変えたの？ いい名前じゃない。アントン・ヴァーロフだなんて、今じゃ古くさいわ。

ロン フランスじゃ、まだ古くさくないんだ。連中自身が古くさいから。ここ以外のどこだって、ロナルド・ヴェイルの方がずっといい。だけどここじゃ・・・そう、たしかにロイヤルバレエは悪くないとは思っている。「フォンテーヌ、ソウムズ、アシュトン、いいね。だけど本物のバレエといやあ、何て言ったってディアギノフ、フォーキン、カルサーヴィナさ。」とくる。ロシア名前でないと駄目なんだ。それに国籍をぼかしておくとか色々いい事があるし・・・

ローズ いい事？ どんな？

ロン それは、いろんな具合に。驚くだらうな、きっと。

ローズ 驚くとは思えないわね。音楽は何がいい？

ロン（レコードプレイヤーに近づきながら。）何でも。バレエ音楽以外なら。

ローズ ロックンロール？ クラシック？ それとも何か
ロマンチックなもの？

ロン ロマンチックなもの。

(突然、非常な自信を持ってロン、ローズの腰に手を回しキ
スをしようとする。優しくローズ、ロンの自信に匹敵する技
術を持ってロンの意図を躲(かわ)す。)

ローズ 掛かっているものをかけるわ。

(ローズ、スイッチを入れる。暫くすると「椿姫」の序曲が
聞こえてくる。)

ローズ しようがないわね。これは好みじゃないの。フィ
オナだわ、きつと。

ロン フィオナ？

ローズ 私の娘。十六歳。貴方のようにロマンチックなも
のが好きなの。私の趣味は違つわ。

(ローズ、掛かっているレコードを止め、他のレコードを捜
す。ロン、急にローズに近づき、相手の身体を回し、自分
の正面に向かせる。)

ロン 何考えているか、僕には分かつてる。

ローズ そう？

ロン 僕が本気じゃない、と思っっているんだ。サムのと
を考えているんだ。

ローズ サム？

ロン サム・デュヴィーン。振り付け師。(ローズが相変
らず思い当たらない様子なので。)

ローズ(静かに。) ああ、あの人のこと。ねえ、貴方、私、

サム・デュヴィーンのことなんか考えてはいなかったわ。本
当に。エート、レコード、何にする？

ロン(ローズをまたこちらに向けて。) 分かつてる。僕は
すぐそう見られるんだ。だけど僕のせいじゃないぞ。そう。
まづこの髪形だ。・・・勿論変えたって構やしない。だけど何
故変える必要があるんだ。

ローズ そうよ。(変える必要ないわ。)

ロン バレーの世界にいるっていうことからしてそうなる
んだ。疑わしきは罰せずって事を女は知らないのか。・・・
(猛烈な勢い。)

サム・デュヴィーンは僕のいい友達だ。そ
れ以上でも以下でもないんだ。

ローズ そんなに苛々しなくていいの、ヴェイルさん。あ
の人の事で私が知っていることっていったら二つしかないわ。
一つは、いつか見たミュージカルであの人が素敵なダンスを
作っていたという事。もう一つは、青い色のしゃれたサンダー
バードを持っているという事。さあ、レコードを選ばせて
頂戴。

ロン(暗い調子。) あれもまづかったんだ。分かつてる。
じやい。彼は僕に自分の車を運転させた。それにモンテカ
ルロの自分の別荘に僕を住まわせている。そうだ。だから
その目で見れば彼はそつかもしれない。だけどそれでどうし
て僕がそうなんだ。

(ロンからの提案がないのでローズ、自分でレコードを選び、
かける。)

ローズ これは害がないわ。「会話のためのバックグラウ
ンドミュージック」。続きは？ さあ、どうぞ。

(ローズ、ロンから遠く離れて坐る。ロン、すぐ後に続く。)

ロン サムが僕に感じていること、それは彼が勝手に考えているんだから、僕にはどうしようもないじゃないか。そうだろう？

ローズ(静かに。)訊かれたから答えますけどね、ヴェイルさん、どうしようもないっていうのはおかしいわ。できる事はある筈よ。さあ、何か他の話をしましょ。

ロン 僕が今言った事、信じてくれる？

ローズ 何の話なのか、私にはあまりよく分からないけど。

ロン 僕が女を追っかける事が出来るかっていう事。

ローズ(問の後。)貴方を追っかける女がいたら、それは貴方も追っかけるかもしれないわね。

ロン(必死に。)僕が貴女の事を追っかけているのって、信じられる？

ローズ 今の私の答に当て嵌めれば、信じられないって事になるわね。

ロン(感心したように微笑して。)これはいい。本当にいいや。いいだけじゃすまない。凄いいんだ、貴女は。分かってきた、僕には・・・

(車の音がする。)

ローズ しようがないことになったわ。

ロン こんな時間に誰が来るっていうんだ。

ローズ(急いで。)そのあたり消して。

ロン(テールランプのスイッチを捜しながら。)どこ？
スイッチ。

クルト(舞台裏で呼ぶ。)ローズ。起きてるのか。

ローズ こんなに遅いのに。(呼ぶ。疲れた声。)ここよ。起きてるわ、クルト。

ロン(手摺りから下を見ながら。)ええっ？ すごい車だぞ。運転手つきだ。朝の六時！ こんな朝っぱらから運転手をつけていられるとはな！

ローズ(肩をすくめて。)それに六人いるわ、お抱えの運転手。

ロン クルト・マスト？

(ローズ、頷く。)

ロン これが生きてるっていうことが。

(クルト・マスト、テラスに現われる。三十代なかば。美男。但し、笑わない、無表情な雰囲気での美男。背広(今は平服)は、ロンドンで仕立てたもの。英語には強い訛りはないが、¹語彙と言い回しは、主に戦後のアメリカ駐留軍から習ったもので、時々不釣り合いに品のない表現が混ざる。)

(クルト、ロンに目もくれず、まっすぐローズの方に進み、キスする。)

クルト 頭痛はどうだ？

ローズ まだね。(ロンを指差して。)こちらは・・・

(クルト、ロンは無視し、レコードプレーヤーに進み、スイッチを切る。それからローズの方に戻る。)

クルト アスピリンとサポナリルを飲んでおねんねしていなきゃいけない筈だぞ。なんていう馬鹿だ。夜ふかしも度が過ぎている。もう朝だぞ。

ローズ そうね。紹介するわ・・・

クルト 別荘に帰る所だった。道路からこのテラスの灯が

見えた。それに君の動いている姿がね。何をやっているんだ、こいつは。一体いつになったら分かるんだ。よし、行って、「こんな馬鹿なことは止める。そのうちどうなるか分かっているのか。」そう言おうと思っただ。いいか、ローズ、夕べ私から逃げて行ったのは二時三十五分だった。あれから三時間半。君は一体何をしていた。

ローズ このアントン・ヴァーロフさんと話していた、その時間が少しあるわ。こちらヴァーロフさん。・・・マストさん。

(やつとクルト、振り向き、ロンを見る。ロン、優しくクルトに微笑む。クルト、微笑を返さない。ただ頭を下げる挨拶のみ。)

クルト マストだ。

(二人、握手する。)

クルト ロシア人なのか。

ロン いいえ、イギリス人です。

クルト (頷く。) そうか、そうか。(唐突にローズに向き直って。) ローズ、ああ、ローズ。私があつたのギリシャ財閥の連中をやったのを聞いていたろう? みじん切りに切り刻んでやったんだ。(相応しい仕草をする。) 明日の晩は、シャトー・ドゥ・マドリッドであいつらにたつぷりとマッシュルームソースをかけて、頭からムシャムシャ食ってやる。(ローズの両手を取って。) 九時十五分前にあそこに二人で着いていなきゃな。

ローズ 気分が悪かったら行かないわ。

クルト (短刀がきらりと光るような鋭さで。) 明日は気分

がよくなるんだ。頭痛はなくなる。七時半に呼びに来る。時間厳守にしてくれ。妃殿下を待たせる訳にはいかない。

ローズ ロティー? あの人生涯でも待つわ。ただで食事が出来るとなったら、地中海が凍りつくまでだって待っている。

クルト (間の後。) 明日の晩は私は妃殿下を待たせるつもりはない。

ローズ そうね。行儀作法で悪い噂を立てられたくないものね。

クルト (また、間の後。) 頭痛がよくなったり悪くなったりするんだな、今夜は。カジノでもかなり酷い事を言っていた。思い出した。(陽気に笑う。) 駄目駄目。このクルトを君から無理矢理引き離そうとするのなら、ただ気の利いた台詞くらいじゃすまない。だけどもさか引き離したい訳じゃないだろ? まあ、ローズ。今だって、これから先だって。

(クルト、両手をローズに回す。)

ローズ ヴァーロフさんを私達、退屈させているんじゃないかしら。失礼なことよ。(クルトの手をすり抜けて、ロンの方を向く。) もう一杯どうかしら。

ロン いいえ、結構です。(遠慮がちに。) 僕はもう出た方がいいんじゃないかと思って・・・

ローズ (しっかりと。) 駄目です、今はまだ。クルトの言葉遣いは許して戴かなければ、ヴァーロフさん。この人、アメリカ駐留軍から英語を習ったの。勿論普通のアメリカ人は、私達イギリス人よりずっといい英語を話すわ、でもそういう人達には習わなかった。当時闇市で活躍していたんですから

ね。驚くにはあたらなけれど。さあ、もう一杯だけロゼを如何？

ロン では、戴きます。

(ローズ、グラスを受取り、飲み物の盆に進む。)

ローズ クルト、貴方は？

クルト 「冗談じゃない。

ローズ コカコーラならと思ったんだけど。

クルト いや、いらぬ。

(クルト、ここに到って始めてロンを意識する。奇妙だ、という表情。)

クルト こんな時間に人の家を訪問というのは、どういことですか、ミスター・ヴァーロフ。

ローズ(盆のところから。)(ヴァーロフさんの方でも、貴方に同じ事が言える筈だわ。さあ、ヴァーロフさん。

(ローズ、ロンにグラスを渡す。クルト、片方から他方へと目を移す。それから突然思い当たる。)

クルト そうか、分かった。こいつは新聞記者なんだ。

ローズ(急いでロンを抑えて。)(勘がいいのね。素早いわ。

クルト 私を騙そうだったって、そつはいかない。連中、記者に見えないようにしてるんだ、最近は。しかし私の目はごまかされない。ミス・フィッシュにインタビューか。

ロン エー・・・

ローズ そう。インタビュー。

クルト この時間にするとは頭がいいな。昼間はどうせ駄目なんだ。何新聞だ。

ローズ デイリー・メール。

クルト いい新聞だ。アメリカ駐留軍、闇市、この話は願下げに欲しいな。ミス・フィッシュは冗談が好きでね。しかし私に会った事は書いて貰いたい。それからデュッセルドルフで十二月十七日、式を上げる事もね・・・これは私の誕生日なんだが・・・

ロン(この話には興味を惹かれて。)(そうなんですか。成程。分かりました。

クルト 君はまた、どうして私がデイリー・エクスプレスのセフトン・デルマーと喧嘩しているか知りたいだろう。いか、あいつが私のことを「闇市の帝王」だの「屑屋の親父財をなす」だの、そんな、奴の言い方に腹を立てているんじゃない。私は貧民窟あがりだということを恥じていないのだ。

それから、ぼる儲けの話・・・一九四五年にアメリカで買占めたがらくたを、朝鮮戦争に乗じて十倍にふっかけて売ったっていうやつ・・・この話に怒っているんじゃない。とてもない。褒められているだけだ。事業家っていうやつはどこでだって、とんでもない悪党と相場は決まっている。特にドイツ人事業家とくれば、例外なく、世界一とびきりの悪党だ。中でもこの私。ポケットにたった五十ペニツヒ・・・占

領下での金のあのペニツヒだぞ・・・それを持ってデュッセルドルフで倉庫屋から始めた。それが今じゃ、シュロツス・グルトハイムに住んでいる。蓄えも五千万マルクだ。西ドイツマルクでだ。(そいつが悪党でないわけがない。)(連中が何を言おうと、その私が毛程も気にかける訳がない。しかし、「ネオナチ」とは何だ。これだけは我慢ならぬ。こいつだけはな。いいか、これは必ず書いておいてくれ。クルト・マス

3

トは、社会民主党なんだ。

ローズ この間の選挙では、じゃあ、それに入れたの？

クルト この間の選挙は行きもしなかった。アデナウアーじゃあ、入れる気はしないね。とてもそんな気は。今の社会民主党じゃあな。これは真面目だ。私の誠実な信念だ。(ロンに。)分かったな、兄さん。

ロン ええ、ちゃんと分かりました。

クルト ネオナチ！ あいつら一体何を考えてるんだ。人を馬鹿にして。これで言いたい事は全部だな。どうやら。何か質問があるか。

ロン いいえ、それだけ聞けば。

クルト なかなか感心な奴だな、君は。朝の六時から仕事とは。私もそうだった。君もひよっとして、この調子で財をなすかもしれない。よし、もう君とミス・フィッシュをこれ以上邪魔しない。(ローズの方を向いて。)じゃあな。お休み。

(クルト、ローズの唇にキスしようとする。しかしローズ、頬を差しだす。クルト、仕方なくこれを受け入れる。)

クルト よく寝るんだな。睡眠薬を飲むんだ。あれは癖にはならん。最新のやつだ。特別に空輸させたんだからな。

(ローズを、後ろから親しそうに叩く。)
明日は頭痛はなしだ。いいな。七時半ピツタリ。頼むぞ。

(クルト、急に回れ右。そして退場。間あり。)

ローズ(やつと。)(ご免なさい。)

ロン いや。面白かった。

ローズ あの人、新聞記者が怖い。ああ言えばすぐ出て

行くと思つて。

ロン これから結婚しようとする人をそんな風に言つて良いでですか。

ローズ いいの、あの人そういう人。

ロン 安定した身の落ち着け先ですね。

ローズ そう。安定し過ぎて、身動きがとれないぐらい。

(ロン笑う。グラスを上げて。)

ロン エート、なにしろ・・・おめでとございます。

ローズ 本気で言ってるの？

(間。)

ロン この帝王がお嫌いなら、何故別の帝王にしないんですか。

ローズ 帝王なんてものを私ぐらい良く知るとなると・・・⁴
・貴方だつてそのうち知るようになると思つけど・・・(悪戯っぽく。)
・女のね、勿論、貴方には・・・いいボディ、いいルックスっていう訳にはいかないの。クルトぐらいのはまだずっとましな方。

(ロン、立ち上がり、ローズの傍を優美に歩く。見かけ上の目的はグラスを盆の上に置きに行く為。本来の目的はローズに自分のスタイルのよさを印象づける為。)

ロン ウーン、スリムな身体・・・ね？

ローズ(ロンを見て面白がる。)
帝王を標準にすればね。

バレーの標準じゃ、どうかしら。ロゼをもつ一杯如何？

ロン いや、命令は聞かなくちゃ。夜更かしはこれで終。

ただど行く前に一つだけ訊いていいかな。どうやってこつたの？

ローズ こうなつたつて？

ロン ほら、こうなつた。(別荘全体を表すように手を動かす。)伯爵、侯爵、映画俳優、帝王・・・最初の最初は誰？(間。ローズが冷静にロンの無礼の度合を計る時間。その後、彼に答える事に決める。)

ローズ 弁護士。名前、ピーター・ホーキンス。自宅、エッジバストン。カートライト・アンド・ホーキンス弁護士事務所経営。住所、コマース・スクエア二十三。一九四三年、私はそこに雇われ、その後、結婚。二年後にピーター・ホーキンス死亡。ちよつとした財産を遺す。それを持ってここに来た・・・いろんな人に出会つた・・・

ロン 事務所つて言つた？ だけどどこかで歌つていたんじゃないなかつた？

ローズ クラブで？ とんでもない。そんな話、誰か知らないけど、よくでつち上げたわね。水商売なんかじゃなかつた。タイプピストよ。

ロン(笑いながら。)タイプピスト？

ロン 何がおかしいの。

ロン(やはり笑いながら。)貴女がタイプピストだつたつて、ちよつと想像して・・・タイプライターにかがみこんでいるその姿を。両手に腕輪。長い真珠のネックレスが、ガチャガチャタイプにあたつてるところを・・・

ローズ(苦々しく。)真珠も腕輪もなかつたわね、その頃は。

ロン いい？ 僕はね、大抵の事は鵜呑みにする性質(たち)なんだ。「あいつをかつくのは訳はない」。みんな言つ

てる。だけどこれは駄目だ。貴女がタイプピスト？ これだけは駄目だね。

(ローズ、キツとロンを睨んだ後、急に居間に退場。すぐ戻つて来る。手にポータブルタイプライターとタイプ用紙一枚。テーブルにタイプを置き、開き、明らかに慣れた手付きで、用紙をタイプライターに挟む。それから坐る。背中を観客に向けて。腕輪を外し、指を開いたり閉じたりして慣らす。)

ローズ さあ、いいわ。何でも言つてみて。
ロン 言つ？ 何を。

ローズ(慎重に言葉を選びながら。)何でもいいから言うの。でも大体このぐらいの速さ。これ以上遅くする事はないわ。分かつた？ じゃあ。

(間。)

ロン 親愛なるブラッドフォード夫人、ボーブレイ侯爵夫人、親愛なるレイディー・・・エート、何かな？ ハンタークーム(訳註 詳しい説明はないが、ボーブレイとブラッドフォードの間にある夫らしい。)親愛なるホーキンス夫人。それから、これを忘れてはいけない。親愛なるミス・フィッシュ。ロン・ヴェイルからのメッセージ、下記の通り。

(ローズ、言葉の意味には全く注意を払わず、静かな、よく訓練された、確かな手付きで、タイプしていく。ロンが息継ぎの為ポーズを取るとローズ、少し屈んでタイプライターを覗く。)

ロン あの晩、ソフィーの楽屋に行つて、貴女がああ白いドレスで立っているのを見てからというもの、僕は他の事は

何も考えられなくなってしまうた。貴女のあの姿、あんな心を打つものを、生まれてこのかた僕は……

ローズ（静かに。）速過ぎ。

ロン 生まれてこのかた僕は、見たことがあつたらうか。

それに今夜、貴女に偶然会えて、話せて、おまけにここに来てもいいと言われて……ああ、こんな事が僕の生涯に起きたなんて。信じられない。（ちよつと間を置く。）こしらえた発音で喋つた事。失礼な事でした。ご免なさい。でもあれはただ、いいところ見せたくつて。背伸びして。いつもの僕の悪い癖です。（また間。）今夜のこの御招待。本当に有難うございました。そして出来れば……これを言つていいのかな……出来ればもう少しここにいていいでしょうか。これからモンテカルロ。いやになる程の距離。ちよつと飲んだ後、朝のこの時間にあそこまで帰ると考えただけで、ちよつと……これで終……だな。そう。最後に一言。僕はそれでもまだ貴女がタイプだったなんて、とても信じられない。

（最後の一文は速く言われ、ローズが規則正しいタイプを終えるのに少し間がある。それからローズ、紙を引き出し、ロンの方を向き、紙を渡す。ロン、ローズを暫くの間見つめる。正式には訊ねていない、書き取らせた質問に対する答を求め。しかしローズ、これを無視し、向きを変え、煙草に火をつける。）

ローズ 誤り、なしね。

ロン（紙を見てから。）なし。完璧だ。分かつた。撤回する。確かにタイプリストだったんだ。

ローズ そう。それにとても優秀なね。

（ローズ、ロンに近づき、彼の手から紙を取り、読む。ロン、ローズの頭の上から見下ろしている。どうしたらいいか困つた表情。）

ロン（ちよつと。）それで？

ローズ（見上げず。）それで、つて？

ロン（急に。思い切つて。）それで、いていいのか、悪いのか。

（間。ローズ、相変らず紙を見つめている。）

ローズ 間違いをやってる。「生まれてこのかた」。「生まれれてこのかた」。

（ロン、怒つてローズの手から紙を取り上げる。）

ロン これは記念に頂きます。いいでしょうか？（ロン、紙を畳み、ポケットに入れる。）お休みなさい。御招待有難うございました。

（とつてつけたような大袈裟な行儀正しきで御辞儀。階段に向かう。）

ローズ ヴェイルさん。

（ロン、立ち止り、振り返る。）

ロン ロンです。名前は。

ローズ 怒らないで、ロン、私のことを。私、怒らせようとしているんじゃない。感謝しているの、貴方のさっきの優しい言葉に。言つて、怒つていないって。

ロン（ぶっきらぼうに。）いいんだ。僕はクルト・マストじゃない。貴女に上げられるものなんか、何一つないんだ。

ローズ（誠意を込めて。）とんでもない。沢山あるわ。本

当に沢山。貴方って魅力のある人。貴方とやら死んでもいい
ていう女の子、掃いて捨てる程いるでしょうね。

ロン でも勿論貴女はそこに入っていない。

ローズ ー、私はね、死んでもいいっていう気になった
男が、今まで一人もいなかった。自慢しているんじゃないの。
私自身が死んだような女なのかもしれない。だからそんな具
合に・・・ねえ、ロン、よく貴方の目で見て頂戴。私がそん
なに素敵な、価値のある女である訳がない。四、五分も経つ
て、あの綺麗な青いサンダーバードで、モンテカルロを飛ば
していると、ああ、助かったって思うわ。あんなのに引っ掛
からないで良かったって。さようなら。

(ローズ、ロンに近づき、握手する。)

ローズ それはそうと、この次の近くを通りかかったら、
必ず声をかけて頂戴。一杯やってね。私の友達にも会って戴
きたいわ。

(ロン、怒ってローズを押しやる。)

ロン フン、僕がわざわざここまでやって来たのが、そん
なことの為だと思っているのか。僕が好きなためにここへ上
がって来て、貴方の格好いい、金持ちの友達と一杯やれる、
そんな事の為に。そう思っているんだな。

(ローズ、ある同情と理解をもってロンを見、答えない。)

ロン (荒々しく。) そうなんだな。

ローズ その質問には答ええないわ。

ロン (激しく。) そんなくだらない事の為に僕がここに来
たと思っているのか。分かっている筈だ、僕の求めているも
の、それは君なんだ。

(ローズ、ロンを見続ける。ロン、怒って煙草を灰皿に押し
潰す。)

ロン 僕は帰る。

ローズ (静かに。) 貴方いくつ?

ロン (振り返って。) 二十六。

(ローズ、頷く。)

ロン いいか、年の事なんか頭からなくすんだ。それに僕
は年下の女に惚れたことは一度もない。いつだって年上だっ
た。僕はいつも言ってる。男と女が本当にいい関係になれば、
年令の差なんて全然問題にならないんだって・・・

(ローズ、頭を後ろに反らして、心から可笑しそうに笑う。)

ロン (驚いて。) 何が可笑しいんだ。

ローズ 昔の私を見ているみたい。二番目の夫になる人と
散歩に行った時の私と。「本当にいい関係」っていう言葉も、
そっくりそのまま。ただ私の餌にかかることになっていたそ
の人は五十代後半、そして私の年は、今現在まだルーレット
に乗せられる数。だから笑ったの。貴方って二十代後半ね。
そうよ、ロン。私達二人で問題なのは、年じゃないわ。

(ロン、最後の頼みと、ローズに近づき、手を取る。)

ロン (優しく。) 年じゃないんだね。そしたら何?

(間。)

ローズ (突然襲って来る惨めさ、そして、本当の惨めさで。)
ああ、分からない。ただ私のせい。私っていう人間のせいだ
わ。

ロン そんな事、忘れるんだ。

ローズ 忘れる? 貴方が私だったら忘れられるって言う

の！

（ローズ、ちらと具体的にそれを想像して、笑つ。）

ローズ 貴方が私。可笑しいわ。九歳若い私がそこに立っている。貴方が私。可笑しい。ロン マイナス アケイシア 通り イコール ローズ マイナス フログモア通りね。で両辺からパーミンガムを引くの。何が残る？ ロン イコール ローズじゃない。ローズ イコール ロンよ。すると、貴方が私を愛するってどういう事？ つまり貴方が自分を愛しているっていう事。ナルシストっていう事よ、ロン。

ロン（ロンの顔、ローズに非常に近くなっている。）僕は聞いていない。僕は見ているだけだ。ああ、なんて綺麗なんだ。ちょっと許してさえくれれば、僕は君に夢中になれる。今まで好きになつたどんな女の子よりも。（ロン、ローズを引き寄せる。今回はローズ、避けようとしなない。ロン、キス。これも避けない。ややあってローズ、ゆっくり身をほどく。ロンの顔を優しく叩く。）

ローズ 車を車庫に入れた方がいいわ。ここには仕事師達がいる。口がうるさいの。どうやっても結局は見つかつてしまふけれど・・・

（ロン、ローズの額にキスをする。やっと勝ち取つたという短い微笑。それから、素早く回れ右をし、階段へ進み、玄関から出る。暫くして、車のエンジンの音。）

（ローズ、その間ロンを見送る。困つたような表情。その後、飲み物の盆へ進む。ブランデーソーダを作っている間に、彼女の娘フィオナ、突然フレンチウインドウから登場。フィオナ、水着を着て、タオルとポータブルレコード プレイヤー

を持って来る。母親を見て立ち止る。それから右手に進む。ローズ、フィオナを見る。）

ローズ フィオナ。貴女、今朝は早いのね。

フィオナ そうでもないわ。いつも朝食の前に、ひと泳ぎするの。それに朝食は七時だし。

ローズ あら、七時？ それに泳ぐの？ 知らなかったわ。

フィオナ 日の光を無駄にしたくないの。

ローズ そうね。いい考えね。（頬にキスする。）お早う。

フィオナ お早う、ママ。

ローズ ゆうべは何をしたの。

フィオナ ここでヘティーと夕食。それから「天国と地獄」へ行つたわ。

ローズ 天国と地獄？ それ何？ ナイトクラブ？

フィオナ 違う。ただのカフェ。二階は普通で、そこが天国。地下が面白いの。それが地獄。いろんな面白い人達が来てる。集まりがあるって、ジャン・ルイが誘ってくれたの。

ローズ ジャン・ルイ？ 小説を書いているっていう人？

フィオナ そう。ヘティーが酷い事言つたわ。書いてるの、実存主義の小説なのって。

ローズ 何が悪いの、そう訊いて。

フィオナ（本当にショックを受けて。）ママ、実存主義なんてもう大昔の話よ。

ローズ あら、そう？ 知らなかったわ。

フィオナ 「怒れる若者達」だとかジェイムズ・ディーナリーだのと同じ。もう時代遅れ。

ローズ そうなの。じゃあ、その人の小説、何が書いてあ

るの？

フィオナ 若い人達が登場人物。互いに性の関係は持つんだけど、楽しまないの。でも他に取り立ててする事もないから、その関係は続ける。

ローズ 面白そうね。

フィオナ 面白いわ。「どうでもいいや」とか「勝手にしやがれ」の考えを一步進めたものね。その内の二人が恋に落ちるの・・・十九世紀流の、例の恋よ・・・でも二人とも何も出来ない。身動きが取れない。どうしようもないのね・・・で、二人で自殺してしまう。

ローズ ロマンチックじゃないの。

フィオナ そう。それが彼の派。ネオ・ロマンティック派なの。サンジェルマンで、今一番のはやり。さてと・・・

(フィオナ、右手の方に動く。ローズ、見守る。)

ローズ 貴女、今晚何か予定あるの、フィオナ。

フィオナ (何か来るぞ、という警戒心。)(いいえ、ママ。何故？)

ローズ (気を遣いながら。)(夕食でもどう？ もしよければ。二人だけで。)

フィオナ (問の後。気がなさそうに。)(そうね、ママ。いいわ。)

ローズ 寄宿舎から帰って来たっていうのに、二人であまり会っていないわ。少しちゃんとした所で食事を取って、その後、その「天国と地獄」へでも連れて行って頂戴。

フィオナ (問の後。)(面白くないって言うわ。きつと。)

ローズ どうして分かるの。

フィオナ 分かるの。それだけ。ママ向きではないわ。少なくて地獄の方は。

ローズ みんな若い人だから？

フィオナ 違う。かなり年配の人も来てる。そうね、絵描きの人があるわ。奥さんを連れて。毎晩。二人とも四十過ぎ。年じゃないわ。そうね・・・(問)(着て行くものからもう・・・)

ローズ スラックスを履いて、髪をチリチリにしたら？

(フィオナ、微笑む。礼儀を失わない程度に。しかし「これで駄目」という笑い。ローズ、急にフィオナから視線を外す。)

ローズ あの飛び込み台は駄目よ。壊れているんだから。

フィオナ 分かったわ。

(フィオナ、退場。ローズ、彼女を見る為に手摺りに進む。)

ロン、静かにテラスに登場。ローズを背後から見る。しかし1すぐには近づかない。感情の高ぶりを抑える為に必要な配慮と思われる。近づくと代わりに、別荘の玄関を見、次に景色を見る。それからやつと手摺りのローズに近づき、腕をローズの腰に優しく回す。)

ロン 子供？

(ローズ、頷く。)

ロン いつも一緒にいるの？

ローズ いいえ、イギリスの学校。寄宿舎生活。帰って来てひとつきになる。イギリスはあの子の好み。私はあまり行かない。でも面倒は十分みてやっているつもり。

ロン 最初の弁護士っていう人が父親？

(ローズ、頷く。)

ロン やせつぼつちのちびちゃん。貴女に似ている所は一つもないな。

ローズ（あつさりど。）似てない？ そうかしら。でもあの子の顔、形、好きなの、私。（急に大きな声。）駄目って言ったでしょう、飛び込み台は。

（ロン、すぐに頭を引つ込める。）

フィオナ（舞台裏から。答えて。）大丈夫よ、ママ。試してみただけ。

ロン 見られたかな。

ローズ（気のない様子で。）そうね。見えたでしょう。でも、関係ないの、そんな事。

ロン 彼女、こういう事はとやかく考えないっていう事？

ローズ 考えるわ、そりゃ。何かは。でもあまりは。

ロン つまり・・・シヨックは受けない？

ローズ（固い笑い。）アケイシア通り仕込み・・・ずけずけつと来たわね。（娘を見ていた視線を戻してロンを見る。）いいえ、シヨックは受けない。何かあるとしたら、楽しいっていう方。また噂通りのいつもの癖、そう思っているでしょう。それに、私ができることであの子が面白いと思うのはそれぐらいしかないの。そう。残念ながらあの子はシヨックなんか受けないわ、ロン。あの子にとってこの私は退屈なだけ。死ぬ程退屈なの。

ロン（まずい話題になったという気持ち。）それが気になるんだね。

ローズ ええ。

（ローズ、また手摺りのあちらの方を見、プールを眺める。）

ロン 子供は？ 他には？

ローズ いないわ。あの子で十分。（笑って。）四人も夫がいたんですもの、もつとあつてもよかった・・・筈ね。でもあの子の後はちよつとつまういかなかったの。

ロン 手が掛かり過ぎ？

ローズ 手を掛け過ぎ、ね。この別荘を手に入れたのも、あの子が太陽が好きだから。（呼ぶ。）もうそのくらいにしたら、フィオナ。疲れるわよ。

フィオナ（舞台裏から。）分かったわ、ママ。

（ローズ、フィオナから目を外す。）

ローズ（やつと。）さてと、お部屋に案内しましょうか。

ロン ええ、じゃあ。

（ローズ鎖き、居間の方へゆっくり進む。ロン、後につく。ロン、花瓶のところで立ち止る。）

ロン 赤い薔薇だ。（別の花瓶を指差し。）赤い薔薇。

（また別の花瓶。）赤い薔薇が好きなのか。

ローズ 赤は私の幸運の色。薔薇は私の名前。迷信ね。一種の。

（ローズ、ロンの両手を握る。頭を下げ、早口で、非常に静かな声で言う。）

ローズ ロン、モンテカルロは遠くないわ。心からそう思っているの、悪いことは言わないわ・・・

ロン（荒々しく。）どうしてそんなに怖がるんだ。

（ロン、ローズの肩を掴み、腕の長さまで離し、目を覗き込む。）

ローズ 怖がるって？ 私が？ 冗談でしょう。

ロン だけど怖がつてる。何故なんだ。

(「椿姫」の序曲がプールから聞こえて来る。ローズ、素早く手摺りに行く。)

ローズ(呼ぶ。)フィオナ、音を小さくして。みんなを起こしちゃうわ。

フィオナ(舞台裏で。)分かったわ、ママ。

(レコード、少し小さくなって続く。)

ローズ どうしてそんなに怖がるんだ。

(ローズ、振り返り、ロンを見る。)

ローズ 分からない。どうしてかしら。本当に。

(ローズ、花瓶の一つに近づき、薔薇を一本抜き、ロンのポタンホールにさす。それから軽く彼にキスをし、一歩下がってロンを見る。)

ロン(ローズの片手を取り。)うん・・・じゃ部屋に？

(間あり。ローズ、ロンを見、微笑む。)

ローズ(やつと。軽く。)そうね。

(ロンの手を取り、フレンチウインドウを通って居間へと導く。この時までにフィオナ、レコードプレーヤーのヴォリュームを上げている。「椿姫」の音、再び大きくなっている。)

第一幕

第二場

(場 第一場と同じ。二箇月後。

夜の十一時頃。居間に電気がついている。居間には塵よけのシートはもうない。居間ではキャナスタ・フォアをやっている。テーブルは観客から見えない。しかし人物が動く時、

窓から時々見える。テラスにはフィオナとヘティー。フィオナはテーブルコーダーの声を聴いている。レコーダーは良く見える所に置いてある。ヘティーは編み物。)

フィオナの声(テーブルコーダーから。)そう。私の周りには荒廃していた。恥辱、虚偽、ばかりだった。だから私は夢みた、折に触れては。誰かがいつかは現われる。ただ私を保護してくれるのではなく、私、マルグリット・ゴーチエ、本当のこの私を愛してくれる人が必ず現われる。そう夢みていた。それは勿論今の保護者、あの伯爵なのかもしれない。しかしあの人は年とっていた。年をとっては、私が落ち込んだこの荒(すさ)んだ人生の慰めには成り得なかった。私の心には何か熱っぽいものが必要だった。それは年老いた人には求められなかった。その時私は貴方に会ったのです。あ、アルマン。若い、熱い、幸せな貴方。会ったとたん、何²か狂った生き物のように私は、私の残りの人生全部を貴方に賭けてしまった。私は田舎を夢みた。あの純潔な田舎での生活。そして子供の頃のことを。こんな私に成り下がった、といつても、私にも子供の頃があった。(幸せな。純潔な。)

ああ、でもそれは叶わぬ夢だった。さあ、アルマン、これで貴方には何もかも分かってしまったわね。

(フィオナ、テーブルコーダーを止める。)

フィオナ これ、酷い。そうね？

ヘティー 私は駄目。偏見があるから。サラ・ベルナールを一度聞いてしまうと・・・

フィオナ まさか。

ヘティー まさかじゃない。本当。私は七歳。あの人は百

八歳。フランス語で。勿論一言だつて分からなかった。でもベルナルはベルナル。椿姫は駄目。ジュリエットね、やるなら。貴女の年頃じゃない、ジュリエットなら。貴女の年にびつたりよ。

フィオナ そう。びつたり。それに今年王立演劇学校に入ろうと思つている他の女の子達の年にもびつたり。可哀相な試験官。この時期になると、聞かされるのよ、あの人達。細切れのいつもの同じシーンを。因果な職業。いいえ、ジュリエットは駄目。私は椿姫。

ヘティー 何故？

フィオナ 分からない。魂を悪魔に売つたからかしら。

ヘティー そんな事が理由？ じゃあ、いつか貴女がファウストをやるのを見る事になるのかしら。

フィオナ 魂を売つただけじゃないわ、勿論。正直で、心が温かくて、勇気があつて、誠実で・・・ああ、分からない。とにかく好きなの。あの人の感じる気持ち、それが分かるの。その気持ちを試験官に伝えたいの。この夏中あのテープレコーダーと掛かりつきりでも。ああいう人に会つてみたいわ。そしてじつと観察してみたい。でも勿論こんな時代にあんな人、いつこないわね。

ヘティー いないかしら。

フィオナ モナがそうだつていうの？ それとも、今家に來ているあのイタリア人の伯爵夫人？ それともいつかママが連れて來たあのストリップショーの女の子？

(ヘティー、何も言わない。)

フィオナ 違うわ、あんな人達。最低。退屈で、悲しい人

達。今の世の中じゃ、魂を悪魔に売り渡すなんて意味ないのね。だつて代わりに呉れるものが何もありません。勿論あの頃は、(テープレコーダーを指さす。) 違つたわ。貴女の頃も今とは違つたわね。

ヘティー そうかも知れない。分からないわ。私は悪魔と取引しなかつたから。もつとも、引合もなかつたけど。

フィオナ でも取引をした女の子は楽しかつたのよ、きつと。ホンブルグ、エクス・レ・バン、(いいところよね。) スコットランドでは六十人の召使いつき、大きなお屋敷。ウインではワルツ。伯爵に会う為にはモスクワ行きの特別列車。そうだわ。こここの、この別荘だつて、取引の結果となれば、違つた目で見られるわ。

ヘティー 今のままじゃ素晴らしくないって？

フィオナ ちつとも。使わない寝室が沢山あるだけ。贅沢つて何かしら。他の人がやるうと思つても出来ない生活を送るつていう事でしょう？ じゃあモナはどう？ あの人の、百万長者よ。それなのに、どこかへ行くのに特別列車に乗つた事ある？ ないわ。団体旅行の飛行機よ。それには一等なんかないから、いつでもエゴノミー。みんなと同じように食事の盆を受け取つて、そこいらじゅう食べ散らかしている。それは、普通の人よりは大きなテレビを持っているわ、慥に。でも暫くすればあんなもの、すぐ時代後れ。それに二十四インチのスクリーンが、悪魔に魂を売るに値するかしら。美容院の人が十七インチのを持っていて、そっちの方が写りが良いつていうのに。

ヘティー (優しく。) 貴女随分右よりなのね。ちつとも知

らなかつたわ。

フィオナ 右よりじゃないわ。美容院の人の方に肩を持っているくらい。「平等」はいいことだと思ってるわ。(考えながら)でも……ただ……人生から夢をなくしてしまうのが困るけど。あ、そう。泳ぎに行くわ、もう。

(フィオナ、右手の手摺りに進む。そこには彼女の水着が干してある。)

フィオナ あ、ママだわ。

ヘティー どこに？

フィオナ プールの傍 (一旦取り上げた水着を再び置く。泳ぐのは後にするわ。)

ヘティー どうして？ 誰か一緒なの？

フィオナ いいえ。一人。あそこに坐っているわ。

(ヘティー、フィオナから目を逸らさない。)

フィオナ 泳ぎたいの、私。話したいんじゃないの。

(フレンチウインドウが開いて、モナ登場。富豪のアメリカ婦人。はち切れんばかりの陽気さ。年令不明。)

ヘティー あら、モナ。貴女の事、話していたところよ。

モナ 子供に話す話題じゃないわよ。ローズはどこ？ 一体。アントニー二夫妻が帰るって言ってるわ。

ヘティー プールサイド。

モナ プール？ 何をしてるの。

フィオナ 何も。ただ坐って、考えてるの。消え去った自分の青春をだわ、きつと。

モナ 随分ませた言い方。貴女もそのうち青春をなくすわ。その時の貴女が見物(みもの)ね。

フィオナ 青春なんて、ない方がよっぽどいい。私、面倒な事、大つきらい。私、年寄だったら、四十五歳以上だったらいいのに。言い寄って来る男の子達に、「ばーか」って言うてやれるわ。

モナ(ヘティーに。)そんなに言い寄られているの？

ヘティー 夢で。それがみんなアルマン・デュヴァルみたいな男。(訳註 四十二頁のアルマン。「椿姫」の主人公。)

モナ デュヴァル？ 誰？ 売れっこ？

ヘティー そう。昔の売れっこ。

(モナ、奇妙な顔をしてヘティーを見る。)

ヘティー もう死んでる人よ、モナ。安心なさい。それに、もうとくに女がいたの。さ、アントニー二夫妻は私がお相手するわ。

(ヘティー、中に入る。)

モナ 私の噂って、いい方の？

フィオナ(レコードプレーヤーにレコードをかけながら。)

ええ、いい噂。

モナ(右手、手摺りのところで。)

あの人、何をしてるの？

あんなところで。

フィオナ(無関心な様子。)

知らないわ。最近いつもああ。

(フィオナ、先程かけたレコードは「眠りの森の美女」。今それが聞こえてくる。)

モナ お酒も飲まないわ。今は。

フィオナ ああ、お酒はもうすっかり止め。今ついている医者が厳しいの。きつく言い渡されたから。それにここは引き払ってスイスかどこかに行きなさいって。

モナ スイス？ あんな変なところ。誰が行くっていうの。

(若い男・・・エイドウリアン・・・フレンチウインドウに登場。手にトランプを持っている。)

エイドウリアン モナ、酷いなあ。僕が一回フオア・キヤナスタを取ったからって、逃げ出す事はないだろ。

モナ 分かったわよ、エイドウリアン。今行くわ。

(エイドウリアン、中に入る。)

モナ(自分に、独り言。) 嫌な奴。早く消えればいいのに。

(モナ、急にフィオナと同年齢の女の態度を取る。今までと違った調子で。)

モナ 私が言おうとしたのはね、フィオナ・・・

フィオナ(無関心に。) 分かっているわよ、モナ。あの人の夕食の時の態度から分かってたわ。ここには長くはいられないって。

モナ あの人、子供。若くって、無邪気で、汚れていない。それに人のごまかしを見逃さない。

フィオナ(宣告するように。) (単なる無知よ。無邪気じゃないわ。)

モナ 私が無邪気だと見てやるんだから、それでいいの。

大人の権利よ、これは。

(モナ、フィオナに微笑。中に入る。フィオナ、音楽を聞いて、バレーのステップを二、三やる。ひどく下手。それからテーブルコーダーを持ち上げる。明らかにひどく重い。ロン、右手の階段に登場。服装も髪形も前場の時より真面目なもの。しかしその真面目さは彼自身には及んでいない・・・少なくともこの瞬間には。かなりアルコールが入っていることが、

観客に分かる。)

フィオナ あら、ロン。今日来るとは思わなかったわ。これ手伝って。

ロン(手伝いながら。) 何だい、これ。

フィオナ 録音器。ママが練習用に買ってくれたの。でも私が使っているってこと、言っちゃ駄目よ。ママは聞きたがるでしょう？ そしているいると親切になるわ。それがいやなの。分かるでしょう？

ロン 任しといてくれ、そついつ事なら。

フィオナ 有難う。

ロン この音楽、僕のため？

フィオナ いいえ。でも折角来たんだから、ちよつと練習はどう？ 生計のもたせよう？ (フィオナ、バレーのポーズ。) さあ。

ロン(飲み物のテーブルで一杯注ぎながら。) 駄目。今日はやめた。

フィオナ ほら。さあ。

ロン そんな気分じゃないんだ。(盆の上にグラスを叩くように置く。)

フィオナ 酔っ払っているのね。

ロン 冗談じゃない。

フィオナ じゃあ、いいじゃない。さあ、酔ってないのを証明して。

(ロン、煙草を置き、フィオナに近づく。彼女の後ろに立ち、ポーズを取る。フィオナ、やる気十分で、動きを始める。)

ロン まだ。音楽をよく聴いて・・・一、二、三、はい。

アラベスク。

(フィオナ、ひどく不器用なアラベスクを行う。)

ロン もう一回。

(フィオナ、もう一度行う。嬉しくてたまらない。ケラケラ笑う。)

ロン よーし。そらっ。

(ロン、フィオナをプロの鮮やかさで肩に持ち上げる。フィオナ、相変らず笑いながら、最初は彼の首にしがみつく。それから両手を用心しながら離し、腕を空中で得意そつに振り回す。)

フィオナ 手が離れた。

(ロン、フィオナをしつかり支えて、一三回ターンする。フィオナ、嬉しい叫びを上げる。ロン、止めて、彼女を地面に置く。バレエ独特の動きで締めくくる。即ち、両膝をついて、左手は心臓に、右手はフィオナの方向に、謙讓の意を示して。)

フィオナ ああ。ああいいわね、バレエって。王立演劇学校は止めにして、バレエをやるって事にするのはどうかしら、私。

ロン(煙草を取り上げて。)

駄目だね。年を取り過ぎてる。

始めるなら、十歳(とお)までだね、遅くとも。

フィオナ その年に始めたの? 貴方。

ロン いや。八つ。

フィオナ 八歳で! 随分負けず嫌いだっただでしょうね。

ロン うん、その頃はね。

フィオナ ねえ、ロン。もう一回やって。

ロン 駄目。

フィオナ(彼の椅子の後ろから。)

ねだって。)

ねえ。ねえ。

(ヘティー登場。ロンを見てはっと立ち止る。ロン、立ち上がらない。)

ロン(少し挑むように。)

今晚は、ヘティー。

ヘティー(警戒の気持ち。)

今夜は呼んでなかった筈よ。

ロン そつ。呼ばれていなかった。ちょっと寄ってみたかったんだ。

ヘティー 電話もしないで?

ロン 彼女を驚かせたくってね。今どこ?

ヘティー(素早く。)

知らないわ。

(ヘティー、素早くフィオナを睨む。「言っな」という目つき。その目つきをロン、見逃さない。)

ヘティー 出かけたわ。どこかに。

ロン 戻って来るかな。

ヘティー 分からない。

ロン(家の中を顎で指して。)

人がいるみたいだ。

ヘティー モナとエイドウリアン。

ロン(立ち上がりながら。)

ああ、モナ・・・モナか。少なくともモナからは歓迎されそつだね。

(ロン、立ち上がり、自分の厚かましさを自覚しながらヘティーの横を通つて、家の中に入る。)

ロン(入る時に。)

やあ、モナ。

モナ(舞台裏で。)

まあ、ロンじゃないの。良かった。キヤナスタ淋しかったの。人数に入って。

ヘティー(怒って呟く。)

厚かましい。(フィオナに、厳しく。)

フィオナ、あの人と関わったら駄目よ。

フィオナ どうして。

ヘティー あれは危険な男。

フィオナ あら、そう？ 私はそうは思わない。あの人、淋しい人。危険な男に見せようとしているだけ。それに、ママの友達なんですもの。親しくしたっていいじゃない。

ヘティー（ちよっと詰まってる）お母様は、バレエダンサーとしてあの人を尊敬して（いるのよ・・・）

フィオナ 嘘。あの人が踊っているのをママ、見た事なんかない筈だわ。私は見た。あの人、名人よ。本物の。だけどトップに上がるうっていう気がないの。残念だわ。だって技術があるんですもの。ママはその事を考えているのかしら。

ヘティー（間の後）やれやれ、十六歳って始末に負えない年だわね。頬つぺたを叩くには若すぎるし。もう寝なさい。ぐずぐずしていると本気でその気分になりそう。

フィオナ まだ。寝る前に丘に上がって来なくっちゃ。十分だけ。あの台詞、もう一回練習したいの。

ヘティー 自分の部屋で出来ないの？

フィオナ オーギュスト伯の銅像があるの、あの丘に。その銅像に話しかけるの。良い考えが浮かぶ事もあるわ。きつとあの服装のせいね。丁度あの頃のなもの。

（フィオナ、左手から退場。ヘティー、右手の手摺りから呼ぶ。）

ヘティー ローズ。

ローズ（舞台裏から）何？

ヘティー 上がって来て。一大危機よ。

ローズ（舞台裏から）ウオッカがきれたっていつの？

ヘティー それどころじゃないわ。早く上がって。だいた何をしてるの、そんなところで。

ローズ（舞台裏で。声、近くなってる）沈思黙考。

ヘティー 客がない時に出来ないの、沈思黙考。代理でアントニー二夫妻にお別れを言わなきゃならなかったわ。

（ローズ登場。イブニングドレス姿。）

ローズ それは大変ね。もう私、カンヌの社交界に顔向け出来ないわ。

（ローズ、咳をし始める。坐る。プールから上がって来て、息を切らしている。）

ローズ（咳の間から）キャナスタはどうだった？ いつものズルね、また。

ヘティー 知らない。見ていなかった。

（ローズが咳をするのをヘティー、じつと見守る。水を一杯注ぎ、ローズに渡す。）

ローズ 有難う。きつい階段。エレベーターをつけなくちゃ。

（やつと咳、収まる。）もう大丈夫。さあ、一大危機の話。

ロンね。そうでしょう。

ヘティー どうして分かるの。

ローズ 「ロン顔」をしているもの、貴女。

ヘティー 「ロン顔」？

ローズ 怖いお目付役の顔。（訳註 原文は「ヴィクトリア朝の女家庭教師が「いけません」と言っている顔。」）（陽気に。）さあ、言ってる。今度はあの人何をやったの。新しい車をぶっつけたの？

ヘティー（心のそこからそれを願うという、急で強い熱心

さ。ローズを驚かせる程の。) 本當にぶつつけたらいいの。
あの人も一緒にぐしゃっと。

ローズ(優しく。) まあまあ、ヘティー。随分乱暴な言い方。

ヘティー いいえ。どうせそんな死に方をする人よ、あの
人。

ローズ まさか。それは酷いじゃないの。

(この時までにはローズ、煙草を出して、今それをつける。
ヘティー、それをじつと見る。)

ローズ 医者の特可ありよ。一日に十本。これは七本目。
さてと、ロンの話。聞く覚悟は出来たわ。何なの。

ヘティー 来たの、この家に。へべれけで。それだけ。

ローズ(急に熱心さを示し。) 今いるの？

ヘティー(居間を指差して。) モナとキャナスタの最中。

(問。)

ローズ 呼ばれないで来たの。フーン、初めてだわ。

ヘティー 「フーン、初めて」ね。

(この時までにはローズ、居間の窓まで進んでいて、窓越しに
見ている。)

ローズ カシミアの替上着、なかなかいいじゃない。

ヘティー そう。

ローズ 髪形も変えた、まあまあだわ。

ヘティー まあまあ。

(ローズ、窓から振り返り、ヘティーの方にしかめ面をする。)

ローズ そう。まあまあ。前よりはいい、とにかく。

(この時までにはローズ、ヘティーが「一大危機」と言った意

味を理解し、また面白がっている。そして今ここでローズの
声、きつく、しっかりとしたものになる。)

ローズ 分かったわ、ヘティー。クルトに電話して、ここ
には来ないように言つて頂戴。十二時半に、私の方が出向く。
マキシムで落ち合ひしよう、と。

ヘティー 連絡は無理ね。あの、サントロペで食事中。
レストランはどこか分らない。それにもう、この時間なら
こちらに向かっているところ、きつと。

ローズ そうね、勿論。(時計を見る。) まだ時間は充分
ある。ロンをここへ出して来て頂戴。

ヘティー モナから引き離せつて言つたのね。

ローズ そう。

(ヘティー、回れ右をする。ローズ、突然ヘティーに走りよ
り、腕を掴む。)

ローズ その声、どういう意味？ 私から引き離したいつ
てこと？

ヘティー そう。

ローズ 分かりました。気に入らないのね。貴女、何を知っ
ているの？

ヘティー(取り立てて言う程の事はないわ。) 殆ど貴女の
知っている事ばかり。木曜日、貴女には黙つて、モナのパー
ティーに出たこと。モナの前の夫が遺した煙草の株は、今年
随分いい配当だったこと。役者が、別れた彼の妻に支払
う扶養手当よりはすつといい金・・・それにどうせこの手当
毎月毎月滞納。クルトから時々ブレゼントがあるつて言つたつ
て、とてもかかないはしない。ロンのような男を引き止めてお

きたいなら貴女、モナの夫みたいなのを二、三人、それもすぐに死んでしまうのを、手に入れることね。

(間)

ローズ あの人をそんなに嫌わないで、ヘティー。お願い。そんな嫌い方はしないで。

ヘティー お願いされて出来る事はあるわ。でも、これは駄目ね。

(ローズ、肩をすくめて、顔をそらす。)

ローズ(微笑んで。)本当はあの人、木曜日にはうちに来たいと思ったの。それは分かっている・・・

ヘティー 分かっているって、どういうこと？

(間)

ローズ あの人を連れて来て頂戴・・・お願い。キャナスは貴女が代わって。モナは気にしないわ、きつと。

(ヘティー頷く。居間に入る。ローズ、さつと振り返り、フレッチウインドウに進み、中を覗く。が、ロンの影が見える。急いで家と反対の方向を見る。景色を眺めているふり。

ロン、ローズに近づき、首の後ろにキス。ローズ、ロンの手を取る。)

ロン 本当に外出中だった？ それともあのばあさんのいつもの嘘？

ローズ いつもの嘘。私は下にいた。

ロン 一人で？

ローズ ええ。

ロン 僕のことを考えて？

ローズ 他のこともあったけど。

(ローズ、振り返り、唇にキスする。両方とも熱烈には抱擁しない。ローズの方は優しく、ロンの方はバレーで行うロマンティックな抱擁。ややあってローズ、ロンを押しやり、替上着をじつと見る。)

ローズ うん、それいいわ。よく似合う。

ロン 肩のところが少し大きい。フランスは仕立は駄目だ。やり直しをさせないと。遊び人に見られたくないからな。

ローズ そうね。

(ロン、飲み物の盆に行き一杯注ぐ。ローズ、それを見ている。)

ロン 一杯やる？

ローズ いいえ、禁酒。医者から止められて。

ロン 良い子なんだなあ。

ローズ(少しおずおずと。)貴方はいいの？

ロン。かな

りもう飲んでいるんじゃない？

ロン(突然狂暴さを示し。)あれこれ言うのは止めてくれ。それが一番いやなんだ。(ロゼのグラスを置く。)

ローズ 貴方のダンスのことを考えているだけなの、私。

ロン 分かっている。君の考えていることはお見通しさ。

ローズ(間の後。)本当。ステージでのバレー。それを心配しているの、私。

(間。ロン、答えず、また一杯注ぐ。それから振り向いてローズに、顔一杯の微笑を見せる。)

ロン こんなもの水と同じさ。バレーに影響があるなんて、冗談じゃない。

ローズ ロン、貴方には悪いけど、もう暫くしたら出て行っ

て貰わなきゃならないの。

ロン 出て行く？

ローズ 少ししたらクルトが来るの。私、一緒に出かけることにしているのよ。

ロン 成程。

ローズ あの人明日、二箇月の予定でヨット旅行に出かけるの。だからあの人の最後のカン又なの、今夜が。これは延ばせないわ。本当に。他の日ならいいんだけど・・・今晚だけは。

ロン 成程。

ローズ 電話してくればよかったのに。

ロン 電話していったって事態は変わっていったとは思えないね。ガソリンが少し節約になったぐらいのものだろう。

ローズ（つらく。）ご免なさい、ロン。

ロン 今日は猛烈に君に会いたかった。

ローズ（優しく。）そう？ じゃあ、明日は・・・

ロン 僕は今日会いたかったんだ。それにいづれにしろ今日は帰れはしない。持ち物は全部詰めてきた。寝る場所が必要なんだ。

ローズ（問の後。）喧嘩したのね、そうでしょう。

ロン いつかはこうなる。分かっていただんだ。

ローズ 私什么原因？

ロン 間接的にはね。直接には、あの車だな、きつと。

ローズ 間接的には、私ね。原因は。

ロン 彼の今までの親切が無になった・・・そこが問題だ・・・それが彼には我慢ならなかったんだ、絶対に。とにかく僕

は終わって良かった。今シーズン、バレーは三つやった。そのうちの二つに、僕は主役で出た。三つ目は違う。丁度君が現われた時期だった。僕は主役にはあてられなかった。代わりにマイケル・ブランド。あの嫌な野郎。だけど、とにかく僕は一座中で噂になっていたし、僕自身も少し落ち込んできた。自分が、安っぽい人間に見えてきたんだ。

ローズ（静かに笑いながら。）安っぽい？ まあ。まさか。貴方が？

ロン。

（ロン、ローズを見る。素早く彼女に近づき、片手を取る。）

ロン（荒々しく。）いつか、土曜日の夜、君は僕に言ってくれた。あの言葉、覚えている？

ローズ いろんなことを言ったわ。あの時。

ロン 特にあること。

ローズ（問の後。）貴方のこと好きだって言ったわね。

ロン それだ。それは本当なんだね。

（間。）

ローズ（静かに。）そうよ、ロン。本当。

ロン じゃあ、君は僕が好きなんだ。そしたら、どうしていつも僕を苛めるんだ。追い返したり、酒を飲むなど言ってみたり。どうしてなんだ。（ローズを揺すって。）どうして僕を苛めるんだ。

ローズ 苛めてるのは貴方じゃないの、ロン。私を苛めるの。

ロン それは別の話だ。君はいつも謎みたいな事ばかり言っている・・・いつだって。時々自分で冗談を言っただけで笑っている。まるでそんな感じだ。Ce n'est pas très chic, ça, je t'assure.

(そいつは品のないことなんだぜ、分かっているだろう。)

ローズ Non, chier. Je suis de ton avis. C'est une habitude abominable. Je te demande pardon. (そいつ。私もそう思う。下品な癖。ご免なさいね。)

ロン 君はフランス語をどこかで習ったの？

ローズ(笑って。)ええ、レコードで。エッジバストンの頃。最初の夫が買ってくれたの。いつか役に立つんじゃないかと思って。慥に役に立ったわ。あの人が死んで二千ポンド遣してくれて、私はここに来た。そしてフランス人の夫を捕まえたわ。これがまた私のことで貴方が嫌なところね。フランス語が、貴方より上手っていう事。

ロン しようがないや。何でも君の方がうまいんだ。どうしようもないさ。

ローズ 時間よ、ロン。時間さえかければいいの。貴方、まだ始めたばかりじゃないの。

(モナ、フレンチウインドウから登場。)

モナ ねえ、いつまでこの子を独り占めしておいたら気がすむの。私、もう五十ドル取り返さなくちゃならないのよ。

ローズ ヘティーが代わりに行ったでしゅつ？

モナ ヘティー？ ヘティーは駄目よ。強過ぎだわ、あの

人。

ロン 分かったよ、モナ。すぐ行く。

(モナ、雰囲気を感じて、回れ右。部屋の方へ向かう。)

モナ そうよ、来るのよ。

(モナ、退場。)

ロン クルトは何時って言った？

ローズ 十二時。

ロン 車の音がしたら部屋を覗いてウインクしてくれ。僕は二階に上がる。突き当たりの部屋でいいね？

ローズ 駄目。

ロン(部屋に行きかけたところを振り返って。)駄目？

ローズ 今日駄目。今夜は家にいて貰いたくないの。カールトンに貴方の名前で部屋を予約する。ヘティーに頼むわ。明日来て頂戴。

(ロン、何も言わず、また何も聞かえなかったかのように、飲み物の盆に行き、ロゼを注ぐ。)

ローズ(腕時計を見て。)それからモナとは一勝負だけよ。十二時十分前には出て来て。

(ロン、ローズを見る。踵をカチンと鳴らし、一礼。)

ロン 畏まりました、マダム。よろしうございます。

ローズ(その戯(おど)けたそぶりを無視して。)それから今日はもうさよならを言えないかもしれない。今挨拶をしておきたいわ。はるはるの会いに来てくれて嬉しかったわ。

(ローズ、ロンに近づきキスをする。以前と同様に、温かみをもって、しかし熱情はなく。)

ロン(御辞儀。また踵を鳴らす。)(有難うございます。妃殿下のご好意、身に沁みます。)

(ロン、居間へ向かう。その時躡く。)

ローズ(すぐに。)ロン。

(ロン、振り向く。)

ローズ 本当に貴方、電話をかけようとしてくれたのね、木曜日に。

ロン 木曜日？

ローズ モナのパーティーの時。

ロン 勿論。先程申し上げました。わたくしの電話が故障中でございます……

ローズ（素早く。）さっきは私の方の電話がって言ったわ。

ロン（肩をすくめて。）そちら、こちら、どちらでも同じことではございませんか。

ローズ そうね。同じね。

ロン（やり過ぎたのではないかと心配して。）ねえ、ローズ。僕の大事な、大事なローズ。君、まさか僕が嘘をついているだなんて……

ローズ キヤナスタをしてらっしゃい、ロン。でも一回だけよ。掛け金を倍にしてもいいわ。それは私が払います。

（間。ロン、ローズを見つめる。半分怒って。半分恐怖を感じて。）

ロン 身に余る陛下のお言葉。感激でございます。

（ロン、入念な御辞儀。バレエの、女王に対するよつな。それから、完全なバレエのスタイルで居間に入る。明らかにローズを笑わせようと。ローズ、笑わない。ロンが出て行くとき、素早く飲み物の盆に行き、少し震える手でブランドーを注ぐ。グラスにソーダを噴射注入式の器具で注いでいる時、ヘティー登場。）

ローズ（グラスを上げて。）いいところを捕まっちゃったわね。それに、これで終っていう訳でもないわ。禁酒は明日からまた。

ヘティー 何かあったの？

ローズ 知らないふりは結構。貴女ぐらいよく分かっている人はいやしなない。

ヘティー モナと喧嘩？

ローズ いいえ。でも寸前。ああ、本当に寸前だわ。（自分自身に。呆れたように。）私が……嫉妬しているなんて。それもモナに。やれやれ。貴女の言う通りかも知れないわ、ヘティー。そろそろタイムを要求する時ね。

ヘティー（陰気に。）手遅れでしょっけどね。

ローズ 手遅れ？ 勿論手遅れなんかじゃない。その気になつたら、明日にでも別れてみせるわ。

ヘティー じゃ、その気になることね、早く。

ローズ（間の後。）多分愛されるっていう役割に飽きてきたんだわ、この年になって。今度は愛するっていう役をやってみたくなったのね。

ヘティー（侮辱するように。）愛する役！

ローズ（間の後。）そう……愛する役。でもモナと一緒にしちや嫌よ。

ヘティー やることと言ったら、モナと同じでしょう？一緒にするしかないわ。

ローズ 手厳しいわね。（微笑んで。）ああ、どう説明したらいいかしら。分かっているの、貴女の言いたい言葉。厭らしい汚い言葉……「男妾（おとこめかけ）」。でも違う。少なくともびつたりそつではないわ。カシミアの替え上着。ラグonda（車の名）を贈ったわ、慥に。でもそれはただあの子をベッドに誘う為じゃないの、ヘティー。そんなことしなかつたって出来る。本当。自惚れじゃない。貴女だってそれ

は認めるでしょう。カシミアに車。それを贈るのは、贈って楽しいから。心から嬉しい気持ちになるから。それだけのこと。与えるって楽しいわ。いい気持ち。どんなに気持ちのいいことか、今まで知らなかった。だってこんな経験、かつてなかったんですからね。

ヘティー お金の出入りを調べてみたことあるの？ 最近。

ローズ そんな守銭奴みたいなこと言わないで、ヘティー。分かりました。慥に車は大袈裟だったわ。一つ二つ、絵を売らなくっちゃ、払いきれないかもしれない。でもどうしてあの人に贈り物をするのか。楽しいから、それだけじゃない。(考えながら)あのロン、あれは淋しい子だわ。勿論自分じゃ分かっていない。全然・・・(言葉を真似して)あの子は自分でこの世間を切り拓いて行く術を心得ている。それは手慣れたもの、自分の掌(たなごころ)を指すようなものよ。そう。私だってその同じ世間を切り拓いてきたわ。あの子と同じ年の頃。でもね、ヘティー。正直言うと、私、あの人が自分の掌がどうなっているか、実際は知らないんじゃないかと思ってるの。そう。あの人の為に、こっそり代わりに切り拓いてやるの。それが楽しいのね。

ヘティー さぞ楽しいでしょうね。貴女の切り拓いたその道が、モナという名の開拓地にまつすぐ繋がっているとしたら。

(間。ローズ、立ち上がり、飲み物のテーブルに進む。)

ローズ そう。これで一杯終り。

ヘティー もうブランデーはお仕舞い。ロゼになさい。

ローズ 私、女性の飲み物の方がいいわ。「忠告、有難う。」

(ブランデーとソーダを注ぐ。)そう、貴女の言う通り。あの人はもう終。あの人のお陰でモナって言う名前を聞く度に心臓をびくつかせなきゃならない。そんなことは許せない。少なくともこの年、三十五歳では。諦めなきゃならない時がくればしかたないけど。そう・・・あの人には出て行って貰いましょう・・・可哀相な人。

(フィオナ、左手から登場。)

ローズ あら、フィオナ、貴女外出だったの。知らなかったわ。

ヘティー 許可は私が出したの。構わないだろうと思って。

ローズ そんなこと構う訳ないでしょ。どうして二人とも私を女子寮の舎監みたいに思っているのかしら。

ヘティー それは・・・すぐ大騒ぎですからね。

ローズ 健康に関してはね。華奢に出来ているんだから、この子。身体に応じた注意つてもものがある筈よ。

ヘティー そうね。ここで笑っちゃいけないわね。

ローズ それは話は別。私はタフなの。あの子の年の時、私はあの子の二倍はあったわ。フログモア通りで名が通っていた。喧嘩で負けたことがなかったから。どうだったの、フィオナ、今夜は。

フィオナ(礼儀正しく。)ええ、まあまあ。有難う、ママ。もう私、寝るわ。お休みなさい。(フィオナ、フレンチウインドウに進む。)

ローズ(おすおすと。フィオナに対してはいつもであるが。)

フィオナ・・・私、お昼にエデンロックで、デイヴィッド・克蘭ストンに会ったわ。

フィオナ（興奮して。）デイヴィッド・クランストン？
あの人、今こつちに？ ストラットフォードじゃないの？

ローズ 一週間の休暇だって。

フィオナ ああ、ママ。あの人どんな話し方をするの？
舞台でやる時と同じ？ やはりあの、腹の底から声を出すや
り方？ ハンサムなの？ 近くから見ても。

ローズ（自分のやった事に満足している表情。）そうね。
貴女、自分でそれが確かめられるわ。だってあの人、明日の
午後、ここへ来るの。

（このニュースのフィオナに及ぼす影響は、ローズが予期し
ていたものと異なる。フィオナの顔から微笑が消え、疑い深
く、目が細まる。）

フィオナ ここに？

ローズ そうよ、貴女に会いに。私、貴女のことを話し
たの。貴女の野望。あの人、大変興味を持って・・・

フィオナ ママ。興味を持つ筈ないでしょう？ あの人が。

ローズ それを持ったのよ。それで、貴女の台詞を読むの
を聞きたいって・・・

フィオナ（ある強さをもって。）駄目。

ローズ 怖がらなくてもいいのよ、フィオナ。

フィオナ 怖がってはいない。でも聞いて貰うのは厭なの。
とにかく、ここでは。ママのお客で、お世辞を言わなきゃい
けない時に。

ローズ でもいいチャンスよ。

フィオナ 勿論そう。でも厭 絶対に駄目。いつかはステ
ージで、あの人に聞いて貰う。ただのフィオナ・ホーキンスと

して。他の五十人の応募者と平等に。ママの娘としてでなく。
でも今は駄目。

ローズ（静かに。）その時でも貴女は誰の娘が分かってし
まうでしょう？ だって明日会つんですからね。

（フィオナ、首を振る。）

ローズ 貴女、会つのも厭って言うの？

（フィオナ、再び首を振る。）（訳註 日本では、ここは縦に
振る。）深い動揺が見て取れる。）

ローズ でも貴女、あの人の大ファンなんでしょう？

フィオナ ハイマーケットの外で、雨の中を一時もあ
のことを待った事があるわ。サインを貰おうと思って。駄
目だったけど。でもここでは厭。ご免なさい、ママ。明日は
私、外出する。

ローズ でもあの人を呼んだのは貴女の為だったのよ・・・ 33

フィオナ ええ、ママ。分かっている。ご免なさい。

ローズ（怒ってきて。）でも一体どうして・・・

フィオナ 説明出来ないわ。でもとにかく会いたくないの。
あの人がこのに来て、ママと一杯やるって言うのなら。

（間。）

ローズ（静かに。）貴女時々、人を傷つける事を言うわね、
フィオナ。

フィオナ そう？ でもそんな積もりじゃないんだけど。

ローズ 積もりでない事は分かっているわ。でも人を傷つ
ける事は変わりないわね。

フィオナ ご免なさい、ママ。もう上に上がっていいかし
ら。

ローズ そうね。そうさない。

(フィオナ、義務のようにローズに近づき、頬にキスする。)

フィオナ お休み、ママ。

ローズ お休み。

フィオナ お休み、ヘティー。

ヘティー お休み、意地悪さん。

フィオナ 貴女は、分かつて下さるわね、ヘティー。

ヘティー 私を巻ぞえにしないの。もう行きなさい。

(フィオナ、家に入る。)

ローズ 貴女、分かる？

ヘティー (上手に逃げて。) あまりは。

ローズ 貴女には分かるのね、ヘティー。何なの、あんなに私の事を嫌つなんて。

ヘティー 嫌つてなんかいないわ。貴女がローズ・フィッシュだからだけよ。

ローズ でもあの子は、ローズ・フィッシュの経歴を非難しているんじゃない。それは確かよ。

ヘティー ええ、それは非難してはいない。でも、非難していないという事と、喜んでその娘になるというのには、開きがあるわ。

ローズ (肩をすくめて。) 罪の支払う罰金ね。

ヘティー 一部は。でも大きな部分じゃない。

ローズ (急に強い調子で。) それが大きな部分なの、ヘティー。私、どんな物を犠牲にしてもいい。本当にどんな物だって・

・あの子から垣根を取り払いたい。人を近づけない、そっけないあの態度。あれを打ち壊して、こちらの何かを通(かよ)

わせた。何かを。こちらを辱(はづかし)める気持ちでもいい。憎しみでも。私、ちゃんと対抗出来る。対抗出来ないのは、あれ。あの冷たい挨拶。「はい、ママ。」「いいえ、ママ。」「ご免なさい、ママ。」「上がっていい？ ママ。」ああ、ヘティー、あの子がこの私を必要としてくれさえしたら・・・

ヘティー 人間始まって以来の母親の悩み。

ローズ (素早く涙を拭いて。) この母親は特別な母親なのよ、本当に特別な・・・

ヘティー 初めてだわ、涙を見たの。

ローズ これが初めてだから当然でしょう。ああ、なんて馬鹿なの、あの子。ローズ・フィッシュの娘のどこが悪いの。これくらい運のいいことはないじゃないの。

ヘティー 賛成だわね、私は。

(車の登つて来る音。ヘッドライトの光が左手の手摺りにあたる。)

ローズ ああ、クルトだわ。(腕時計を見る。) 十五分早い。やつぱりね。(落ち着いて。) ここに二、三分止めて置くわ。ロンをその間に出して頂戴。カールトンに部屋を取って・・・私の払いにしてね。明日リハーサルの後に来るように。もしその気があれば、夕食はここで私と。

ヘティー その気はあるに決まってるわ。

ローズ 荷物も全部持って来るように。明日からはここで暮らすの。(手摺り越しに呼ぶ。) ヘーイ、クルト。こっち。テラス。

ヘティー ロンはもう出て行って貰うって言ったんじゃない

かった？

ローズ それは明日考えるわ。さあ。

(ヘティー退場 暫くしてクルト登場。白いディナージャケット。)

ローズ 早かったのね。

クルト そう。早い。酷いパーティーだった。まずい料理。人のことをこけにしゃがって。ヨーロッパの阿呆だと思つていやがる。(言い止む。ローズを感じして眺める。) はあ、美人だ。今日は凄い。これは美人だ。(クルト、ゆつくりとローズにキスする。満足がうかがえる。ローズ、落ち着いてこの抱擁を受ける。)

ローズ(やつとほごいて。) お化粧がめっちゃめっちゃよ。

クルト 君のは崩れないさ。とてもこんなことくらいじゃ。そうだろう？

ローズ 貴方さえ来なければ・・・乱暴者。

クルト(笑つて。) ビシッと決めてるな、今日は。いいよ、本当に。今夜は楽しむんだ。いいか。パーッとやるんだ。パーッと。この古い町が見たこともない騒ぎ方。カイヘキ以来のだ。

ローズ(直す。) かいびやく以来。

クルト 開闢(かいびやく)？ そうか。今日初めて読んだ言葉なんだ。良い言葉だと思つてな。「かつてない」・・・丁度君に対する僕の恋のような、な？ 客は帰つたんだらう？

ローズ まだ。モナとモナのボーイフレンド。

クルト ボーイフレンドの方は出て行つたんだらう。ここへ来る途中で会つたよ。出て行くところで。すごい勢いだつた。

ローズ そう？ またモナと喧嘩ね。例によつて。モナは

一緒じゃなかつた？

クルト 一緒じゃない。さあ、モナにさよならを言つて来るんだ。それから出かけよう。

(クルト、振り向いて車の方へ帰ろうとする。)

ローズ(静かに。) ちよつと待つて、クルト。

(クルト、振り返る。)

ローズ 私、気が重くなる事を夜遅く言つのは嫌いなもの。

クルト そりゃそうだ。夜遅くには、気が重くなる事はよそう。

(クルト、小切手帳とペンを取り出す。テーブルの上に帳面を開き、書く用意をする。この瞬間を楽しんでいる様子。)

クルト オーケー。さあ、いくらだ、言つてみな。

ローズ 本当にどのくらい借りがあるのか分からないの。

クルト(小切手の金額を書きながら。) ヘティーに聞かなくちゃ。

クルト(小切手の金額を書きながら。) ヘティーに聞くこととはない。これで足りる筈だ。いくら君に「かりきん」があつても。

ローズ(自動的に直す。) 借金。

クルト 借金。私の辞書にはない言葉だ。

(クルト、小切手を渡す。ローズ、それを眺める。)

ローズ(静かに。返しながら。) 多すぎ。こんなにはいらないわ。御好意は有り難いけど。半分にして下さらない？

クルト(嬉しそうに、ローズの腰に片手を回して。) ローズ、ローズちゃん。そんなことを言う君なのか。それに言つ

ている相手を誰だと思つてるんだ。半分にしろとはね。いやー、決まつてる。今日はビシッと決めてるな。

ローズ（バッグに小切手を入れて。）本気で言ったのよ。分かっていてしょう？ 貴方って気前がいいわ。

クルト 私は事業家なんだ。金を積むなら、値打ちのあるものに。その値打ちのあるものには、その値段を。

（ローズ、急に飲み物の盆に向かい、ブランドーを注ぐ。）

クルト マクシムに行くまで待てないのか。

ローズ 待てないわね、これは。（振り向いて、クルトにグラスを上げる。）有難う、クルト。感謝するわ。

クルト（懇願するように。）なあ、ローズ・・・

ローズ このところ賭ける度についてなくて。それに一度にいろんなものの払いが重なって・・・この家の装飾、プールの直し・・・

クルト（静かに。）それにロン・ヴェイル用のラゴнда・・・（ローズ、黙ってクルトを見つめる。クルト、楽しそうに笑う。）

クルト 情報通だと、「あいつはスパイを雇っているみたいだ。」なんて人はよく言うもんだ。だけど本気でそう思っている奴はいない。だがこのクルトは違う。やることはやっている。

（ローズ、バッグを開け、小切手を取り出す。歩いてクルトに近づく。クルトまで達した時クルト、伸ばされたローズの手を苛々と押し返す。）

クルト 馬鹿なこととは止めるんだ。私が気にしているとも思っているのか。

ローズ（静かに。）でも、気にしなくちゃいけないことでしょう、これ。

クルト ロン・ヴェイルをか？ そう、最初噂を聞いた時。

そう、私の大事な大事なローズちゃんか、可愛いバレエのダンサーの坊やを見つけたって聞いた時は、信じなかった。ギリシャの大金持ち、船主、そんな奴らなら話は分かる。けどダンサー？ とんでもない。嘘だ。そう思った。それで調べさせた。このヴァーロフとローズちゃんをね。真正正銘の本当だと分かった。（笑う。）で、私は自分に言ってる聞かせた。ローズちゃんは気前がいい。浪費家だ。そのローズちゃんがダンサーに金を使う。高い車を贈る。そうしたい気になっただんだ。なら反対する事はない。とにかく今はな。私の妻になつたら話は別だ。それに、この私の前にヴェイルが現われりゃ、そりゃひつぺがしてやる。目障りだからな。しかし、気にする？ この私が？ ダンサーに？ 馬鹿な話だ。ローズはまだ私のものだ。他の誰のものでもない。私はそれをちゃんと知っているんだ。

（間。ローズ、慎重に小切手を引き裂く。紙片を灰皿に入れる。）

クルト ひどく芝居がかつてるじゃないか。そんなことをしたって、どうせまた後で同じものを書くだけだ。そうだろう？

ローズ そうね、そういう人、貴方は。

クルト（笑って。）それとも倍額かな。ご不興を買った罰として。

ローズ いいえ。丁度あの金額をマイナス。ラゴндаの値段分を。

クルト 知らないね、ラゴндаの値段を。

ローズ 私も。正確には。でも調べれば分かる事。さあ、行きましょ。私、はおるものを取って来る・・・

(ローズ、声が小さくなる。ロンがフレンチウインドウに現われたからである。ロン、居間に入った時より、さらに酔っている。)

ロン 僕に今夜ベッドを用意してくれなくてもいいって言いに来たんだ。モナが泊めてくれるって言うもんだから。(クルトの方に向かって。) おお、これはこれは、ヘル・マスト。以前お会いしましたね。覚えておられるか、どうか。貴方は僕を新聞記者と・・・

クルト 覚えている。

ロン 「闇市の帝王」と呼ばれるのは一向構わんと。これを聞いて嬉しかったな、僕は。だって良い表現じゃないですか、「闇市の帝王」なんて。実にいい。

ローズ(威厳をもって。) モナとヘティーに挨拶していらして、クルト。

(クルト、立ち上がる。少し迷う。それから急にフレンチウインドウの方に向き、あとを振り返らず、家に入る。)

ローズ 貴方、あの人にぶつ殺されたいの、ロン。

ロン 殺させればいい。嬉しいくらいだ。

ローズ 自分でやる必要のないのよ、あの人。殺し屋はいくらでもいるの。

ロン 君にびつたり的人物じゃないか、ボーイフレンドとしては。

ローズ そう。びつたり。分かったわ。ばれちゃったんだから、どうせ同じ。突き当たりの部屋にいらっしやい。

ロン もう言っただろう。突き当たりの部屋になんか行かない。カールトンにも、他のどこへもだ。モナんちに行くんだ。

(間。)

ローズ 随分酔ってるのね、ロン。

ロン 自分がやっていることが分からない程には酔っていないさ。

ローズ 分かっているでしょう？ 今夜もしモナと泊まったら、貴方と会うことはもうないのよ。

ロン 分かっているさ。金持ちと貧乏人とじゃ、当て嵌める規則が違うんだ。君は闇市の帝王と町にふらふら出歩けるし、僕はカールトンで大人しく、いい子にしていなきゃならない。おまけにヘティーの監視つきでね。

ローズ 悪いけどね、ロン。いいとか悪いとか、そんなこととをここで話しているんじゃないの。私がこうすると言う話をしているの。

ロン そうか。そして気にいらなきゃそれまでか。

ローズ そう。それでモナと泊まるのね。

ロン 泊まる。もうどうなったって構うものか。

ローズ そう。じゃ決まりね。(ロンに微笑む。) こんな時さよならはどういう風にするのかしら。やり方、難しいわね。握手して「じゃあ、幸運を祈る」なんて言うのかしら。

ロン ローズ・フィッシュ、魚。なんて言う名前だ。びつたりじゃないか。温かい血など、これっぽっちもありません。君には感情というものがいいのか。この二箇月、一分間でも僕のことを考えてくれたことがあるのか。

ローズ 考えたわ、ロン。それもかなりな時間ね。

ロン ふん、かなりな時間か・・・ここに呼ばれる。一週間に二日ぐらい。あいた時にね。オエライさんがいない時にだ。だってロンは下層民。会わせるなんてとんでもない。そしてここに来る。すると、こづき回される、ちくちく嫌味は言われる。あげくには追い出される。僕の皆自分からない事を話し、全く知らない人物しか話題に出ない。僕がどんな気持ちか分かるか。今日、僕はここに来た。どうしてだと思っ？

ローズ 一晩泊まる為でしょっ？

ロン 泊まる為？ 泊まる場所ならごまんとある。一時間も車を飛ばすことはない。ふいに現われたら、来る事を知らせずに現われたら、僕のあの子はどんな挨拶をしてくれるんだらう。そいつが知りたかったんだ。試験だ、言ってみれば。分かったよ、ちゃんど。もうよく分かった。お付きの女、ヘティー女史が御登場。僕を家から追い出すんだ。何故かと言えば、彼女のボーイフレンド・・・金持ちのね・・・それが急にやって来ることになったから・・・

ローズ(疲れたように。)ああ、ロン、貴方クルトのことはとくに知っている筈じゃないの。

ロン 知っていれば心がそれだけ軽くなると思っっているのか。君の不浄な金で僕は羽振りをきかせてる。それを僕が楽しんでると思っっているのか。

ローズ 清浄な金だったら良かったのに言うこと？

例えばモナみたいに、株で儲けたものだったら・・・

ロン そっさ。笑うなら笑え。ちくちく皮肉でも言っんだ。僕の感情なんかお構いなしだったんだ。何時でも。

(間。ローズ、間の後、ロンに近づき、優しくキスする。)

ローズ さようなら、ロン。

(ヘティー登場。フレンチウインドウのところ立つ。)

ヘティー(ローズに。)何か問題？

ローズ いいえ、何も。

(ローズ、家に入る。)

ロン こうなつて喜んでるんだな。

ヘティー 大喜び。

ロン(口ゼを注ぎながら。)僕もだ。畜生！ 喜びなんてもんじゃないんだ。心の底から湧き上がってくる歓喜だ。何だか自由になつた気がする。僕を抑えていたものが取れた感じだ。良い気持ちだ。

ヘティー モナが嬉しがるかしら、そんな自由な気持ち。

ロン 冗談じゃない。こつちが駄目だったからすぐあつちに鞍替える、それが僕だと思っっているのか。大間違いだ。見損なつちやいけない。僕が自由だと言つたら、本当に自由なんだ。

ヘティー だけど、ラゴンダを突つ返す積もりはないでしょう。

ロン どうして分かる、そんなこと。

ヘティー 私には分かるの。

ロン 分かる？ 君は自分で思っっているより頭がよくないかも知れないぜ、ヘティー。僕は車を返すかも知れない。

ヘティー でも、かも知れないどまりね、どつせ。

ロン(勇敢に。)よし、モンテカルロに明日来るんだ。僕は車を返す。これでいいだらう。それとも書いたものが必要かな。

ヘティー そんな。言葉で充分よ。立派な証文。

(ローズ、テラスに登場。何かを上にはおっている。非常に陽気にモナと話している。クルト、後に続く。)

ローズ そう。今日は赤、奇数、それに私の年の数、がついてるの。シェミーではバンコにするわ。親が潰れないようにご用心ね。(訳註 ここ意味不明。)

モナ 凄いい自信。クルト、貴方は何?

クルト バカラだ。

ローズ クルトはいつもバカラ。それにいつだって勝つ。

クルト 恋愛についているからな。それはつくさ。

ローズ それは逆ね、クルト。

モナ 私と一緒に歩いていいかしら。

ローズ 勿論。

モナ 貴方どう? ロン。

ロン 今夜は早く寝なきゃ。明日は出番なんだ。

クルト 明日は何を踊るのかな。

ロン ブルーバード。

クルト ブルーバード? 何だ、それは、ワイヤーで吊るされて、空中をばたばたやるのか。ピーター・パンジーみたいに。

(クルト、両腕を、嘲笑するようにばたばた動かす。)

ロン(静かに。)いいえ。ピーター・パンジーとは違います。ブルー・バードは主役です。うまく踊るのは難しい。そう。闇市で一財産稼げるのと同じくらい難しい。

ローズ(ロンが駄目。)ということは、貴女も来ないのね、モナ。(クルトに。)じゃあ、クルト、行きましょ。

(フィオナ、部屋着姿で登場。)

フィオナ 私、ちよつと泳いで来るわ、ママ。

ローズ もう眠っていなきゃいけない時間よ、フィオナ。

フィオナ 泳ぐとよく眠れるの。毎晩泳いでいるの、私。

(フィオナ、階段の方に進み、水着を取る。)

クルト モンテカルロにいつか行ってみなきゃいかな、ミスター・ヴェイル。その難しい、難しい、主役のダンスを見なきゃ。

ロン それには及びません、ヘル・マスト。モンテカルロは遠いです。それに、この間の朝、話をお聞きした限りでは、あまり芸術の方面には興味がありません。いいことがありません。今ここでお見せしましょう。(フィオナの方へぐるっと回って。)パートナーはここ。

フィオナ 駄目、ロン。今は止めて。

ロン 何を言ってるんだ。(ローズに。)僕らが踊るのを見たことはなかったね、ローズ。

フィオナ 止めて、ロン。お願い。音楽もないし。

ロン 音楽なんか。

(ロン、フィオナの後ろに立って、バレエのポジションを取る。)

フィオナ 止めて。本当に。

ロン 何を怖がってるんだ。怖がることなんか何もありません。(ロン、「白鳥の湖」を口ずさみ始める。)

よし、アラベスク。(フィオナ、従順に従う。楽しんでいない様子。)

ロン よーし、うまいぞ。もう一回。

(フィオナ、もう一度やる。)

ロン プラーボ。まるでフォンテインだ。いいか、行くぞ・
・そらっ！

(ロン、フィオナを肩に持ち上げる。)

ヘティー (静かに。) (ロン・・お止めなさい。)

ロン 何がまずい。この子、素敵じゃない。いいか、しっ
かりつかまって。主役級のを一つ見せるんだからな。

ヘティー 止めなさい、ロン。すぐ下ろして。

ロン (フィオナに。) いいか？ よーし、行くぞ。

(ロン、目の覚めるようなターン。最初は成功。しかし二度
目に移る時、滑って転ぶ。フィオナ、金切声を上げ

る。ロン、身体を捻(ひね)って背中から落ち、フィオナの
落下をかばう。)

ローズ ああつ、大変。(フィオナの傍に駆け寄る。)

フィオナ、貴女、大丈夫？

フィオナ (立ち上がるうとしながら。) ええ、ママ、大丈

夫みたい。(フィオナ、肘に触って。)

(ここをぶつつけたわ。
それだけよ、きつと。)

ヘティー お見せなさい。(フィオナの肘を調べる。)

クルト (も、これを見て。) 打ち身になるな、明日は。

(ヘティーに。) 熱い湿布が一番いい。

フィオナ いいの、そんなの。なんともない。ちょっと痛
むだけなんだから。

モナ その骨、あれは痛い。

(ここまでの間ロン、誰からも見られず、床にじっと横たわっ
ていたが、この時、非常な痛みを詠(こら)えながら立ち上

がる。右の踝(くるぶし)を地面につけると、ぐにやりと曲
がる。それをまつすぐにする時、猛烈な痛みが走る。それを
観客は見て取れる。ロン、それでもやっとのこと立ち上がる。
その後、何事もなかったような表情で、椅子の背を掴む。)

ロン 悪かった、フィオナ。

フィオナ いいの。

ロン 僕は組むのは駄目だ。何時もそうだ。一人でなくちゃ。
これで証明されたよ。

これで証明されたよ。

ローズ (フィオナに。) もう寝なさい、フィオナ。打った
ところはヘティーが見ます。

フィオナ はい、ママ。(ローズ、フィオナにキスする。)

お休み。お休みなさい、皆さん。お休み、ロン。貴方のせい
じゃないわ。私がバランスを崩したの。

(フィオナ退場。ヘティー後に続く。)

モナ 貴方、車を持つてるのね、ロン。

ロン うん。

モナ じゃあ、私が先に行くわ。道は分かってるんでしょ
う？

ロン 自分の庭みたいなもんさ。

(ローズ、この時に初めてロンを見る。じっと動かないロン
を見て、起こった事を見抜く。)

モナ (外へ出る時。) お休みなさい、ローズ。じゃあ、こ
れで。

ローズ (モナのキスを受けて。ロンを見つめながら。)

楽
しかったらよかったけど、モナ。お休み。
(モナ退場。)

クルト 主役級のダンス、楽しかったよ、ミスター・ヴェイル。しかし、これが五億マルク稼ぐのに匹敵する難しさとはね。

ロン 誰にでも失敗はあるものです、ヘル・マスト。いつでもその覚悟はなければ。特に田舎出の山猿、この僕なんかは。

(見えない程小さい動きだが、ロン、ぐらつとする。ぐつと椅子の背を掴む。)

ローズ(クルトに。)クルト、貴方先にマキシムに行っていて頂戴。私、ちよつとフィオナが心配になってきたの。医者に見せなきゃならないかもしれない。あとから自分の車で行きます。(クルトが抗弁しそうなを見て。)四十七年ものランソンを取っておいて。それにスクランブルエッグ。十分後に行きます。

クルト それ以上は待ちたくないね。

ローズ 本当に十分。四十七年のランソンを忘れないで。ちゃんとと言わないと、変な年代の妙なものを出されるのよ。それからキャビアー・オ・ブリニなんて馬鹿なものを取らないのよ。ただのスクランブルエッグ・・・

クルト(階段のところ。)失礼する、ミスター・ヴェイル。そして、これが最後の「失礼する」だと思つが? どうかな。

ロン(疲れた様子。)そんなところでしよう。やれやれ、馬鹿な意地の張り合い。でもお望みならいくらでも続けましょう。「失礼」と言つて、もう二度とその顔を見ないですむと思つと、なかなか良い気分だ。

ローズ(クルトが言い返そうとしているのを見てとつて。)もう行つて、クルト。この人の言う通り。馬鹿な意地の張り合い。

クルト 馬鹿かどうかは何時か分かる。これが「馬鹿な」くらいで済むと思つたら大間違いだ。

(クルト退場。クルトが見えなくなるや否やロン、膝からくずおれる。)

ローズ(威厳をもって。)横になって、すぐに。仰向けに。そう。(ローズ、踝を調べる。)やはり折れてるわ。

ロン 折れちゃいない。捻挫だ。

ローズ 骨折。これは。

ロン 骨折だ、とか捻挫だ、とか、君に分かるのか。

ローズ 戦時中、空襲救助班にいたんですからね。本当に意地っぱりのお馬鹿さん。立つたままで体重をかけたたりして。4
余計ひどくしたわ。

ロン あのナチ野郎に笑われてたまるか。のびた姿など見せてみる。あいつ、腹を抱えて笑つたらつ。

ローズ じつとしているのよ。他は動かしても、そこを動かしちゃ駄目。今クッションを持って来るわ。

(ローズ、クッションを取りに出る。ヘティー、帰つて来る。)

ローズ ヘティー、マートン先生を呼んで。すぐ来て貰つて。ロンが骨折。

ロン 捻挫

ローズ 骨折。捻挫じゃないわ、残念ながら。

ヘティー 可哀相。

ローズ(疲れたように。)心にもない事を。可哀相だなん

て。

ヘティー たいした紳士。逆境にあつて、微笑みを絶やさず、ね。

ローズ マートン先生の電話番号は、私の手帳にあるわ、ヘティー。

(ヘティー退場。ローズ、ロンの傍に膝をついて、ゆっくり足を持ち上げ、踝の下にクッションを置く。ロン、呻く。)

ローズ(床の上で、ロンの傍にいて。) 痛かった？ でもこの方がいいから。

(ロン、急にローズを掴み、顔をローズの腹のあたりに埋める。)

ロン(啜り泣く。) ああ、ローズ。畜生！

ローズ(ロンの頭を撫でながらあ。) ひどく痛むの？

ロン 立っていた時はひどかった。今は痛まない。

ローズ じゃあ、じつとそうしているのよ。

ロン(また泣き出す。) ああ、畜生！

ローズ 何なの、畜生って？

ロン ひどい話だ。

ローズ すぐ治るわよ、ロン。

ロン この馬鹿な骨折の事を言っているんじゃないんだ。

この僕のことを言ってるんだ。君と僕のことを言ってるんだ。君達みんな僕のことを大馬鹿野郎だと思ってる。狙っているものが手に入るだなんて、甘い甘いつてね。そつだ。あ

あ、そんなところだろう。だけど何時も僕は子供の時に言われていた。なあ、ロン、お前なあ、一生懸命働いて、「よし、

うまく行った。俺はこれでいいんだ。」って言えるようになる

らなきや駄目なんだ。そうでなきや落伍者よ。畜生！ それは本当なんだ。落伍者を見てみるよ。いるんだ、この豊かな社会っていうやつにだって、ちゃんと落伍者が。

(ロン、涙で汚れた顔を上げ、ローズを見る。ローズ、無言。ロンを見下ろして、機械的に彼の髪を撫でている。)

ロン 自分で道を切り開いて行くっていうのが、何故悪いんだ。君だって今までやって来たことじゃないか。

ローズ そつ。

ロン 僕がそれをやると何故汚い奴って言われなきやならないんだ。

ローズ 私のことだってそう思っているのよ、みんな。

ロン それは違う。君だってそれは違つて知ってるんだ。(再び啜り泣く。) 諦められないんだ、僕は君が。そうしよ

うとしても無駄なんだ。モナにしようつて、そりゃ振りは出

来るよ。だけどあいつなんかうんざりなんだ。それにサムも

うんざり。他の連中もみんなうんざりなんだ。君だけなんだ、

ローズ。君が諦められないんだよ。僕を追っ払わないで。お願いだよ。

(ローズ、答えない。問あり。ロン、少し自分を取り戻す。)

ロン また芝居をやつてると思つてるんだ。ただ金づるに

緘(すが)つていたんだつてね。君がそう考えるのは分かる。それは無理もないさ。僕が君だったらやはりそう思うも

の。そつだ。正直言つて、最初はそつだつた。「何？ ロース・フィッシュ？ 知ってるよ、よく。明日だつて行くこ

とになつてるんだぜ。あのお城にさ。まあ一晩泊まることになるだろうな。そつだよ、ローズ、あれは素敵な女さ。新聞

に書いてあるのとは大違い。新聞の言うことなんか信用出来ないってことよ。そう。面白いんだよ。それに、飛び切りの美人。あたりきさ、僕にメロメロよ。」

(ロン、またしつかりとローズに縋りつく。)

ロン けど今は違うんだ、ローズ。何がどうなったんだか、僕にはさっぱり分からない、本当に。今はすつかり違うんだ。畜生！僕はクルトを妬(や)いてるんだ。僕が！妬くなんて。笑っちゃうよ、全く。(ロン、再び噁り泣き始める。)

僕には分からない。だいたい、たいして君には会ってでもないんだ。朝、時々呼んでくれる。ここへ来たって話すことなんかありはしない。ただ誰かの噂話。君の友達は僕をゴミみたいに扱(あつか)うし、君だつてそうだ。ただちよつと矛先を弛(ゆる)めているだけさ。それなのに、君なしでいられないなんて。僕には君が必要なんだよ、ローズ。

(ロン、再びローズを見上げる。)

ロン 何がどうしてそうなったのか、皆目分からないんだ、ローズ。だけど僕には君が必要なんだよ。

(ロン、じつとローズを見上げて答を待っている。その時へティー登場。)

へティー マートン先生はもう出ました。病院に電話して、救急車も呼んだわ。

ローズ 有難う、へティー。手際よかったわ。もう少ししたらマクシムに電話して。今夜は行かないって言つて頂戴。

へティー このことを話すのね。

ローズ これは話さない。

へティー じゃあ、何て言うの。

ローズ この状況で、一番いいと思うこと。

へティー この状況って、何なの？

ローズ ロンに私が必要っていうこと。

(ローズの頭、ロンの上に保護するようにかぶさる。)

(幕)

第二幕

第一場

(場 同じ。二箇月後。)

(テラスに五人の登場人物。(訳註)ローズ、へティー、ロン、サム、フィオナ)ローズ、珈琲を注ぎ、ロンに渡している。ロン、杖をつきながらカップを他の人々に回す。サム・デュヴィーンが新しい顔。四十半ば。痩せた、運動で鍛えられた身体。昼食の後。)

ローズ(ロンにカップを渡しながら。)

これはへティーの。

こんなこと、しないでいいの。坐つてらっしゃい。

ロン 大丈夫さ。体重さえかけなければ、医者はいって言つてるんだ。

ローズ フィオナ、貴女、珈琲を配つて頂戴。

ロン(カップをへティーに渡しながら。)

昨日折つたばかりっていう扱いじゃないか。冗談じゃない。もう一週間前からギブスは取れてるんだ。

サム その通りですよ、奥さん。この状態になれば足は使えば使う程バレーへの復帰は早いです。

ロン 僕はバレーにはもう復帰しない。

(ロン、坐る。サム、驚いてロンを見る。)

ローズ（カップをフィオナに渡しながら。）デュヴィーンさんに。

サム ダンスは辞めたっていうことか。

ロン 辞めた。知っていると思っていたけど。

サム 私には話してないぞ。

ロン 他の人達には話してる。監督にも。貴方には話せなかった。怖かったんだ、きっと。何を言われるか分かってるから。

ローズ ここで仰る台詞は？ デュヴィーンさん。

サム（軽く。）ないですね、何も。何か言わなくちゃいけないのかな。

ローズ（少し防衛するように。）ロンが自分で考えたんですわ。私の入れ知恵じゃないの。

サム ああ、それは分かっています。

ローズ そうは言っても、辞めると聞いて嬉しい気持ちは隠せませんわ。私、ダンサーの妻っていうのはあまり嬉しくありませんの。一晩限りの舞台でヨーロッパ中移動する、それについて回るのね。

サム（礼儀正しく。）そうでしょう。ダンサーの妻って、誰でもそうです。夫にバレーを辞めさせたいんです。

ロン 問題は、これくらい稼ぎにならない職業は他にないっていう事さ。それに、汗水たらして練習して、やっとトップになれるかっていう頃になると、お仕舞いなんだ。筋肉がもう動かなくなっているね。四十にならないうちに定年が来るっていう職業が他にあるか、訊きたいもんだ・・・年金もつかずね。

サム そう。分の悪い仕事だ。もし踊るのが好きでなければね。

ロン 僕は好きだったことなど一度もない。先刻ご承知の筈だ。酷い事を言って、よく怒らせた。

サム そうだった。それに私はバレーのことになるとすぐかっとなるから・・・

ローズ この人、上手なんですわ、デュヴィーンさん。

サム テクニクはいいです。だけど最高の水準に行くには、もう少し真剣にやらなきゃいけないかったな。

ロン ええっ？ サム、そりゃないよ。僕は練習をさぼった事は一度もないぜ。

サム（微笑んで。）監督に言って、さぼったらサラリーを減らすようにしておいたからね。そうでもしなきゃ危ない危ない。それにさぼらない以上のことが必要なんだ。

ローズ（明るく。）とにかくロンがいなくなっても、それほどひどい打撃は受けないっていう事ですわね、デュヴィーンさん。

サム なんとか生きのびられるでしょう。（ロンに。）じゃあ、これからは何をやるんだい、ロン。

ロン まだはつきりしてない。ローズが旅行代理店を知っているんだ。そいつは少し運転資金がいるらしい。それに相棒を探りたいらしいんだ。ただ、これにするかどうかは決めてない。

（サム、「分かる」という風に微笑する。）

ロン もっとやってみたいと思っているのは、ローズと二人でパリに小さな画廊を持つ事なんだ。

サム 絵が好きだとは知らなかったな。

ロン いや、好きかどうかは僕も分からない。だけどローズは好きなんだ。僕は物覚えは良い方だし・・・そうだろう？

ローズ。

ローズ（優しく。）物覚え、悪い方ね。それに私、教えるのは下手だし。でも画廊は楽しそうだわ。一箇月たらないうちに破産でしょう、多分。でも、楽しそう。（ローズ、ロンの手を握る。）

ヘティー（突然立ち上がった。）お客様を急がせる訳じゃないけど、デュヴィーンさんにはロールスで帰って頂くっていう話だったわね。ちよつとガストンに用意させます。

ローズ そうね。そうして頂戴。

（ヘティー退場。）

サム これはご親切に。

ローズ いいえ、ここらはタクシーがひどく高くて。

ロン サンダーボードは売っちゃったの？ サム。

サム いや、ニューヨークから帰って来るまで、人に貸したんだ。

ロン（軽い調子で。）マイケルに？ （訳註 二一九頁参照。主役を演じたマイケル。）

サム そう。

ローズ 今夜発つんですの？ デュヴィーンさん。

サム いいえ、明日の夜です、奥さん・・・パリ発で。

ロン やれやれ、「デュヴィーンさん」だの、「奥さん」だの、もうこれは止めようよ。食事での会話は素晴らしかった。そして二人とも僕にこっそり、「なんて良い人なんだ」っ

て言ってるんだ。だから・・・

ローズとサム（同時に呟く。）ロン、駄目よ。ロン、困るじゃないか。まいっちゃうな。困るわ、ロン。

ロン 二人とも僕に同じ事を言ったんだ。「思っていたのと大違い。良い人じゃない。」「思っていたのと大違いだよ、ロン。良い人じゃないか。」って。嘘だなんて言わせないぞ。（答なし。）

ロン だから、サム、ローズ、と呼びあつたらどうなんだ。

ローズ（間の後。）貴方より、もっと礼儀正しい年代にいるのよ、私達。ちゃんと許しを得てからでないと、名前では呼びあわない。（微笑んで。）そつね、サム？

サム（微笑み返して。）許しを得てですね、ローズ。その通り。ただ、同じ年代って言うのは違う。僕は古い年代だ。貴方方二人の年代とは違います。

（ヘティー、三通の手紙を持って戻って来る。これをローズに渡す。）

サム ああ、それとも貴女がロンの年代じゃないと言われらるなら、それこそ大間違いですよ。

ローズ（手紙の封を切りながら。）女の年齢とは、自分が自分自身に与えている年を言うのですわ。私何時も、ロンのおばあさんの年齢だと思っている。ちよつと失礼します。

（訳註 手紙を開ける事を断っている。）

サム どうぞ、どうぞ。

（ローズ、二通を開き、読む。）

ロン ニューヨークで出すバレーはどう？ 調子。

サム ニューヨークじゃないんだ。ハリウッドなんだ。

ロン 何の映画？

サム 知らないんだ。誰が出るのかも知らない。

ロン（微笑して。）でも金は分かっている。

サム（微笑み返して。）おぼろげに。

ロン かなりの額？

サム 最高じゃない。いい……とも言えないな。まじつていところか。

ローズ（ヘティーに。手紙を指差しながら。）こちらはずきり断つて。こっちは条件付きの承諾。（ヘティーに第三の手紙を、開かないまま渡して。）これは捨てて。

ヘティー 消印ぐらいは見たらどうかしら。

ローズ（封筒を見て。）あ、帰って来たのね。そろそろその頃かなとは思っていたわ。

（ローズ、手紙をヘティーに渡す。引きちぎる動作。ヘティー、頷き、退場。）

ロン クルト？

ローズ そう。

サム クルト・マスト？

ローズ ええ、婚約していた、あの。

サム（頷いて。）カプリでのあの人の記者会見、読みました。例の、「貴女の人生には、この私しかないのだ。デュッセルドルフでの挙式は、滞りなく行われるのだ。」っていうやつ。私には何故か、哀れに聞こえました。

ローズ 哀れですって？ 単なる強がり。それに法螺。だつてこの二箇月、あの人は何のやりとりもなしですから。

サム そうでしょうね。

ロン じゃあ「哀れ」って言うのは？

サム それぐらいの法螺でもふかないと、プライドが許さなかつたっていう、あの人の心根が。金で買えなかつたのはこの話ぐらいのものじゃないかな。そしてそれがあの人には一番こたえている。随分愛していたんですね、あの人は、貴女を。

（フィオナーこの時まで、バートランド・ラッセルの「西欧哲学の歴史」を読んでいたが、この時に初めて頭を上げてサムをちらつと見る。このサムの台詞が、今までの会話の中で、彼女にとって初めての聴く価値のある台詞。）

ロン ローズを愛さない人間なんて、いるのかな。

サム それはそうだ。

ローズ クルトのことをそんなに哀れに思う事はないわ、サム。あの人は、自分の事は自分で始末出来るの。なにしろ金があるんですからね。

サム こういふ問題の時に、連中は金で解決しようとする。物質主義って言うのか。違いますね。物質主義を通り越して、精神主義に見えますね。

（間）

ロン な、言っただろう？ ローズ。サムはこうなんだ。

可哀相に思える所がある人間しか好きにならないんだ。だから誰にでも、何か哀れな所を捜そうとする。この僕だつて見つけられたくちだ。最初に会った時、僕はその場でピルエットをたて続けに六回、ピタツとやった。他の連中は誰も出来なかつた。サムはその僕を可哀相に思っただんだ。そうだね、サム。

サム（静かに。）そうだ、ロン。全くその通り。

（フィオナ、立ち上がる。）

フィオナ ママ、私、プールに行つていい？

ローズ もっとと食休みが必要じゃない？

フィオナ そんなの迷信よ、年寄の……あつ……昔の人の。（握手のため手を伸ばして。）じゃ、さようなら、デユヴィーンさん。

サム ああ、じゃ、失礼。

（ローズはテーブルの上のテープレコーダーを見ている。）

ローズ 貴女、今朝これを使ったのね、フィオナ。

フィオナ （軽い調子で。）いいえ、ママ。

ローズ（鋭く。）フィオナ、どうして嘘をつくの。嘘をついて何になるの。貴女しか使う人はいないのよ。

フィオナ（ふくれて。）使おうとしたんだけど、止めたの。

ローズ 使ったのよ、貴女は。私に聞かせたくないの。そうでしょう。

（フィオナ、答えない。）

ローズ 分かったわ。聞かせたくない、その気持ちを尊重しましょう。でも、何の芝居？

フィオナ 「かもめ。」

ローズ でも何時かは聞かせてくれるわね。どの役でもいいけど。

フィオナ ええ、ママ。

サム 役者志望なんですね。

ロン 何が何でもっていう意気込み。それに、悪くないんだ。僕は聞いた事があるけど。

ローズ（苦い調子。）特権ね。

ロン サム、役者はどうだと思つ？ この子。

サム（品定めするようにフィオナを見て。）質問していいですか。大変失礼な。

フィオナ 失礼な方がいいわ。

サム 演じるつて、楽しいと思えますか？

フィオナ（問の後。）いいえ、すぐうんざりでしょうね。

サム（賛成するように頷いて。）うん。役者になれますよ。

フィオナ ひっかけの質問だわ。分かったたの。でも答は正直のつもり。

サム そう。答は正直だと思つ。お母さんの血をひいているんですよ、その正直な所。とにかく幸運を祈ります。

（フィオナ、右手の階段に向く。ローズ、呼び止める。）

ローズ 貴女、今夜夕食に来るわね、フィオナ。ドウ・トツクウィルに。貴女を連れて行くつて約束したのよ、私。八時に。

フィオナ（素早く。）駄目。八時は無理。ヘティーを見送りに駅に行く時間、それ。

（問。）

ローズ 今何て言った？ フィオナ。

フィオナ ママ、何もまだ聞いてないの？

ローズ（奇妙な顔。）聞いてない？

（ローズ、ロンを見る。ロン、静かに頷く。）

ローズ（ロンに。）知ってたの？

ロン うん。

ローズ どこに行く積もりだつて？

ロン（肩をすくめて。）スコットランドじゃないかな。
（間。）

ローズ どうして私に何も話してくれないの、あの人。ひとつことも私に言わないで、こっそり私から逃げて行くっていう気？

（サムは外の景色を見ている。サムとフィオナ、居心地が悪い。）

ロン あの人、積もりでは、荷物が全部駅について、君が何を言おうと自分の意志が変わらないようにしておきたかったんじゃないかな。

ローズ そして、その「積もり」を貴方、焚付けたっていうこと？

ロン 意図を挫く努力はあまりしなかったな。

（ローズ、呆れた顔でロンからフィオナに目を移す。二人はそれぞれの度合いの同情をもってローズを見る。サムは三人の誰をも見ない。）

ローズ（やっど。）分かったわ、フィオナ。貴女をドウ・トゥクヴィルに連れて行くのはやめ。ヘティーを見送りなさい。

フィオナ 有難う、ママ。

（フィオナ、プールへと退場。ローズ、ロンの方を向く。）

ローズ ロン、ああロン。どうなってるの、これ。

（ロン、椅子から立ち上がり、びっこをひきながらローズに近づき、彼女の腰に腕を回す。サムはまだ風景を見ている。）

ロン どうなってるか、分かっている筈だよ。

ローズ あの人ったら。あの人ったら。

ロン こうなるのが一番いいんだ。ね。

ローズ 一言も言わないで。

ロン（誠実に。）ご免。僕が悪いんだ、ローズ。君がどんなふうに感じるかは分かっていた。だからヘティーに言っちゃったんだ。そんなことをしたら君がどうなるかって。

ローズ 貴方、引き止められなかったの。

ロン 死ぬしかないだろうな、僕が。

ローズ（厳しく。）何か言える言葉がなかったの。

ロン 何も無いな。何にも無い。ヘティーがどう感じているかは分かっているだろう。

（ロン、優しくローズにキスする。）

ローズ（挑むように。）分かったわ。行かせるのね。みんな出て行けばいいの。（サムの方を向く。）すみません。ちよつとした内輪のいざこざ。たいした事ではありません。

（サム、礼儀正しく、同情するという風に、頷く。）

ローズ うちの事をしてくれていた・・・ヘティーっていうんですが、それが出て行くって言うんです。五年もいてくれていたのに。私にさよならも言わないで。

サム（呟く。）それは・・・

ローズ 構わない。ロンの言う通りだわ。これが一番いいの。あの人、役に立ちはしなかった。何時だって。今日の昼の食事だってどう？ パテ・アン・クルットに、ヴォル・オ・ヴァン。パテ、パテ、パテ。どういう積もり？ パテで窒息しちゃうわよ。

（ヘティー登場。ローズ、素早く目を逸らす。）

ヘティー ロンのタクシーが来たわ。

(間あり。ローズ、やっと、辛い試練を受ける覚悟でヘティの方を向く。ヘティを見る。)

ローズ(静かに。)何て言ったの、ヘティー。

ヘティー ロンのタクシーが来たって。

ローズ タクシー? どういう事?

ヘティー(辛抱強く。)うちのロールスはデユヴィーンさんをモンテカルロまで送ります。ロンは自分では運転出来ない。私は午後忙し過ぎて運転は無理。ロンを病院まで連れて行けないし、治療の後まで待ってられない。だから...

ローズ 忙し過ぎね。そう、そうでしょうとも。

(ヘティー、ローズの口調に刺があるのに気づき、ロンの方を見る。ロン頷く。)

ロン うん。知ってる。

ヘティー そう。じゃあ私からは言わなくていいのね。

ローズ 汽車の時間は言って頂戴。

ヘティー 八時三十五分。ブルートレイン・マイナー。三等の車両を連結している。

ローズ(冷たく、また礼儀正しく。)ああ、じゃあ、まだ

出発前に話す時間はあるのね。

ヘティー ええ、その気におなりなら。

(ヘティー、振り向いて行くこととする。)

ローズ ヘティー。

(ヘティー、再び振り返る。)

ローズ この日付に意味があるの?

ヘティー 八月十日? 勿論。記念日というものが好きじゃないの。その癖しよっちゅう思い出す。

ローズ 私はすぐ忘れる性質(たち)。人に言われてやっと思ひ出す。

ヘティー 五年前の今日。だから丁度丸五年。区切りがい

いでしよう?

(ヘティー退場。ロン、杖をついてローズに近づく。)

ロン 「失礼な」なんて思っちゃ駄目だよ、ローズ。嫉妬だ。それだけなんだ。僕達みんな感情つてやつがあるじゃないか。しょうがないよ、な。(ロン、ローズにキスする。)

ローズ 感情。そう。始末におえないわね。(サムに。)感情が始末におえたら世の中はもっと暮らしよくなるんではないか。

サム(ヘティーの言葉をひいて。)「区切りよく」暮らせるようになるでしょうね。もっとも区切りよく暮らせるのが暮らしよくなることかどうかは疑問ですけど。

ロン(サムに近づいて。)じゃあ、サム、これで。今日は来てくれて有難う。成り行きを知って貰わないまま別れるのは心配だったんだ。

サム(握手しながら。)成り行きか。悪くないじゃないか。この成り行き。

ロン うん。ただ・・・(言い淀む。)

サム(静かに。)ただ・・・何だい。

ロン(肩をすくめる。困って。)ただ・・・たださ。とにかくローズのこと、僕が本気だつて分かつたらう?それが嬉しいよ。(熱心に。)それから、さっきローズについて言った事、あれは嘘じゃないんだろ?

サム(ローズに。微笑んで。)ロンはこうなんですよ。子

供みたいに疑り深くって。(ロンに。) そうだ、ロン。ローズについて僕がさっき言った事は、本気中の本気だよ。

ロン よかった。じゃあ僕はこれで。マッサージのじいさんときたら、遅れたらえらい事になるんだ。

サム(突然。ひどく熱心に。) なあ、ロン。ここだ。この筋肉は絶対気をつけなきゃ駄目だぜ。(自分の足の、ある部分を指し示す。) そこが効けばダンスは出来るんだからな・・・(サム、急に思い出して言い止む。微笑んで。) そうか、旅行代理店も画廊も、ダンスはしなくていいか。心配いらな

いんだ。

サム(微笑んで。) 心配いらぬ。全く。何も。じゃあ、サム、これで。ハリウッドでの成功を祈るよ。

サム そちらも。

ロン 結婚式に間に合うといいね。

サム 来月パリの近くにいたら、必ず出席するよ。

ロン(恥ずかしそうに。) エート、僕の付き人をやって欲しいから、と言えば、呼び水になるかな。

サム そりゃ、僕にはなるさ。だけど、MGMも、その気になつてくれるかな。とにかく間にあつ事を祈ろう。

(二人、握手する。気まずい雰囲気あり。それからロン、ローズの方を向く。)

ローズ いいわ。

(ロン、急に優しくローズを抱擁する。)

ロン 誰が何て言つたって、構いはしない。これはとんでもない奇跡だ。そしてその奇跡が、僕のものになっているんだ。

ローズ(笑つて。) 誰かのものになるのかしら、奇跡って?

ロン これは例外だ。

(ロン、ローズを放し、ドアに向かって杖を進む。サム、ドアを開けてやる。ロン、サムに何かを言おうとする。が、止め、困つたような微笑をし、サムの肩を叩く。ロン退場。ローズ、テラス左手に進み、ロンが出て行くのを見送る。ローズ、手を振り、投げキス。タクシーの発する音が聞こえる。)

ローズ(考え深そうに。) 奇跡が誰かのものになる。そんなこと、あるものかしらね。

サム(静かに。) ないですね。

(ローズ、ロンに手を振っていたが、急に振り返り、サムを見る。)

ローズ 私、命よりもロンを愛している。これも奇跡?

サム 命よりも。貴女の命よりも? それとも彼の命よりも?

(間。ローズ、サムに煙草を差し出す。サム、首を振る。ローズ、自分で一本取る。)

ローズ 単なる女性の感傷的な表現ね。ご免なさい。あの人を非常に愛しているっていう、ただそれだけの意味。サム(ローズの煙草に火を差し出しながら。礼儀正しく。) そうですね。

ローズ（挑むように。）そして一生。

（サム、答えない。）

ローズ 今度は「そうですね。」は？

サム 奇跡は信じないって言いました。

（間。）

ローズ（悲しそうに。）結局貴方は敵・・・なのね。

サム 率直で、知的な女性、その貴女にしては随分無骨な質問ですね。

ローズ 率直で知的な男性、その貴方にしては随分遠回しな答ですね。貴方は敵？ 味方？

サム 遠回しにしか答えられない質問ではありませんか。

僕は彼の友人、それに貴女が好きで、尊敬している。

ローズ でも・・・

サム（溜息をついて。）でも、敵だ。

ローズ 何故？

サム（優しく。）それはご自分でお答えになった方が楽しくありませんか。一つの言葉ですむ筈です。（訳註 この言葉は「嫉妬」らしい。）

ローズ 分かっています。便利過ぎるくらい。ヘティーのことを言うのに、ロンも使ったわ。でもヘティーにはあて嵌まらない。貴方にも当て嵌まらない筈だわ。どうして敵？

私がロンからバレーを取り上げるから？

サム そう。勿論。

ローズ（微笑む。）でもロンなしでもバレーは大丈夫、それが貴方の言葉だったわ。

サム バレーなしでもロンは大丈夫とは言いませんでした。

ローズ（微笑む。）ロンの言う通りね。貴方の頭にはバレーしかない。ロンはバレーなんか好きでもないのよ。全然問題にならない筈だわ。

サム 今はそうでしょう。単なる仕事にしか見えない。金持ちの女性が傍に控えているんですからね。

ローズ それほど金持ちでもないわ。この建物と絵を売り払って、年三千五百ポンドがやっとなっていうところ。

サム それに貴女が加わる。

ローズ ええ。

サム さっきの二つの仕事。旅行代理店と画廊。なんていう取り合わせだ。一体、期待が持てるだけでも。あいつはそのどちらだって、一週間と持ちませんよ。思ったよりロンのことをご存じないって事です。

ローズ それほどバレーがあの人にとって大事？

サム ええ。あいつがまともにも出来る仕事はそれしかないからです。それはよくご存じでしょう。あいつが子供の頃、これだけは一人前になってやるうと腹に決めた、ただ一つの仕事なんです。勿論あいつ自身はそんな事に気がついてはいない。ロンは自分がどういいう人間か、考えた事などないんです。しかしバレーは彼にとって命綱なのです。丁度、泳げない男が荒海に投げ込まれた時の、救命胴着みたいなものです。

ローズ（一言一言考えながら。）あの人にバレーを続けさせる事は出来るんじゃないかしら。

（サム、短く笑う。）

ローズ（少し怒って。）私が無理に言えば、きつと。

サム（静かに。）朝九時までに練習に出させられますか。

ロゼ・ワイン、ナイトクラブ、ローマでの週末、ヨット、夜更かしのパーティー、これを全部させないでお願いしますか。

ローズ 出来ると思うわ。

サム 貴女を正直だと言ったのはつい先程でしたが。

ローズ その方向に努力は出来るわ。

サム そんな事をしたら、毎日が喧嘩でしょう。そうでなくとも起きる決裂が、早まるだけです。バレーは止めた方がいい。パリに連れて行って、旅行代理店でも画廊でも、何でもやらせた方がいい。その方がまだしもです。貴女にとつても、ロンにとつても。私は行かなければ。

ローズ(サムを止めて。)これは決して続かない、そう思っているのね。

サム ええ。

ローズ 何故でしょう。

サム ロンの事を知っているからです。

ローズ 私の事はご存じない筈よ。

サム 週刊誌で読みました、それに今お会いしました。愛していない男四人を夫にし、それにより現在の地位を確保し、そろそろ落ち着く時だと、今度は愛している男を夫にしようとしている女性。

ローズ どうやら、ロンを愛しているという点は認めて下さったようね。

サム それは前にも認めた筈です。ただ、その期間を言っているのです。

ローズ どのくらい続くの？

サム 最長六箇月です。それ以上ロンを愛するのは無理。

これが今までの最長記録です。

ローズ その記録は軽く破れそつたわ。

サム そうでしょうね。慥に貴女はタフだ。倍、つまり一年は続くでしょう。

ローズ たった一年？ 一生のつもり、私。

サム 大丈夫です。その一年は一生の長さに見える筈です。

ローズ ロンを愛するのが、そんなに難しい。どうしてでしょう。

サム 愛を返して来ない人間を愛せなくなるのは、自然の成り行きなのです。

ローズ あの人は愛を返してきます。私は愛されているんです。

(サム、沈黙。)

ローズ とにかく、あの人は私を必要としているんです。

サム そうです。あいつはいつでも誰かを必要としてきた。これからも必要とするでしょう。

ローズ それで安心だわ。必要とされさえすればいいの。それ以上は何も望まない、私。

サム(ゆつくりと。)そういう気持ちでしょう、今は。でもこの、ロンから必要とされるという事態に貴女はまだ慣れていない。分かっていますか、ロンのタイプの人間は必ず最後には自分が必要とした人間を憎むようになる。どうしてもそうなるんだ。それは衝動的なんだ。勿論憎悪のみの憎悪ではないのでしょう。愛による憎悪、憎悪による愛・・・フロイド流に言えば、何か説明があるでしょう。しかしそんな説明はまがいもの、本物とは似ても似つかない。いいですか。

朝から晩まで、来る日も来る日も、顔のど真ん中を、顎をぶ
ん殴られる。殴る奴の気持ちがどうなのか、そんな事はもう
問題じゃない。心理学者が勝手に分析でもすればいい、こち
らはひたすら殴られた顎をいたわる。痛みだけでも出て行っ
てくれと祈るのが精一杯だ。六箇月。新婚旅行の後、六箇月
もたない。賭けをしましょうか。

ローズ いいえ。貴方からお金は戴きたくないわ。

サム 何故ですか。私の金だって、貴女と同じ、ぎりぎ
りの辛抱で得たものですよ。

ローズ（やつと、怒りを含んで。） ロンの事は一から十ま
で承知っていう顔ね・・・ たった六箇月のくせに。

サム 六箇月？ 誰がそんな事を言いました？

ローズ（かぶせるように。） だって、今の話で・・・
サム（同様に、かぶせて。） ほう、今の話から？ 違いま
すね。六箇月なんかじゃない。殴られ続けてどのくらいにな
るか。待って下さい・・・ エート・・・ もう七年。いや、そ
んなにたいした事じゃない。殴られたって、次に殴られるま
でに間があった。（考えてみれば）回復の期間があった。そ
んなには会わないようにしたし、それに予め口にマウスピー
スを入れておいたり。

（間。）

ローズ 貴方の狙いが分かかっていないような気がするわ、
サム。ロンをどうしたいって言うの？

サム 父親の役目。

ローズ という事は？

サム 初めてロンに会ったのは、一九五二年。あいつはバ

レー・ランベールにいた。そこに入る為に家出して来たんで
す。母親は死んでいて、父親のことは嫌っていた。仲間の子
供達からは嫌われ、ロンドンでは一人住まいだった。今だっ
てロンを見ると、面倒を見てやらなきゃ、という気になるで
しょう。その頃のロンだ。どれだけ頼りなかつたか、想像が
つくでしょう。私は面倒をみた。それからずっとです。影に
なり日向になって助けた。まあ、貴女が現われるまでは、と
いう事になるか。とにかく私はここであいつに仕事を見つけ
てやり、時々邪魔はあつても、あいつが必要とする時は大抵
は助けになってやれたのです。

ローズ そう。

（間。）

サム（ゆっくりと。） 「そう」（という言葉）には、いろ
んな言い方があります。貴女はその言い方にしたんですね、
ローズ。どうしてその言い方になったんです。ロンのせいだ
な、きっと。

ローズ 違います。ロンは何も言ってない。それは違いま
す。

サム いや、あいつのせいだ。

ローズ そうね、じゃロンのせい。ひょっとしてロンの言
う通りかもしれない。

サム（静かに。） やはりそうか。しかしロンの言う通りじゃ
決してない。僭越ですがこれだけは言わせて貰います。感情
は時として抑える事が出来ないものです。しかしその表現は
必ず抑えられる。表現とはそういうものなのです。

ローズ 随分高貴に聞こえるわ。

サム いや高貴なんかじゃない。やりにくくて、時には
恥ずべき事です。それに普通は厭な気分になる。しかし下品
ではないのです。

ローズ ご免なさい。

サム いいです、もう。

ローズ ロンと喧嘩になったのね。いけなかったわ。

サム 喧嘩はしたくなかった。

ローズ でも、もう決めたんでしょ。

サム ええ。リッツのバーで一杯やっておさらばにしよう
かと。

ローズ それだけ？

サム それだけ。

ローズ 簡単ね。

サム もう、うんざりなんです。七年というのは長い。そ
れに今じゃ他に踊る奴がいるし。

ローズ ええ、聞きました。残念だね。

サム ちつとも。これは。

ローズ 私のせい？ 捜したのは？

サム ロンですか、そう言ったのは。

ローズ ええ、まあ。

サム そりや随分な勢いで言っただろうな。(ロンの口真似
をする。)「サムはやつかみやだからな、ローズ。それに占
有欲が強いんだ。分かるだろう？ 僕の人生に君が現われ
てからは、サムはおかしくなっちゃった。僕はそれが我慢出
来ないんだ。」こういう調子、そつでしよう。

ローズ ええ、まあその調子。新しい車のことを貴方がやつ

かんで・・・貴方の車が貧弱に見えるからって・・・

(サム笑う。本物の、愛情のこもった笑い。)

サム はっはっは。これはいいや。実にいい。まさにロン
ならでいい。車をやつかんだ。あの馬鹿が考えそうなことだ。

(静かに、じつとローズの顔を見て。) 今年はバレエを三つ
やる予定で来たんです。ロンが全部主役のつもりでした。鼻
屑じゃありません。確かにあいつは主役級のダンサーです。

二つはやりました。もつとうまく出来た筈ですが、あれなら
まあまあです・・・それから三つ目にかかりました。その時
に貴女が現われたのです。あいつはリハーサルを二度さぼつ
た。そこで私は首にした。別の男を主役にとつた。まだうま

くはないが、これからという奴を。少なくともそいつはさぼ
りはしない。これを聞いてロンは早速新米をおろしにかかつ
た。家に帰ると、私の前で狂言自殺だ。効き目がないと分か

ると、さつさと自分の車に飛び乗って、エンジンをやけのよ
うにふかして、真夜中の街に出て行った。貴女のところへ来
たんでしよう。普段なら追っかけるのですが、この時はやめ
ました。もううんざりだったんです。二度とかかわるものか。

そう思いました。あの晩は。かつとはなっています。でも
しかしうんざり、それが結論でした。(テラスの端に出て、
外を見る。) 車が待つています。私はもう行かなければ。

ローズ (うわの空で。) もう？

サム 荷物を詰めないといけないんです。

ローズ (少しヒステリックに。) 荷物を詰める人ばかり。
サム (手を伸ばして。) では・・・大変御馳走さまでした。

有難う・・・

ローズ（握手しながら。）「ロンにうんざり・・・もしそうなら、何故私の敵なのかしら。」

サム（微笑む。）「爆弾投下！」の命令ですね。爆撃機に乗っていた頃よくこの命令を出したものです。そうです。結局はまだあいつにうんざりしきってはいない、という事なんでしょう。あいつの顔など二度と見たくない。それはその通りです。だが、あのかけた七年間を考えると・・・ああ、あの努力・・・あれが全くの無駄・・・ゴミ箱に捨ててしまう・・・もう後戻りはない・・・二度と。バレエの事を言っているんじゃないですね。あいつはニジンスキーにはなれなかったでしょう。コーヴェント・ガーデンで二、三年端役で踊れる、ぐらいがせきの山。あいつの伝記が世に出るなんて事もありません。釈迦力に頑張ったところで、です。貴女があいつの人生に登場しなかったとしても、です。違うんだ。バレエじゃない。あいつ自身なんだ。あいつという人間そのものに私は働きかけていた。一人前に仕立て上げようと思っていただけ。（言い止める。）ハッ、お笑いですね。全く。しかし、本気だったんです。とにかくこんな事は気にするだけ馬鹿げている。ロン・ヴェイル一人が、この世の中でどうなるかと、たいたした事じゃない。そうですね。

（間。）

ローズ（強い調子で。）「貴方ってなんて馬鹿なの、サム。私がロンを無一文でほっぽり出すとでも思っているの。」

サム いいえ、そうは思っていないです。別れる時あいつが貴女から受け取る生活費、それはかなりな金額でしょう。少なくともあいつが不平を言える筈のない金額が・・・しか

し、もし私のロンを見る目に狂いがなかったとすれば・・・あいつは必ず不平を言う。だけど他の連中はみんな、貴女が「気前が良すぎた。」と言うでしょう。貴女の友達、新聞、それに貴女の六番目の夫はね。勿論その時になってロンはもうバレエには戻れません。あの年では、六箇月休んでも致命傷です。それにその頃までにはロゼ、ブランドー、これで身体がすっかり弱っているでしょうからね。ただどうやらましがられる事は保証しますよ。あいつがロンドン、パリ、ニューヨーク、どんな町のどんなうらぶれたバーで飲んでいたら、「あいつがローズ・フィッシュの五番目の夫になった奴だぜ。運の良い奴だ。働かなくていいんだぜ。昔はダンサーだったというが、とても信じられんな。あの身体をみるよ。いちよう話しに行ってみるか。酔っ払うとあいつは面白いんだぜ。」

ローズ（笑って。）「そんな芝居で私がぎくりとなると思っ

て？」

サム ぎくり？ 何がぎくりですか。何かぎくりとしなきゃならない事でもあるのですか。

ローズ（間の後。）「そうね・・・そのバーに入って、あの人を見る・・・ぎくりだね。」

サム それは大丈夫です。そんなバーにいらっしやる事はありませんよ。

ローズ おかしいわ・・・貴方は私が行くと思っっているの。サム いいえ。私だっ行って行かないでしょうから。ローズ サム 貴方が・・・私が、このまま進むのに・・・

本当に反対なの？

サム 私が反対する？ 私の反対など何の意味もありません。貴女には楽しみを享受する権利がある。世界中の誰一人、また何物も、それに「止め」と命令する力はないのです。その楽しみが一人の人間の人生を賭けるものであっても……

ローズ そこでロンの台詞ね……「糞つたれ、ローズ、お前って奴は何時だつて思った通りやるんだ。」って。

サム そう。ロンの言う通りです。では、私はこれで……（サム、回れ右する。）

ローズ（静かに。サムを止めて。）ちょっと誤解だけは改めておきたいわ。「楽しみ」っていう言葉。ロンとの事、進める気。でもそれは「楽しみ」ではないわ。あの人が私を必要としてくれている。こんな事は今まで私の人生で起こった事がないの。そしてこれなしでは、私は生きていく意味がない。これは女の誇張ではないの、サム。その通りなんだから仕方がない。何故これがこんなに大切になったのか。ヘティーに言ったらあの人、ホラチウスを引いてきたわ。天に熊手を投げ付けても、必ず下に落ちてくる、って。あの人の言いたいのは、私がパーミンガム以来ずっと自分の本能を抑えつけてきた。だから天の方で今仕返しをしている……

サム ああ、その見方は逆だな。貴女がロンに対して持っている感情、それは天の貴女への復讐じゃなくて、貴女の天に対する復讐です。

ローズ（非常に怒って。）言い方だけは上手なのね。でもそれで何か違った意味になるっていつの。

サム 違った意味になるでしょうね。貴女は天と大格闘の

未、今の地位を得た。そろそろ交代の時期だ。代役としては、九つ年下のバレーダンサー、それもかなり有能なのを、選んだ。ローズ・フィッシュの席に坐らせるよう。これがその意味です。

（間）

ローズ（囁き声。）残酷、貴方って。

サム 残酷なのは私じゃない、真実が残酷なのです。

ローズ（声を強める。）（私がロンを選んだって言ったわね。）それは真実じゃないわ。初めて会った時のあの人の状態、それを思い出してごらんなさい。

サム（静かに。）覚えています。はつきりと。

ローズ 選んだのはあちらの方。

サム 知っています。触れば落ちる程熟していた……

ローズ 私である必要はなかった。他の誰でもよかった……

サム そう。多分。偶々貴女になった。

（間）

ローズ 嫌いだわ、貴方のこと。なんて嫌い。

サム 残念です。私は貴女が嫌いじゃない。嫌いどころか、大好きなんです。

（間）

ローズ（哀願するよつに。）ああ、お願い、サム。分かって下さらないかしら……

（ヘティー登場）

ヘティー（ローズを無視して、サムに。）車が待っていますのでお忘れのないよう、と、運転手から。

サム ええ、分かっています。待たせたのは悪かった。

ヘティー ああ、それは大丈夫。待つのは慣れていきますから。

(ヘティー、テラスから自分の小物を集める。)
サム(ローズに。儀礼的に。)
では、えー。昼食のお招き、有難うございました。

ローズ(同じ調子。)
いいえ、どういたしまして。態々お越し下さって有難うございました。

サム(ローズがついて来るのを止めて。)
いいえ、どうかお見送りはなしで。階段は疲れます。今朝お疲れの様子を見ました。

ローズ(微笑んで。)
ええ、少し。この咳のせい。変な咳。じゃあ、今度お会いするのは結婚式……ね、きつと。

サム ええ。間に合えば。約束します。では。
ローズ さようなら。

(サム退場。ヘティーはまだ小物を集めている。)
ヘティー(ローズに背を向けたまま。)
「ナポレオンの恋」、これ、私の？ それとも……

ローズ 貴女の。

ヘティー 「海を越え、空へ」は？
ローズ 私の。

ヘティー あ、そうね。

ローズ ヘティー、貴女どうして出て行くの？
ヘティー 自分で分かっている筈よ。ここまで来れば。
ローズ 一言で……もう一回言ってみて。

(ローズ、椅子に坐る。ヘティーを見る。ヘティー、今は振り返っていて、ローズを見つめる。)

ヘティー 私の大切嫌いな事二つ、それは不正直と卑怯。ローズ 卑怯？ それは聞いた事がなかったわ。

ヘティー お金を貰っていて仕事をしない。これは卑怯の一種。もう随分前から貴女、ベッドの始末は自分でしてるわ。ローズ 喻えて話すのは止めて。

ヘティー 止めないわ。それについてだからもう一つ。「愛の巢」の間は仕事は休みつていうのも、最初の契約にはなかったわ。最初からあったなんて顔をするなんて、貴女のズルよ。私はズルも嫌い。不正直、卑怯も嫌い。少なくとも貴女との関係では。

(ローズ、無言。)
ヘティー(やつと。)
いいのね。
ローズ(静かに。ヘティーを見ず。)
いいわ。

(ヘティー退場。ローズ、全く静かに坐っている。じつと前を見つめたまま。)
フィオナ、右手の階段から登場。乱れた髪が、泳いでいた事を示している。母親を見て、諦めて立ち止る。何か言われる事を覚悟する。しかしローズには全くフィオナが目にとまらない。フィオナ、奇妙な顔をして母親を見る。肩をすくめて家に入る。ローズ、空間を見つめたまま。)

(暗転。再び明るくなると、太陽は既に沈んでいて、テラスは陽がほんの少ししかさしてない。ローズはさっきの姿勢を全く崩していない。)

(ヘティー、家から登場。 衣装。)

ヘティー もう着替えの時間よ。ディナーパーティーなん

でしよう。

ローズ（姿勢を全く変えずに。）何時？

ヘティー 七時ちょっと過ぎ。（家の方に戻ろうとする。）

ローズ 待って。（立ち止り、飲み物の盆に進む。）少なくとも、お別れの一杯ぐらいは。

ヘティー 有難う。私はビール。

ローズ（疲れたように。）ヘティー、貴女が私だったとしたら・・・この二、三週間の私だったとしたら、どうしていたかしら。

ヘティー そうね。「もうお仕舞い。」って、言ってたわね。

ローズ 本当に私だったとしたら、それは並大抵では出来る事ではないって分かる筈だわ。

ヘティー そうね。並大抵では駄目ね。分かるわ。でも、私がやる事はそれね。

ローズ あの人がお仕舞いにしないって言ったら？

ヘティー 自分でさよならするわね。

ローズ 追っかけてきたら？

ヘティー ちよつと自惚れが強いんじゃない？

ローズ（静かに。）いいえ。自惚れじゃないわね。少なくともこの時点では。あの人は私が必要なの。

ヘティー それなら言ってるわね。「私の方は貴方なんが必要としてはいないのよ。」って。

ローズ あの人がそれを信じると思ってる？ あの人が近くにいる時、私がどんな風だったか、貴女ちゃんと見ているでしょう？

ヘティー 見ていたわ。まるで女学生。つぶなつぶな。そ

うね。一番いいのは・・・お前なんかに頼るものか、って気分させる事ね。甘い夢、希望を打ち砕く事だわ。

ローズ どうやって。

ヘティー（肩をすくめる。）それは考えていなかった。ちよつと時間を頂戴。（暫くして。）彼が貴女から期待しているもの、それは、安全、保護、それにそれが続く事。とにかく母親の仕事。そうね？

ローズ ええ。

ヘティー それなら、何か酷く残酷で、徹底的に怒らせる事を言うわね。面と向かって。保護などという依頼心を起こさせるものなんか、木端微塵に吹き飛ばすような、そういう残酷な事。甘ったれ坊やの乳くさい願望なんか、かけらも残らないような。

ローズ（ゆっくりと頷く。）貴女、考えていなかった、って言ったわ。時間を頂戴、とも。でも数秒で結論が出た。そして出て来た結論は同じ。私がこの午後の四、五時間必死に考えてやつと出た結論と。私よりずっと正解の見つけ方は早かったって、貴女は言うかもしれない。でも貴女は直接の当事者ではないの、ヘティー。当事者になれば、よく人が言う事だけど、感情が理性を乱して・・・

（ローズの声、最初は落ち着いているが、ここまで来ると、割れそうになる。ローズ、テーブルコーダーに向かう。フィオナが使って、そのままテーブルに置き忘れてあったのである。）

ローズ どうやって動かすのか教えて頂戴。私、忘れたわ。

（ヘティー、ローズを見る。何の事か見当がつかない。機

械の方に進み、スイッチを入れる。赤いランプがつく。)

ヘティー 録音? それとも再生?

ローズ 録音。

(ヘティー、ノブを操作する。)

ヘティー (指差して。) マイクはあそこ。マイクに近づく必要はなし。今いるところで大丈夫。テープはまだ動いてない。何か言ってみて。ヴォリユームを調節するわ。

ローズ ハロー、ロン。ハロー、ロン。ハロー、ロン。

(ヘティー、ヴォリユームを調節する。)

ヘティー いいわ。そのボタンを押すと録音になる。調子が悪かったり、言い間違えたりした時は、ここのボタンを押すとテープが止る。

ローズ 分かったわ。

ヘティー 操作は簡単。(扉の方へ進む。)

ローズ ヘティー。

(ヘティー、振り向く。)

ローズ いて頂戴。

ヘティー 分かったわ。

ローズ そのボタンは貴女がやって。動かなくなるといけないし、それに・・・言う事に詰まってしまうかもしれない。(声が次第に、内心の高まってくる感情を表し始める。)

ローズ (ヘティーに。) 始めて。

(ヘティー、ボタンを押す。リールがゆっくりと回り始める。)

ローズ ロン、貴方に話をするのに、こんなテープを使ったりして、悪いと思っています。でも、私は貴方も知っての通り、手紙を書くのが苦手、それに貴方だって書いたものよ

り私の声の方がいいんじゃないかと思って。勿論顔をあわせて話した方がいいとは思った。でも正直の話、私にはその勇氣はなかった。私、クルトのところに行きます。貴方とは終。その理由をお話しておきたいと思って。

(ローズ、素早い合図でヘティーに、止めるよう指示する。ここまではローズの声、しっかりと、快調であったが、ここで涙が溢れてくるのを感じたのである。ローズ、一口飲み、またヘティーに合図する。)

ローズ 貴方にはこの話、ショックでしょう、ロン。すまないとも思っているわ、私。

(ローズの声、再び平坦な、しっかりしたものになる。)

ローズ こんな事をしたくはなかった。だって私の気持ちは貴方に分かってるんですもの。つまり、この間までの私の気持ちは。でもつい最近、私はお芝居をしていた。この事を言わなくてはならないの。クルトが二、三日前に帰って来て、私に連絡を取ったわ。打ち合わせをしたの。でも私の貴方への気持ちがにせものだったなんて考えないで頂戴。特に最初の頃の私の気持ちを。私は貴方を愛していたわ、ロン。本当に。

(ローズ、ヘティーに合図する。悲しみに溢れて続けられない。ヘティー、テープ・レコーダーの位置からローズを見つめる。)

ヘティー 私だったら、もう止めるわね。手紙にするわ。

ローズ 涙でいっぱいしみを作って? それに震える筆跡? 駄目。これでなくっちゃ。大丈夫、これで。今やってしまわなくちゃ。今でなくっちゃ。ちょっと時間が経ってしまった

らもう永久に駄目。

(ローズ、涙を拭く。ヘティー、機械に戻る。)

ローズ(咳く。)愛していたわ、ロン。本当に

(ローズ、ヘティーに頭で合図。ヘティー、スイッチを入れる。)

ローズ でも私は誰かを長い間愛するって出来ない性質(たち)。これが私の困ったところ。それにとにかく、うまくいく筈はなかったわ。本当にうまくいく筈はなかった。だいたい私が、三部屋しかないアパートに落ち着いて住んでいられると思う? 結婚したり離婚したり、散々やってきたのは、そんな生活が厭だからこそじゃない。それに、五万ドルを蹴つとばすなんて、正気の女に出来ると思つて? これでお仕舞いよ、ロン。もう会う事はないわ。決して。クルトと一、二週間、どこかへ行くつもり。暫くしたら貴方だつて気にはなくなる筈。足が治つたら、バレーにお戻りなさい。結局何といつてもお金ね。さようなら、ロン、さようなら。そう、それからこれは言わなくちゃ・・・有難う、ロン。

(ヘティー、スイッチを切る。ローズの目、再び涙で溢れる。ヘティー、ローズに近づき、肩に手をかける。)

ローズ どうして私を放つておいてくれなかつたの。

ヘティー ご免なさい。ああ、ローズ、許して。

ローズ もう行かなくていいのよ、貴方。

ヘティー(テープ・レコーダーを指差して。)消せるわ、録音したのを。私が間違っているかもしれない。年をとっているの、私。私だつたらこうするつて言つた事も、自分では分かつていないのかもしれないわよ。

ローズ(涙の中から。)貴女の事、やつかみやだつてロンは言つた。

ヘティー(静かに。)そう。ただそれだけかもしれない。消しましょ。簡単よ。

ローズ いいえ。(少し我に帰る。)(ご免なさい、ヘティー。

誰かを賣めないではいられなかつた。決めたのは貴女じゃない。もつとつくに、一時間前から、私は決めていたの。(目を拭きながら。)貴女には物が見えているの。見えていなきやいいのにつて思う。でも見えているの。さあ、ここを出なくちゃ。

ヘティー クルトのところへ?

ローズ まさか。とにかく今日は駄目。今日どころか、暫くは駄目。それにクルトが今私をどう思つているかだつて分かりはしない。貴女、あの手紙を読んだの?

ヘティー ええ。

ローズ 今も?

(ヘティー、頷く。)

ローズ 今その事は考えない。今日はどこかホテルにするわ。

ヘティー 一緒に行つた方がいい?

ローズ 貴女はここ。私が出来ないのでロンがドウ・トゥクヴィルから電話してくる筈。あの人に言つて。すぐ家に帰るよ。ここに、ロン宛に、私から何か言いたいものがあるつて。あの人か聴いている時に、一緒にはいないで。

(ヘティー、頭を振る。(訳註 日本では頷くと同。)(

ローズ それからね、ヘティー。ロンの事を貴女がどう思つ

ているかは知ってるわ。でもあの人、今夜は不幸なの。それに二、三日、それはそれは不幸。こんな不幸はなかった程。それにこれからもないかもしれない。優しくして。

(ヘティ、頷く。)

ローズ そう簡単じゃないわ、きつと。聞いているだけでも。酷い事を言つてしよう。特に私に。でも忘れないで。酷ければ酷い程いいのよ。サムを呼ぶのもいいわ。近くで寄り添って、慰める人が必要なの。今夜は。あの人の気分にピッタリ合っている事だけを言つたのよ。それから、泣く時には肩を貸してやつて。

(ヘティ、再び頷く。ローズの目、また涙に溢れそうになる。)

ローズ ああ、ヘティ。(言い淀む。)

ヘティ 何？

ローズ (微笑もつとする。)(今ちよつと思いついたの・・・私の方が怒る役、ロンの役だったら、何ていいのにな。)

(ローズ、素早く退場。)

(幕)

第二幕

第二場

(場 同じ。三箇月後。)

(夕方の八時頃。カクテルパーティーが丁度終わったところ。テラスにはパーティーを表す種々のものがある。居間の窓から、白いお仕着せを着た召使いが片付けをしているのが見える。テラスにはトランプのテーブルが出されていて、クルト

がヘティとモナを相手に、バカラをやっている。クルトが親で、丁度カードを手に持ったところ。)

クルト Faites vos jeux; Madames et Mesdemoiselles. Faites vos jeux. (さあ、賭けて下さい、皆さん。)

モナ さあ、今度は親の負ける番よ。

(モナ、五千フラン紙幣をバッグから取りだし、前に置く。)

クルト 一番の方、五千フラン。それから・・・)

(クルト、ヘティの方を向く。)

ヘティ 十。

クルト 二番の方、十フラン。

(ヘティ、硬貨を置く。クルト、カードを配る。まづ最初に二人に一枚ずつ、最後に自分に一枚。次にまた、二人に一枚ずつ、それから自分に一枚。モナ、クルトの右手に坐っている。自分の手を見る。)

モナ もう一枚。

ヘティ (自分の手を見て。)(このまま。)

(クルト、自分の手をテーブルに広げる。)

クルト (嬉しそうに笑つて。)(Et neuf en banque. (親は九。))

(クルト、二人から金を取る。)

モナ 畜生。どうしてこうなの。インチキしてるんでしょ？

クルト 勿論。しかけ、しかけ。パーティーが始まる前に何時間もかけてね。

モナ そうね。そつだと思つた。

ヘティ 私はお仕舞い。今日の私の持ち点 これでなし。(立ち上がる。)

クルト まだ大丈夫じゃないか、ヘティー。預金の状態は確かなものだろう？

ヘティー とんでもない。酷いもの。スポーティング・クラブに訊いてごらんさい。

モナ まだそこに借りがあつたの、ヘティー。

ヘティー 七十五万。

モナ もうたいたことないじゃない。でも、一時期はひと財産の借金だつたのね。

ヘティー そう。一時期は。貴族の称号があるイギリス女性性は、決して破産しないって思われていた頃。

モナ どのくらい？

ヘティー 一千万。

モナ そんなに沢山返しちやつたの？

ヘティー 何年もかかつて。少しづつ。

モナ ローズに頼めばよかつたのに。すぐ清算してくれたわ、きつと。

ヘティー そう。だからローズには頼めない。(暗に指している人物が分かるように。) 勿論誰か別の人が清算してやるうというのなら、話は別だけど。

クルト 今夜の稼ぎは二十二万が。はした金だな。しかし、このパーティー代ぐらひはでるぞ。

(シガーを満足そうにくゆらしながらクルト、札を数えるのに没頭する。クルトの後ろでヘティー、今の台詞「誰か別の人がクルトであることを指で示す。」)

モナ 払って上げればいいじゃないの、クルト。

クルト 払って上げる？ 何を。

モナ ヘティーがスポーティングクラブに借りているお金。クルト いくらなんだ。

モナ (少し小さい声で。) 七十五万。

(クルト、礼儀正しく笑う。単なる冗談を言われたという態度。ヘティー、諦めて肩をすくめる。)

(モナ、微笑む。)

モナ ああ、いいパーティーだつた。でも馬鹿なことをした。皆と一緒に帰ればよかつた。そうしたら何万もすらないですんでたのに。

クルト もう二、三回やるんだ。ついてくる。保証するよ。

モナ そうね。

ヘティー ここ、寒くない？

モナ いいえ、大丈夫。暖かいわ。(クルト、カードを配る。)

普通の十一月の気候だつたら、あの人数が全部部屋の中に詰め込まれていなきゃならなかつたのよ。よし、今まで賭け方じゃ駄目。倍にする。一万。いいわね。(クルト、頷く。)

モナ 何人来たの、ヘティー。(クルトに。) もう一枚。

ヘティー 三百と。...

(フィオナ登場。その時クルト、自分のカードを表にしてにやりと笑う。)

モナ 貴方つてどつという人、クルト。何時だつて...

(フィオナを見て。) あら、フィオナ。

フィオナ 今晚は... (ヘティーに。) ママは？

ヘティー 寢室。気分がよくないつて。

フィオナ あら、そう。

(クルト、この時までにモナに一枚カードを配っていて、今自分の札をあけるところ。)

クルト *Nauf en banque. On paie partout.* (親は九。親の勝ち)

モナ えーい・・・フィオナ、貴女がいるから、この言葉は言えないわね。さあ、じゃもう一回。

ヘティー (フィオナに。) (ママに何か用事?)

フィオナ 夕食を食べてからでなくちゃいけないかしら、外へ出るの。夕食の前だってママ、気にしないわね。

ヘティー 気にするわ。それを一番よく知っているのが貴女。それに、ママが決して止めない事を知っているのも貴女。

フィオナ (この言葉には、さすがに困った表情。) 「天国と地獄」で、私の為に何か計画してくれたの。さよならパーティーか何か。

モナ (新しい手を並べて。) 八。少しよくなったわ。(クルト、支払う。)

モナ よーし。(賭け金を指差して。) (これはそのまま。)

フィオナ (続けて。) すっばかす訳にはいかないわ、ヘティー。それは駄目。

ヘティー (問の後。諦めの調子。) 勝手な子。我儘いっぱい。この海岸、子供にまで影響するのかしら。

フィオナ (涙声で。) (ママはその気になれば、私を飛行場で見送れるのよ。それは出来るんだって何時も言ってるのに。)

ヘティー そうね。その声の調子で、貴女が本気だって事は分かるわ。でも気遣いの集まりよ、あの芸術家の卵達。それに混じってママが見送りに行きたがるかしら。貴女はロン

ドンに発つ。結婚式まで帰っては来ない。そういう時、最後の夕食を一緒にとるのは、そんなに難しい事じゃないでしょう? 何とでも都合はつけられた筈よ。

フィオナ (声、高くなる。) つかなかったのよ、ヘティー。つけられなかったの。

クルト (勝ち誇った叫び。) 九。

フィオナ (ヘティーから逃げる為に、クルトに近寄って。) 勝つてるところ?

クルト (腕をフィオナの腰に回して。) ああ、フィオナ。そう。勝つてるところだよ。ちょっとした飯代だ。(フィオナを見上げる。)

うーん、これは美人になる顔だ。そのうち、男の心を傷めさせるぞ、この顔は。可愛い義理の娘。自慢出来るぞ、それも近い将来だ。

フィオナ 他人(ひと)の心を傷めたくはないわ、私。

クルト (またカードを配りながら。) 傷めたくない?

フィオナ 傷めたいのは私の心・・・誰か、ちゃんとした人によつて。

クルト 商売の原則には反するな。(モナに。) 不要?(自分のカードを表にする。)(ひきわけ。)(フィオナに。)

飛行機の時間は?

フィオナ 十二時。(ヘティーの方を見ながら。)(でも私、

夕食前に家を出るの。)

クルト ああ、じゃあ、さよならを言わなくちゃな。(立ち上がる。)

フィオナ 出るのはまだなんだけど。

クルト ああ、しかし、私の方が出なきゃならん。怒(い

か)れる三人のスイスの銀行家が家で私を待っている。夕食前に、連中に会わなきゃならんのだ。

フィオナ 怒れる？ どうして怒ってるの。

クルト 何故なら連中はスイス人。連中は銀行家。連中は待ってるからさ。銀行家は待たされないと事になってる。この私でも例外でないときている。(フィオナにキスして。)

さようなら、フィオナ。この義理の父親、好きかい？

フィオナ (判で押したように。実の籠らない言い方。) ええ、とても。とても好き。

ヘティー 義理の父親の経験豊富な、この子。覚えておいて。

フィオナ (ヘティーの言葉を無視して。) ママ、本当の病気じゃないんでしょう？

クルト 違う。違う。ちょっと疲れたんだ。それだけだ。

フィオナ (ヘティーをしつかり見ながら。) じゃあ私、ママのところに行くて来る。頼む事があるの。

(フィオナ退場。)

クルト あと三回。どう？ モナ。

モナ オーケー。

(クルト、配る。)

モナ 本当に、ただ疲れただけよね。ノー・カード。

クルト そうだ。疲れた。(モナに一枚、自分に一枚、配る。(訳註 モナの「ノー・カード」はカードがいらぬ、の意と思うが、不明。)) また九だぞ！ そう。疲れた、パーティーの。

ヘティー (疲れたように。皮肉を込めて。) パーティーの

後には、疲れが出るものよね、モナ。そして時には、血を吐くの。心配はいらぬ。

クルト (怒って、テーブルにカードを叩き付けて。) そんな事は言うな！

ヘティー どうして。

モナ そんなに悪いの？

クルト そんなに悪い訳がないだろ？ この間違い女の言う事は聞くな。この女は何でも芝居がかった事にしなきゃ、気がすまないんだ。

ヘティー 芝居はまだね。でも、こう言えば芝居がかっているかしら。「貴方って運のいい人ね、クルト。あの人の発作があんなに軽くって。もう少して貴方の将来のお嫁さん、死ぬところだったのよ。貴方のこの馬鹿なおひろめパーティーの為にね。」

クルト レイディー・ヘンリエッタ、よく覚えていて貰わねばなりませんな。この家では貴女は単なる雇人である事を。

ヘティー 但し、貴方に雇われているのではないの。私の雇い主は病人。医者に厳しく言い渡されている。もし三箇月療養所で完全な休養を取らなければ、その三箇月のうちに死ぬだろうと。そういう病人の面倒を出来るだけ見よ、とお金を支払われているのです。その私が言うのです。当然でしょう。いいですか。三百人以上も自分の家に呼んでパーティーを開き、その病人に客の扱いをさせる。医者の指示をどう思っているのですか。

クルト うるさい。そんな話は聞きたくない。モナ、もう一回だ。

(クルト、カードを配る。)

クルト(爆発するよつに。)(くそつ。ヘティー、パーティーはな、ローズがやりたいと言ったんだ。

ヘティー それはそつでしよう。療養所に入っていたつて、パーティーをやりたいつて言いだすのはローズでしようからな。そついつあの人を言いくるめて止めさせるつていつのが思いやり・・・

モナ もう一枚。確かに人は沢山いたわな、クルト。

クルト(怒つて。)(このシャトー・オーギュストにおさらばするんだ。六時のお茶のパーティーぐらい、するのが当たり前じゃないか。(カードを取つて。)(九。親の勝ちだ。

モナ くそつ、また負け。貴方つてまるで魔法使いな。銀行家の連中、まだ待つてゐるの？

クルト 当たり前さ。待つてゐるに決まつてゐる。

モナ そつ。じゃ、最後の一勝負。

(この時までにはロン、テラスに登場してゐる。車の近づく音はなかつたのである。従つてクルトもモナも、まだロンに気づかない。最初にヘティーが気づく。)

ロン(明るく頷きながら。)(ハロー、ヘティー。

ヘティー 何をしているの、貴方。こんなところで。

ロン 僕は招待されたんだ。

ヘティー 誰が招待したつていつの。

ロン モナだ。モナの招待状の、「そしてその友達」に当たるんだ、僕は。そつだろうか？ モナ。ハロー、クルト。

クルト(静かな怒りをもつて。モナに。)(本当か？

モナ 勿論違つたわ。招待なんかする訳が・・・

クルト(ロンに。)(すぐに出て行くんだな。それとも、警察を呼んで貰いたいか。

ロン 警察？ どうして警察なんだ。ゆうべカジノでモナに会つたんだ。モナが今日のこのパーティーに招待してくれただんだ。嘘だと思つたら、ほら。(ロン、招待状をポケットから取り出す。)(モナの招待状だ。

モナ 冗談だつたのよ、クルト。たーくさん持つていたから、私・・・まさかロンが本気にとるなんて思つてもいなかつたの。

ロン 僕は本気にとつたのさ、モナ。実に本気にな。今までにない素敵なパーティーになるつて聞いて、何が何でも来なくなつたんだ。

ヘティー じゃ、どうして終わつてから来たの。

ロン 良い質問だ、ヘティー。そつ言えば、君は何時だつたんだ。で遅くなつたんだが、こんな豪華なパーティーだ。九時以後だつてやつてゐるだろうと思つてな。

ヘティー パーティーは長引かなかつた。終なの。どうぞ、帰つて。

ロン そつか。終じゃあ、いる事は出来ないな。

モナ(素早く。)(私も出るところよ、ロン。

ロン よし。じゃあ、カン又まで乗せて行つてくれないか。

ヘティー 来る時にはどうしたの。

ロン あの上までバスで。そこから歩いて来た。

クルト(笑つて。)(バス？

ロン そつ。この海岸でもバスはあるんだ。

クルト あのラゴンダはどうしたんだ。売っ払ったのか。

ロン いや、売ってはいない。(ロン、居間の窓から中を見る。)

ヘティー いないわよ、ロン、そこには。あの人。

ロン 知ってる。寝室なんだ。上に明かりがついていた。

(モナに。) 悪いけどちょっと待ってくれないか。用を足して来たいんだ。

(ヘティー、ロンが家の中に入るのを止めようとする。)

ロン 大丈夫だ、ヘティー。道は分かってる。

(ヘティー、道を塞ぐ姿勢の儘。)

ロン 上には行かない。心配ならここに立って、階段を見張ってればいい。

ヘティー 分かったわ。

(ロン、微笑んで、中に入る。ヘティー、家の中が見える位置にロンを見守る。)

モナ(クルトに。) ああ、クルト。本当にご免なさい。でも私のせいじゃないわ。信じて。あの人本気だったなんて、私に分かる筈がないでしょう？

クルト 招待状を渡したな。

モナ 私から取ったのよ。見せたらひったくるようにして取ったの。カジノのバーで。(怒って。) 酷いわ。わざとやったと思ってるのね。あの人に会った事なんか一度もないわ、ローズがお払い箱にしてから。絶対に一度も。ゆうべが初めて。本当。バカラのテーブルに坐っていたら・・・

クルト(ヘティーに。) ラゴンダはどうしたんだ。

ヘティー(相変らず家の方を見つめながら。) ロンは、返

してきたわ。

クルト 嘘をつくな。返したのなら私にも分かる筈だ。このガレージにもないじゃないか。

ヘティー ローズが受け取る筈がないでしょう。

クルト じゃ、何処にあるんだ。

ヘティー 誰も知らないところ。ジュアンにある車庫。車庫の鍵も登録証明書もあるわ。車庫代はまだ払ってない・・・でもガソリン代は私もちね。

クルト ええっ？ あの車を使っているのか？

ヘティー ええ。そう。

(ヘティー、家から目を逸らす。ロンが帰って来るのが見えて安心したからである。)

ヘティー ただ置いておいて、錆び付かせるのは、馬鹿げているでしょう？

(ロン、帰って来る。)

ロン(テーブルを見て。) 誰が勝ってるんだ。

モナ クルトよ。私、すっからかん。行きましよう、ロン。

ロン 一勝負どうだ、クルト。

モナ 馬鹿な事言わないで、ロン。行きましよう。

ロン(しっかりと繰り返し返す。) 一勝負どうだ、クルト。

クルト いいだろ。バス代ぐらいは出してやるか。

ロン それほど安くはない。(紙幣を四、五枚投げ出す。) 普段そちらがやっている掛け金とまではいかないだろうが、バス代よりは少し多い。二万五千だ。

クルト(微笑して。) また誰かいい女を捕まえたか。

ロン いや、そういう金じゃない。一週間分のサラリーと

それにブルーバードを踊ってボーナスが出た・・・何時かピーターパンジーって言ったな。あれだ。覚えているか。親は僕がやる。(カードを配る。)

クルト カード。

(ロン、自分のカードを表にする。明らかに八か九。ロン、無表情。静かにクルトを見つめる。クルト、ポケットから紙幣を取り出し、テーブルに置く。)

クルト Suivi. (続いだ。)

(ロン、再びカードを配る。)

クルト いらぬい。

(ロン、カードを表にする。再びロンの勝ち。しかしロンの顔、何の表情も示さない。クルト、五万フランをテーブルに投げ、振り向いて出ようとす。)

ロン(静かに。止めるのか、クルト。)

(クルト、振り返り、テーブルに進む。指でテーブルを叩く。これは「勝負をする」の意。ロン、配る。)

クルト カード。

(ロン、一枚クルトに配る。それから自分のカードを指で叩く。これは「九」の意。クルト、再び紙幣を取り出し、テーブルに投げる。)

クルト Suivi. (続ける。)

モナ(ロンに。止めて、ロン。お願い。親は何時でも止められるわ。行きましよう。もうそれで二百ポンドにもなるじゃない。)

ロン 分かっている。だけどもう一回やれば、四百になるかもしれないぞ。

モナ それともゼロ。ゼロよ、多分。

ヘティー モナの言う通り。その金を持って出て行くのね。そして、つきまわったな。思っ事ね。

ロン(静かに。しかしクルトは Suivi. なんだ。ふん、どうしたものかな。)

(ローズ登場。パーティーの時のドレスを着ている。)

ローズ(家から出て来ながら。準備には苦労したけど、結局たいしたパーティーじゃなかったわね。まだ九時。それなのにだあれも残っている人はいやしい。酔っ払いが二、三人そのへんに転がっていたっておかしくないのに。)

(ローズの声、最後が弱くなる。ロンに気づいたからである。ロンはこの時までにはテーブルで顔をローズの方に向けている。)

ローズ(声、少しかすれる。しかし興奮を抑えて。あら、ロン。びっくりしたわ。)

ロン ハロー、ローズ。

ローズ パーティーにいた？ 見なかったわ。

ロン パーティーにはいなかった。残念ながら。間にあわなくて。

クルト モナだ。招待したのは。

モナ 私、しなかったわ。信じて、ローズ。招待なんかしなかった。

ローズ(心を抑えて。誰が招待したか、どうしてそんなに問題になるんでしょうね。この人今ここにいるのよ。それなのに、飲み物を勧める人がだーれもないのね。(飲み物の盆に進んで。何にする、ロン。やはりロゼ？)

ロン いや、最近はやらない。

ローズ あら、そうなの。(ローズ、ブランドーの罫に手をかける。)

ヘティー それに貴女もよ、ローズ・・・思い出して頂戴。

ローズ(罫を置きなおす。間の後。)そうね。私もだわ。

(テーブルに近づいて。)どう、調子は、ロン、近頃。元氣そうじゃない。ちよっと痩せたみたいね。

ロン そう。痩せた。僕の代わりに決めて欲しい事がある、

ローズ。ここに二十万フランある。僕が親で三回勝負した。

クルトは続けると言っている。僕は続けるべきだろうか。

ローズ 止めときなさい。お金を取っておく。

ロン これで決まりだ。よし、クルト。もう一勝負。四回目だ。

(ロン、配る。クルト、非常にゆっくりと、ロンを辛々させるように、自分の札を取り上げる。そして自分の札を投げ上げるような、あたかもそれが八か九であるかのような動きを与え、それから再びカードを握り、嘲るように笑う。)

クルト カード。

ロン ふん、それが相手を騙す手か。ひどく旧式な手だな。

それに滑稽だ。そんな事だろうと思っていた。(自分のカードを表にする。)親は九。

ローズ お見事ね、ロン。払いなさい、クルト。

(クルト、平静を装って、支払う。)

ローズ 心配する事ないのよ、ロン。パーティーで、それを払ってもお釣りが出る程勝っているんだから。

ロン 心配なんかしていない。

ローズ それはそうね。(クルトに。)貴方、もう行かな

きやいけない時間でしよう?

クルト もう出る時間だ。しかしもうちよっと残っていた方がよさそうだ。こここの坊やが家から無事に知られるか、見ておかなきゃ。なにしろ大金だからな。何が起こるか分からん。殴られて盗まれちゃ可哀相だ。

ロン 大金を持って行きはしない。

(ロン、札を数えている。二万五千を抜き取って胸のポケットに入れる。)

ロン ここに入ってきた時の金額、それだけだ。

(ロン、急にローズの方に近づき、残りの紙幣の束を突き出す。)

ロン そら、取るんだ。

ローズ 何を言っているの。

ロン 三十七万五千だ。これで世話になった分全部が返せたとおもうじゃない。とても届かない。しかし俺は返してみせる。びた一文借りなどなしにしてみせる。利子をつけてな。それまではこれだ。これでも取っておくんだ。

ローズ あら、ロン。随分頭に血が登っている言い方ね。

ロン そら、取るんだ。くそつ、取れ。

(ロン、札束をぎゅっと捻って、ローズに投げ付ける。束、床に落ちる。)

ロン 行こう、モナ。

(ロン、振り返って、左手の階段へ進む。)

クルト そう簡単にはいかんぞ、坊や。

(クルト、道を塞ぐ。ロンが止ると、ゆっくり威嚇するようにロンの方に進む。この時までにはロン、クルトの動きを見て、

素早い動作でタンブラーを取り、テーブルで割る。ギザギザの部分でクルトに向ける。()

クルト(笑う。)なかなかやるな、坊や。面白い。受けて立とうじゃないか。

(クルト、重い庭用の椅子を、片手で持ち上げる。)

クルト こういうことが出来る力がまだあるのは有り難い。

(クルト、もう一方の手を椅子にかける。椅子を武器として使う為である。)

クルト さてと、この成り行きはどうなるか。

ローズ(静かに。)(クルト、ロンにちょっとでも手をかけてご覧なさい。私は二度と貴方には会わない。分かりますね。

クルト その可能性を賭けて、やることになるか。

ローズ 可能性なんかではありません。二度と会いません。私がこういふ言い方をする時には嘘はないのです。

ロン(歯の間から、少し震えながら、クルトに油断なく目を配りながら。)(「命よりも貴方を愛している。」と言う時だけ、嘘は。

ローズ(静かに。)(そう。「命よりも貴方を愛している。」と言う時だけ、嘘は。

(ローズ、ロンに近づき、優しくタンブラーを彼の手から取る。この間にクルト、椅子を下ろしている。)

ローズ(金を指差して。)(さあ、それを拾いなさい。

ロン 拾うものか。

ローズ 貴方の意見を聞いているわけではありません。私は「拾いなさい。」と言っているのです。

(間の後ロン、屈んで紙幣を拾う。それから再びそれをロー

ズに差し出す。)

ローズ テーブルに置きなさい。

(ロン、置く。)

ローズ 貴方の鼻屑にしている慈善事業の団体の名前は？

ロン。貴方の名前で贈っておきます。ないのなら、私の鼻屑の団体に贈ります。

(ロン、態度を決めかねて、ただローズを見る。事の成り行きが気にいらず、何かを言いたい。再び事を引き起こしたい。しかしどうしたら出来るか分からない。ローズ、突然ロンに微笑む。)

ローズ(優しく。)(馬鹿ね、貴方って。

(半分囁り泣きをしながらロン、左手から走って退場。)

ローズ(急いで。)(モナ、あの人の面倒をみて。一緒にいてやって。何が起るか分からないわ、あの気分では。

モナ やってみるわ、出来るだけ。でも厭だわね、あんなヒステリー。手に負えるかしら。でもやるだけはやってみて・

ローズ ああいうのは扱いは易しいの。ちょっと優しい言葉かけのね、それだけ。

モナ オーケー。じゃあ、お休み。いけなかつたわ、こんなになって。でも私のせいじゃないのよ。

(モナ、ロンを追って退場。ローズ、急に椅子にくずおれる。ヘティー、保護者の顔でローズに近づく。)

ヘティー もうベッドね、ローズ。

ローズ まだ寝るなんてないでしょう。起きてきたばかりよ。気分もいいし。(笑う。)(今の見た？ ずーっと前から

こうしてやるうつつ決めてきたのよ。馬鹿な子。二、三千フランでやるつもりだった・・・それだつて随分効果はあつた筈だわ。それにそのくらしいの金なら、たいした事はないし。クルトからあんなに勝つて、頭に血が登つたのね。明日の朝のあの子の顔が見たいわ。馬鹿なことをした、慈善団体に寄付。三十七万五千も。スポーツシャツ、何枚でも買ったのに。こつよ、きつと。

(ローズ、早口に喋る。少しヒステリーぎみ。ヘティーは心配そうに、クルトは怒って、これを見ている。)

ヘティー 私、ちよつと上で休んで来る。貴女もよ、ローズ。

ローズ まだ休ませませんよ、ヘティー。(金を指差して)よく聞いて。明日、ここをきれいに引き払つて、私達がスイスに出発したら、貴女はこの金を封筒に入れて、あの子の楽屋のポストにつつこんで頂戴。今出ている場所は、カジノ中央劇場。

クルト どうしてそれを知っているんだ、ローズ。
ローズ 地方紙を見ていて、偶々知つたの。

クルト そつだろつな。君は何時だつてカジノ中央劇場での出しものは気になつてゐるんだ。それを見る為に地方紙を眺めるんだ。

ローズ(間の後。)私は見に行つてはいない。ドイツ流の皮肉の意味がそこにあるなら、ちゃんと書いておきます。

クルト 見に行つてはいない。しかし、行きたいという気持ちはあつた。出来たら。

ローズ 出来たら。そつ。あの子の踊つてゐるのはあまり

見た事がない。でも見たのはどれも素晴らしかつた。あの子がいいし、それにあのチームも。

クルト それに何故庇(かば)うんだ。「指一本触れても許しませんよ。」その癖、あいつには何一つ言いはしない。こつちの顔があつた割れたコップでめちやめちやになるのは平気なんだ。

ローズ(少しの間。怒りで語調強い。)負け犬に同情するのが女の気持ち。特にイギリス女の。感傷的な、女は。

クルト 感傷が過ぎないよう願いたいもんだ。

ローズ(立ち上がる。怒つて。)貴方、喧嘩がしたいの、クルト。お望みならいくらでも。こつちは爆弾を抱えている。

この世でヒステリーはロンだけだと思つたら大間違ひ。その気分がさせられれば、私だつてすぐなれる。それに今が丁度その気分。

クルト 療養所へ行くのがやはりいいんだな。それがいい考えなんだ。

ローズ そつ。そして貴方はもつあの会議に行く時間。(クルト、頷く。左手の階段に進む。)

クルト 帰つて来た時に軽いものが食えるようにしておいてくれないか。そつだな、一時間後ぐらいに。

ローズ 駄目。
クルト 駄目?

ローズ 貴方一人で食べるのならいい。あるいはヘティーとなら。勿論ヘティーの承諾が必要だけど。私はもう寝るの。クルト さつき気分がいいと言つたばかりだぞ。寝る気分じゃないと。

ローズ（声を上げて。）気分が変わったの。

クルト 君の部屋で、二人で食事を取るんだ。

ローズ それはしない。

クルト 何故だ。

（間。）

クルト 私は知りたい。何故なんだ。

ローズ（疲れたように。）当たり前じゃないの。カジノ中央劇場に行くの。ロンに会って、二人で街に行って、私の所へ戻って来て頂戴って頼むのよ。ああ、クルト。貴方って何て馬鹿なの。ここにはもう一生帰って来てはいけないうつて医者¹の敵命でしょう？ 私がロンに会うなんて、もう金輪際ないの。金輪際、いくら私が会いたいと思っただって。それに私¹が会いたいでも思っているの？ 本当に私がそんな事を望んでいるとも思っているの、クルト。今夜あの子に会って、一体私が楽しいとも思っているの？

クルト すぐに答えられる質問じゃない。人に嫉妬を起こさせる為に、他の男に会いに行く。その会いに行くのが問題じゃないんだ。感情だ、問題は。何故あいつにまだ、そんなに深い感情を持っているんだ。

ローズ 過去時制で話すのね。そうしたら答えます。

クルト（怒ってローズに近づく。）過去時制なんかで話しちやいない。「今時制」で話しているんだ。

ローズ 「現在時制」。

クルト（怒鳴る。）どうしてまだあいつに、そんなに深い感情を持っているんだ。今。

ローズ（肩をすくめて。）二日酔ね。

クルト 二日酔なら治る筈だ。

ローズ そう。時が経てば。これだって。

クルト 糞つたれ。もう三箇月も経っているじゃないか。

ローズ 心理学の教科書によれば、心理的錯乱の完全回復には六箇月を要す、だわ。（ローズ、クルトの手の甲を軽く叩く。）心配しないで、クルト。療養所で暫く暮らしさえすれば、きれいに元に戻るの。さあ、銀行の人達のところへいらっしやい。

（クルト、ローズに荒々しくキス。ローズ、無感動に抱擁を受け入れる。それからクルト、振り向いて左階段に進む。）

ローズ じゃあ、明日ね。

クルト（初めて淋しそうに。）あの色男に対して感じるその感情、それは私には決して向けられない。何故なんだ。

ローズ いつかは向くわ、クルト。まづ最初にお金を全部なくすのね。それから私の宝石すべてを質に入れる。その後で私の肩にすがって「助けてくれないか、ローズ。」と言う。こういう事態、ない事はないでしょう？

クルト 親父が言っていた通りだ。決して女とは関わりを持つな。あいつらは気遣いだ、阿呆だ。懲りるっていう事がないんだ。どんな事が起こったって。何がどうなったって。

（クルト退場。ローズ、疲れて、坐る。）

ヘティ ぁの人、貴女の言った事を真に受けなければいけない。銀行家にいいようにやられてしまったら大変。

ローズ 貴女、ロンに会って来てくれる？

ヘティ 駄目、それは。

（ローズ、ヘティに片手を出す。ヘティ、その手を取る。）

ローズ クルトと結婚しなきゃいけないのかしら、私。

ヘティー そう。はつきり言って、それしかない。

ローズ でないと、お金、もうなし？

ヘティー なし。すつからかん。

ローズ この家売つ払つたら・・・

ヘティー 売りに出してからもう五箇月経っている。何の引合もなし。

ローズ ロンとの頃、この家の代金で暮らす予定にしたのよ。憶えてる？

ヘティー 憶えてるわ。

ローズ あの時本気だった。誰かが買いに来ると思っていたわ。

ヘティー そうね。いづれにしる、ただでは手放さなかつたでしょうね、当然の事だけど。

ローズ じゃあもう絵しかなかったところね、売るものとしては。そしてあの車と。

ヘティー そう。それも相手の言い値で。

ローズ（微かな笑い。）そうね、慥に「小さな愛の巢」。それがせいぜい。期待していたよりもずつと小さな巢だったわ、きつと。

ヘティー それに、あの子が期待していたよりもずつと小さな。

ローズ（ヘティーを見上げて、優しく。）そつね、ヘティー。何時だってそついう風な事を言ってくれなくつちゃ。私の大事な解毒剤。

ヘティー それに最高の効き目がなくちゃいけない。（振

り返って。）私、ビールを貰う。

ローズ（呟く。）なまいきな子。私の顔目掛けてお金を投げ付けたりして。今頃は、自慢たらたら話しているところ。あそこの楽屋で。周りに男達を集めて。

ヘティー（飲み物の盆のところ。）それに女達も。

ローズ そう。女達も集めて。（ロンの口真似。）「俺があいつをどう思ってるか、ちゃんと見せてやつたんだ。俺をな、そこらに転がっているくだらんジゴロみたい扱えばどうなるか、見せてやつたんだ。」（興奮して。）「ちよつと待つて。違つわ。仕事場では、例の訛りを使うんだつた。（偽のロシア訛りを真似て。）「俺は背中をピンと立てて言つてやつた。マダム、どうかこの端金（はしたがね）をお受け取り下さい。そして、慈善団体にでも寄付なさるんですな。（ローズの声、だんだん力を失う。）「慈善団体ならどこへでも。」（涙が出てくるのをやつと抑えながら。）「おお、ヘティー。」（ヘティー、近づき、再びローズの手を取る。）

ローズ 私つたら、どうしてこんなにめっちゃめっちゃにちやつたのかしら。

ヘティー もう終、あの子が終なんだから。

ローズ（怒って。）ロンの事を言ってるんじゃないの。私の事を言ってるの。クルトの事を言ってるの・・・この罰あたりの私つていう人間の事を言ってるの。一体どうして私つたら、こんな人生を始めたの。今はもう憶えていない。私は家が嫌いだった。でも、家が嫌いな女の子なんていくらでもいる。くだらない雑誌の記事を山ほど読んで、富豪の貴族が貧しい女の子と結婚した話、華々しくつて甘美な国際結婚、

そしてその生活の話。でもこんなものを読む女の子だつていくらでもいる。私はエッジバストンよりカンヌが好きだった。ウエルフェアー・ステートよりフロリダが好きだった。こういう女の子が私一人だったのかしら。

ヘティー 違うわね、それは。他にもいたわね。

ローズ じゃあ、この三箇月以内に、クルトと結婚しなきゃならない女が、何故この私なの。

ヘティー 可哀相な百万長者夫人。

(間。ローズ、ヘティーを見上げて、微笑む。)

ローズ(ぶつきら棒に。) そうね、ヘティー。自己憐愍、感傷。馬鹿な事。ことある毎に貴女、私に言つわね。私が、自分のベッドは自分で作ってきた女だつて。それもかなり上等なベッドを。それにクルト以後は・・・これは請け合つわ。飛び切り豪華な、ヨーロッパいちのベッドになるわね。誰もそんなベッドを見た者はいない。天蓋つきの、裾飾りつきの、金の柱の・・・

(突然ローズ、言い止む。この時までにはロンがテラスに帰ってきている。)

ローズ(平静な声。) モナと一緒に帰つたんじゃないの。

ロン 道のはずれの所まで。そこでクルトが出て行くのを待っていたんだ。

ローズ 頭いいわね。何の為に帰つて来たの。お金？

ロン(咳く。) 違つ。

ローズ あそこにあるわ。欲しいなら。

ロン 金が欲しいんじゃない。それは君に受け取つて貰い

たいんだ。

ローズ そうね。その意図ははっきりしていたわ。じゃあ、何の為に帰つて来たの。

ロン 許して欲しいと思つて。

ローズ いいわ、許した。さあ、カンヌまではどうやって帰るの？

ロン それは考えていなかった。

ローズ ヘティー、タクシーを呼んで頂戴。カールトンから。私のつけよ。

ヘティー 分かつたわ。(ヘティー退場。)

ロン(間の後、低い声で。) どうして僕の事をそんなに嫌うんだ。

ローズ 私が貴方を嫌っているって？

ロン その筈だ。でなければ、言う筈がないじゃないか。

「何の為に帰つて来たの。お金？」 だの「私のつけよ。」 だの。人を傷つける為じゃないか、こんな言葉は。

ローズ そうね。そう見えるわね。

ロン もし僕らのうち、どっちかが相手を嫌わなければならぬとすれば、それは僕が君を嫌わなきゃならない筈だ。違つかない。

ローズ そうね。多分。

ロン ああ、ローズ。僕を嫌うなんて、どうしてそんな事が出来るんだ。そんなに嫌われるような何を僕はしたんだ。

ローズ 何もしないわ、ロン。

ロン 何かをやつたに違いないんだ。毎晩僕は考えた。それが何だつたんだろう。本当に、一体何だつたんだろう。

(間の後) 君に黙って注文した、あのセーター？

ローズ いいえ、ロン。セーターじゃないわ。

ロン じゃあ、僕が言った事で何かあるんだ。マルチネでやった口喧嘩？

ローズ いいえ、マルチネでやった口喧嘩じゃないわ。

ロン 何かがあるに違いないんだ。あの週に僕がやった事、言った事、僕は何十回も繰り返し繰り返し考えなおしてみた。だけど分からないんだ。いまだに僕には分からない。本当にあのセーターじゃないんだね、ローズ。

ローズ セーターじゃない。それは確か。

ロン じゃあ、何なんだ。

ローズ ただ好きでなくなったの、ロン。それだけ。

ロン そんな風にはならない筈だ・・・君は。僕が本当に何か厭な事をやらなくちゃ。僕には分かっているんだ。

ローズ どうして。

ロン 僕には君が分かっているからだよ。

ローズ 分かっているかも知れないわ。ひよっとすると、分かった事なんか知らないかも知れない。

ロン 分かった事があるんだ、一度は。隅から隅まで、僕自身の事のように。そうでなかったら、あんな風に僕が感じた筈がないんだ。

ローズ 感じたって、どんな風に？

ロン それは・・・幸せで・・・一緒にいるだけで・・・ほっとする気持ち・・・

ローズ ああ・・・そうね。

ロン 何か僕は酷い事をやったんだ。

ローズ(爆発するように) ああ、ロン。貴方ってなんて子供なの、いつまで経っても。何か事があると、何時だってそれが自分のやった何かに原因があるって考える。それで一生を過ごすつもりなの？ ただ好きじゃなくなった。理由なんか何も無い。ただ好きじゃなくなったの。こういう事はあるもの。しよつちゅう起きる事よ。

(ヘティー、家から出て来る。)

ヘティー タクシーは出たって。

ローズ 有難う、ヘティー。

ヘティー それから、フィオナのお迎えが来たわ。ボーイフレンド。「天国と地獄」へ行くのね。フィオナが玄関でお別れが言いたいつて。

ローズ(突然激しい調子で。) 行くもんですか。

ヘティー(奇妙だという顔。) 私は玄関の方がいいと思っただけけど・・・でもしこつちの方が・・・

ローズ ここだって厭よ。フィオナにさよならを言うなんてまっぴら。分かったわね。

ヘティー 分かったわ。

ローズ あの取り澄ました白雪姫。何時だって私の心を踏み付けにして行く。こちらはまだ母親らしく微笑んで、「じゃあ、フィオナ、これでさよならね。ここでの生活、楽しかった？ ロンドンから手紙を頂戴ね。健康に気をつけて。ママは貴女の事を思っているの。忘れないでね。たとえ貴女がこれからの三箇月間、これっぽっちもママの事を考えてくれなかつてもよ。」なんて、言うもんですか。ヘティー、こんな事、私は厭よ。

ヘティー 分かったわ、よく。じゃあ、何て言う？

ローズ ママはとてとても疲れてるって。それから、空港には電話するって。

ヘティー そう言うわ。

(ヘティー、退場。)

ロン 面白いな。

ローズ 何が面白いの。

ロン 僕の心は踏み付けにされている。しょっちゅうだ。違うとは言わせない。それでも僕はやって来る。微笑みを浮かべて。

ローズ 微笑みがあつたとは気がつかなかつた。

ロン それは言葉の綾だ。とにかく僕はここにいる。謝罪して、侮辱を甘んじて受けて。本当は君を嫌わなきやいけなんだ。軽蔑しなきやいけなんだ。そっちが僕にやっているように。(怒って。)僕はどうして君が嫌いになれないんだ。

ローズ 努力が足りないのね、多分。

ロン 努力？ 糞。どれだけ努力したか。これからもやってみるさ・・・心配はいらない。ただ・・・(声が途切れる)努力しても何故か無駄なんだ・・・どうしてか分からない。

(ロン、ローズに背を向ける。感情を見せまいとして。)

ローズ(声、怒りで荒々しい。)泣くんじゃないの・・・弱虫。泣くんじゃない。

ロン(急いで。)泣きやしない。大丈夫だ。ただ・・・長い事会ってなくて、顔を見たら・・・

ローズ(声、相変わらず荒々しい。)さっきの貴方の気分の

方がずつとまし。金を投げつけたり、鑊を割ったりの。

ロン あれは計算ずくだ。自棄(やけ)だったらあんな事はししない。冷静、沈着、それに男らしく行こうって決めていたんだ。何が起ころつても一步も引くもんか・・・昔のロン・ヴェイルだ・・・あの晩力ジノで君を見た、あのロン・・・憶えてるだろ・・・それもかなりうまく行っていた。それなのに・・・

ローズ それなのに？

ロン 君が出て来たら一遍に・・・

ローズ(相変わらず厳しく。)歯車が狂ってしまった。よく小説で言うわね・・・そして、何もかもがちくはぐに・・・

ロン そうだ。そんな風に言えるだろう。(素早く。)ああ、君は変わったよ、ローズ。慥に時々君は酷く厳しい言い方をした。しかしこんなじゃなかつた。今の君は僕が思い出したい君じゃない。

ローズ でもこの私が本当の私。この私を思い出すの。私を嫌うのに役に立つ筈・・・

ロン(悲しそうに。)役には立たない。それは分かつてる。

実際、多分、本当に誰かに惚れてしまつたら、その相手が何をしようとして、正体が何者か後で明らかになると、問題になんかならないんだ。そんな事はどうだつて構いはしない。僕を見れば分かる。今の今だつて、君の足元に這いつくばっている・・・君の人生のどこかにくっついていたいんだ。関わりを持ちたいんだ。気遣いみたいに。あの三百人の客の、その他大勢の中の一人でいたつていいんだ。あのドイツ野郎にいくら擲(からか)われたつて構わない。ただ君の見える所

にいられて、時々話が出来ればそれでいいんだ。(恥ずかしそうに。) ひどく男らしい態度だ。な? だけど、どうにもしようがないんだ。これがあるの儘の僕だ。この事を知ってくれた方がいいと思つて。

ローズ(追い詰められて。絶望的に。) 私がそんな事を知つて、何が良いの。良いつて一体どつという意味。

ロン ええい、他の女の子だったら許してくれようくれまいと、僕は気にするもんか。君はあんな態度をとつていんだ。放つておく筈なのに。

ローズ 放つておけばよかつたの。そんな貴方の気持ちなんか知りたくないの。私。あの女めつて、金輪際許すもんかつて、思つてくれた方がいいの。もっと意地を持ちなさい。

ロン 意地なんかないんだ。これはもう言つたけど。(問の後。) そうか、それなら言わない方が良かったのか。ただどうしても言いたくなる感情、どうしても相手に知つて貰いたくなる感情であるもんだ。

ローズ(しっかりとロンを見て。) 言いたくつても、言わなきゃいいでしょう。言わなきゃすむ事よ。それにその感情つて何? 貴方・・・愛つて言いたいのか? 愛を感じるつて?

ロン(頷いて。やつと。) そう。愛・・・だと思つて。

ローズ(笑つ。) 愛なんかないの、ロン。このあたり百マイル四方搜したつて、どこにもありはしない。愛つて、与える事よ。貴方、自分の生涯で取る事以外に何をやつたつていうの。車から始まつて、他人の愛まで、奪う事しかしてはいないの。(嘲るように。) 貴方が愛を感じる? 聞いて呆れるわね。

ロン この感情をどう呼ぶか、それは僕の勝手じゃないかな。僕は愛と呼んだんだ。

ローズ 愛であるもんですか。ただ私の人生にこつそり忍びこんで来ただけ。それも今度は裏口から。最初の時とは大違い。あの時は自信満々、雄鶏みたい。女は誰だつて俺に靡(なび)く。私だつて靡かせてみせる。この私だつて。そんな勢い。

ロン そうだつた、確かに。雄鶏と言えば雄鶏・・・この夏で僕は少し変わったよつた。

ローズ ええい、なんていう事。何を言つたつて貴方を怒らせる事は出来ないの。

(ローズ、素早く後ろを向く。ロン、驚いてローズを見つめる。)

ロン 君、僕を怒らせたいの?

ローズ 怒らせたい? まさか。貴方がどう感じようと、私の知つた事じゃないでしょう。私に何の関係があるの? そうでしょう。

(ローズ、声が上がつて、内心を表しそうになる。この時までにロン、数歩進んでローズに近寄つていいる。その時ヘティー登場。)

ヘティー タクシーが来たわ。

ローズ(呟く。) 助かつた。

(ヘティー、ローズの顔を見つめる。ローズ、相変わらずロンに背を向けている。ローズ、ヘティーに出て行くよう手で合図する。ヘティー、急に振り返り、退場。ローズが再びロンの方を振り向いた時にはローズ、部分的に落ち着きを取り戻

している。ローズ、テーブルの上の金を取り上げる。()

ローズ これ、持つて行つて。必要になる時があるわ。

(ロン、急に頭を振る。ローズ、テーブルに金を投げ戻す。)

ローズ もう私達会う事はないわ、ロン。明日は私、スイスに行く。そしてここにはもう決して帰つて来ない。

ロン ええつ。知らなかった。それは酷いや。

ローズ 何が酷いの。

ロン 僕にとつて、という事だけだ。これからがバレーのシーズンだ、パリでは。ひよつとしたら、見に来て・・・

ローズ(素早く。)ひよつとしてね。(明るく。)踊りはどう? ロン、最近。

ロン まあまあだ。来年はコーヴェント・ガーデンを狙つつもり。

ローズ 良かった。出られるといいわね。

ロン 出られたら、ロンドンで会えるかもしれない。ニューヨークでか。あそこにはみんな行くから。

ローズ そうね。

ロン(静かに。)君が僕の人生からすっかり消えてなくなるなんてあり得ない。僕に意地がないつて、さっき言ったね。

ただ、このまま消えさせはしないという事では、意地があるんだ。裏口からだつて構いはしない。そつだ、構つどころか、もともと僕はそのへんの生まれなんだ。

ローズ 生まれと言えば、私こそそのへんだわ。

ロン 君は地位を上げてきた。僕は上げてない。

ローズ さようなら、ロン。

ロン もう少ししてはいけなかな。

ローズ いいえ。駄目。

ロン 街ですることは何もないんだ。ただ、どこかで食事をとつて、寝に帰るだけなんだ。もう少し・・・

ローズ いいえ。駄目。人が来るの。そして・・・

ロン(微笑して。)そして、生まれの悪いロンには会わせたくないんだ。分かつた。よく分かるよ。黙つて出て行くさ。

さようなら・・・いや・・・じゃ、また、ローズ。

(ロン、階段の方へ進む。そして振り返る。)

ロン(心から不思議そうに。)だけど僕は本当に知りたいんだ、ローズ。僕が何をしたら君がそんなに変わつてしまつたのか。(ちよつと考えた後。)あの日のせいじゃないのかな。

君が僕に言つたじゃないか。僕はいつも海の中に、い過ぎるつて。君が浜辺で手を振つたつて、僕は浮き輪にのつかつて、知らん振りをしてるつて・・・

(ローズの顔、この時までではかろうじて感情を表に出さずにすんできたが、ここに来て突然、完全に崩れてしまう。急に両手で顔を覆い。後ろを向く。しかし涙が出ている事は、振り向く前にロンに見えている。ロン、ローズを見つめる。)

ロン じゃあ、この事なんだね。

(ローズ、涙にむせび、答えない。ロン、ゆっくりローズに近づく。)

ローズ(ロンの接近を感じとつて。)あつちに行つて。あ

あ、お願い。あつちに行つて。

ロン いや、君がこんななのに、行けるもんか。じゃあ、あれなんだね、ローズ。

ローズ(泣き声で。)違つわ。それじゃない。勿論それじゃ

あ

あ

・
ロンじゃあ、一体どうして・・・

ローズ どうもしない。疲れただけ、それだけ。ヘティーを呼んで来て頂戴。

ロン 駄目だ。ヘティーは呼ばない。(ロン、両手をローズの肩に置く。)

ローズ あっちへ行つて、ロン。お願い。

ロン いや、今はそれも駄目だ。

ローズ ああ、なんてこと。もうあと十秒。十秒さえもちこたえれば、それで終だったのに。どうして貴方、あの浜辺の話なんかしたの。

(ローズ、泣き顔の儘、ロンの方を向き、ロンの體を掴む。

ロン、ローズの顔を片手で持ち上げ、キスする。)

ロン 本当にあれが原因らしいと思つたんだ。

ローズ 馬鹿よ、ロン。ロンの馬鹿。

ロン どうして嫌いな振りをしていたんだ。

ローズ 振りなんかしていなかった・・・

ロン(まだローズを掴んだ儘。)まだ嘘をつこうつていうの? そんな事しても、もう無駄じゃないか。

ローズ そう。もう無駄ね。やつても無駄。

(ローズ、落ち着く。ロン、ローズを見る。眉を蹙める。何故か分からないという顔。)

ロン(爆発的に。)だけど何故なんだ。どうしてだ。車のこと、あんな酷い事を言つたり、何故なんだ。金だけが原因じゃない。他にある筈だ。僕には分かつている。

ローズ 分かつているって・・・どうして。

ロン 僕の大事なローズの事は、大抵の人よりはよく分かつている。ヘティーとかクルトよりも。でも何故なんだ。何故なんだ。

ローズ 馬鹿ね、ロン。大馬鹿よ。

(ローズ、ロンから離れる。煙草を取る。)

ローズ 分からないの?

(ロン、首を振る。)

ローズ そうね。これは無理ね。思いつくにしても、きつと最後の最後。貴方の為なの、ロン。

ロン 僕の為? 三箇月も僕をあんなに酷い、めっちゃめっちゃな気分させておいて、僕の為?

ローズ 私達、何箇月だなんて短い期間の事を考えたんじゃないわ、ロン。何年もの事を考えたの。何十年、いいえ、一生の事ね。

ロン 私達つて言つたね。君とヘティーが。

ローズ そう。ヘティーと私。

ロン また、あのお節介の・・・

ローズ あの人を責めないで、ロン。私なの、結局。私が決めたの。

ロン 僕にはよく分からない。

ローズ 二人で考えたの・・・いいえ、私が考えたの。それに、考えた事は正しいわね、今でも。万うまくいかなかった時、私よりも、貴方の方がもっと惨めになるだろうつて。

ロン 何故。

ローズ そう。多分・・・きっと、貴方は・・・挫折するだろうつて・・・

ロン 挫折？ 僕が？ 何を言っているんだ。自分の面倒ぐらい、自分でみるさ。

ローズ 雄鶏の意気ね、また。

ロン 挫折なんかしないよ、ローズ。本当だ、これは。それに実験済みじゃないか、もう。君に捨てられて、僕は自分でやってきた。淋しかった。食事は咽を通らない、よく眠れもしなかった。けどなんとかがやった。これは保証する。仲間の誰に訊いたっていいよ。実際、この三箇月のダンスの出来は、今までで一番よかつたくらいだ。

ローズ(ロンを見て。)それはよかつたわ。

ロン ええい、気遣いだ。馬鹿だよ。こんな事を考えるなんて。女だ。女の考えだ。八月からの僕の、あの酷い状態の事を考えてくれたら・・・勿論ここでは、陽気なパーティーが開かれていたんだろうな、連日。

ローズ パーティーはたいして陽気じゃなかったわ、ロン。少なくとも私には。

(間。)

ロン 何の理由もなく、自分で自分を苦しめていたんだ、二人とも。全く何の理由もなく。

(ロン、再びローズを抱擁する。)

ロン(やっと。)クルトはもう止めなんだね。

(間。)

ローズ(静かに。やっと。)ええ。

ロン そして僕と結婚だ。

ローズ それは駄目。

ロン 駄目じゃない。結婚だ。どうして駄目なんだ。

ローズ お金がないの。

ロン(笑つ。)金！(家を見上げる。)

ローズ 買いた手がかからないの。

ロン いいじゃないか。二人で住めばいいんだ。

ローズ(間の後。)そうね。住めばいいのね。

ロン 僕がバレーで稼いだ金で、食料その他を買う。それとも、もつと金になる仕事に替えたっていい。君が捜してくれば。

ローズ 他の仕事は駄目。ダンスよ、貴方は。どんな事があつても、貴方はそれから離れない事。

ロン そうか。まあいい。とにかく、生きていけるさ。

ローズ そうね。

(この時までにロン、飲み物の盆のところ歩いてる。)

ロン こうなったからには、乾杯しなくちゃ。それともまだ、本気で禁酒中？

ローズ いいえ。禁酒中だなんて、誰から聞いたの。

ロン ブランドー・ソーダ？

ローズ それも、弱くないで。(ロンに近づいて。)

結婚の事はもう少し待った方がいいと思つたよ、ロン。

ロン どのくらい？

ローズ そうね。二、三箇月。それ以上は待たなくていいけど。

ロン どうして。

ローズ だって・・・冬が過ぎてからの方が、結婚はいいんじゃない？

ロン 可愛いね。おセンチな台詞だ。特にそれを言ってい

る人の事を思つと。今まで、結婚はいつも春？

ローズ（微笑して。）これは特別。

ロン それならオーケーだ。（グラスを上げる。）じゃあ・
・その春を祝して。

ローズ（呟く。）その春を祝して。

ロン それから、「いぢめっこなし」って乾杯したいな。

たとえ僕の為にされるものでも、あれを聞く度に僕は、自分
分が生まれてこなきゃ良かったって気分になるんだ。

ローズ ああ、ロン。

ロン それに涙ももうお仕舞いだ。二人共流し過ぎだよ。

ローズ 嬉しくって泣く事だつてあるのよ。ねっ。

ロン（ローズの髪を撫でながら。）そう。それに、今夜遅
く、僕だつて、その涙なら流すだろう。だけど、これからは

二人一緒なんだ。微笑みを持つと。いつも微笑みを、だよ。

ローズ 努力するわ。いいえ、努力なんていらぬ。微笑
みの方が自然な筈。

ロン 僕らつて、本当に奇妙だね。同じ町からやつて来て、
求めあつているものは、二人でちゃんと分かつていて、どう
やったらそれが手に入るかも知つてゐる。そして突然、僕ら
が得たものは、全く当たり前ものじゃないか・・・僕が君
を、君が僕を、だ。天上にいる神様が誰だか知らないけど、
冗談がうまいよ、全く。君もそう思うよな、ローズ。

ローズ（優しくロンに微笑んで。）そうね、ロン。今まで
私、貴方の宇宙観、その解釈、に、賛成した事があまりなかつ
たわ。でも奇妙ね。今のは賛成よ。

（車置きのところから、しゃがれた声が響く。） Mais,

dites donc. Qu'est-ce qui a? On va attendre toute la nuit, ou quoi?

（おい、どうしたんだ。何やってんだ。一晩中待たせとくつ
もりか。）

ロン（怒鳴り返す。） On vient tout de suite. （すぐ行く。）

（振り返つて。） 送り返そうか、それとも一緒に乗つて行く？
そして街で一晩豪遊？

ローズ 街で一晩豪遊。勿論。

ロン（自信なさそうに。） よーし。だけど、君流の本物の
豪遊は出来ないぜ。

ローズ どうして。ここにあるのを見て、ロン。（テーブル
ルから札を摘み上げる。） そうだ、豪遊の後、残つたお金は
全部赤に賭けるの。そうよ、今夜は真つ赤。十回続けて赤よ。

それでお金の問題も解決。さあ、行きましょう。

ロン コートを着た方がいいんじゃないか。もう夜は冷え、
る季節だ。

ローズ そうね。じゃキャメルのコートを取つて来て。ど
れか分かるでしょう？

（ロン、頷く。）

ローズ 二階。筆筒の中。

ロン オーケー。

ローズ 行くついでに、ヘティーに言つて。立ち聞きはも
う止めて、出て来なさいつて。

（ロン、頷く。微笑んで退場。ローズ、ブランデーをこく
ごとと一息に飲む。その後、激しい咳。ヘティー登場。）

ローズ（咳の間から。） もう、貴女が出来る事は何一つな
いわよ、ヘティー。

ヘティー いいえ、あります。療養所の話をすればいいの。
ローズ それなら、私は違った風に話をする。あの人が信用するのはこの私。だってこちらの結論の方が、あの人が都合が良いんですからね。それに貴女は敵だし。

ヘティー 医者にも話して貰います。

ローズ（肩をすくめて。）何、それ、ヘティー。医者言う事にいちいち私、逆らってきたのよ。そして今まではいつも私の勝ち。

ヘティー（猛烈な勢いで。）貴女に話すんじゃないやありません。あの人に話して貰うんです。ここでこの一冬過ごせば、貴女の命がどうなるか、ちゃんと信じないではいられないように、話して貰うんです。

ローズ 信じないではいられない？ それは無理ね。医者は間違いをする。あの人はそれを知っています。貴女だって、私だって、知っている。今まで何度、私の事で間違っていたか。今度だって間違いかもしれない。

ヘティー 今度だけは間違っていない。それは貴女も知っていること。

ローズ 分からない。私はもう何も分からないわ、ヘティー。あの人だってそう。あの人だって、有り金残らず全部赤に賭けて平気っていう気分の筈よ。賭け方としては悪いやり方じゃない。賭ける時安全な方法なんてありはしない。こんな事、貴女に言うなんて釈迦に説法ね。

（ローズ、振り向き、ヘティーに優しく微笑む。）

ローズ 今度ばかりは貴女、逃げはしないわね。少なくとも冬が終わるまでは。

ヘティー（突然、今までの厳しさが急になくなり、悲しみで取り乱した年取った女性になってしまふ。）ああ、何ていう話なの、ローズ。こんな事をやるなんて、賭でも何でもありはしない。私達二人共よく分かっている。それは死つていう事なの。

（ローズ、ただ微笑む。）

ヘティー 無茶よ。無茶。無茶だわ。

ローズ（ロンに言った通りの台詞・・・一六四頁五行目のところ・・・の言い方で。）どうして？

（ローズ、優しくヘティーの絶望した顔を見る。）

ローズ 私には、もう手が配られてしまったの。今更下りる訳には行かないでしょう？

ヘティー 勿論下りるべきなのよ。もし賭けるといふ事の意味が・・・（言い止む。）

ローズ（静かに。）私が負けるという事ならって言いたいんでしょう？ でも本当にそうかしら。ここで下りて、貴女なら自分を誇りに思う事が出来る？ そんな筈はないわ。手が配られて、もうカードを握っているのよ。今さらルールを知らないなんて言えやしない。私、父親の膝の上でこのルールを習ったの。素面の時に父は私によく言ったわ。「なあ、ローズ。お前っていう奴は、まともな死に方は出来ない。こいつだけは確かだ。」って。そうだろうなとその時思った。そして、それから後もそう思っていた。でも私、ピューリタンだから、この「まともでない死に方」を酷く悲惨な、身の毛のよだつような風に考えていたわ。カンヌで、冬、自分の命よりも愛する男の傍で死ぬなんて、随分明るい死に方。命

よりも愛する・・・馬鹿な言葉ね。女の誇張じゃない。

(ヘティー、泣いている。)

ローズ ああ、ヘティー。お願い・・・

(ロン、ローズのコートを持って登場。ヘティーの傍を、彼女を見ないようすりにすり抜ける。ローズにコートを着せるのを手伝う。)

ローズ 有難う、ロン。丁度貴方の事を話していたところ。

ロン(当惑して。) 良い噂？

ローズ そう。貴方の自尊心だって、これなら満足の筈よ。

(ローズ、ロンにさつきから握っていた金を渡す。)

ローズ さあ、これを取って。マクシムで貴方が勘定をするのよ。みんな目を剥くわ。これが初めてでしょう？

ロン うん。これで正常に戻ったな。可哀相なロン。またいじめられてる。この金は僕のだって事、忘れたのかな。

ローズ 私にくれたんでしょ？

ロン うん。だけど、稼いだのはこの僕だ。

ローズ そつね、貴方が稼いで、私にくれた。(ローズ、ロンの怒った顔に微笑む。)(馬鹿ね、何が問題になるって言うの。今からは、私のもは全部貴方のものじゃない。)

(ローズ、ヘティーの方を振り向く。ヘティー、泣いている。ローズ、ヘティーに近づき、両手を両肩に置く。)

ローズ(微笑んで。)(ヘティー、ヘティー、お願い。私、とても幸せなの。)

(ローズ、ヘティーの頬に優しくキスして、ロンに近づく。ローズ、花瓶から赤い薔薇を取り、ボタンホールに差す。)

ローズ マクシムにはちょっと早過ぎるわ。港の、新しい

所で夕食にしましょう。それからモナがこの間話していたバーに行ってみましょう。アンティープ街のどこか。めちゃくちゃに酷いところ、とか言ってた。でも試してみしましょう。シアンなんとか、だったわね。

(二人、一緒に階段を降り始める。)

ロン 知ってる。シアン・ヌワールだ。

ローズ ヌワール？ あら、黒じゃ不吉かしら。でもいいわね。どうせ私は赤、赤ったら赤なんだから。そのバーの次には・・・そつね、何処に行こうかしらね・・・(この時まで二人、退場している。ヘティー、ローズの後から、どうしようもない、という仕草。)

(幕)

平成四年(一九九二年)七月二十四日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「熊美」の項 又は

<http://www.01.246.ne.jp/~tnouni/nouni1/default.html>

Variation on a Theme was first produced at the Globe Theatre,

London, on May 8th, 1958, with the following cast:

Rose Margaret Leighton

Hettie Jean Anderson

Ron Jeremy Brett

Kurt Gerge Pravda

Fiona Felicity Ross
Mona Mavis Villiers
Adrian Lawrence Dalzell
Sam Michael Goodliffe

The play directed by John Gielgud

Rattigan Plays The Trustees of the Terence Rattigan Trust
Agent: Alan Brodie Representation Ltd 21 1 Piccadilly London W1V
9LD

Agent-Japan: Martyn Naylor, Naylor Hara International KK 6-7-301
Nampoedaicho Shibuya-ku Tokyo 150 tel: (03) 3463-2560

These are literal translations and are not for performance. Any
application for performances of any Rattigan play in the Japanese
language should be made to Naylor Hara International KK at the
above address.